彼も彼女たちも偽物を欲しない

風来のアスカ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

３年になった比企谷八幡。その七夕の日から彼に降りかかった不思議な出来事。解決するために奔走する奉仕部の面々。その時比企谷八幡は何を選びとるのか…。

目次

プロローグ ―――――――――――――― 1
1章・比企谷八幡はぼっちとして間違っている。 ―――――――――――――― 8
2章・不思議と彼の周りは騒動が集まる ―――――――――――――― 15
3章・雪ノ下雪乃は一人悟り、決意する ―――――――――――――― 19
4章・彼女は後悔し彼らを羨む ―――――――――――――― 25
5章・比企谷八幡は誰にも答えず応えなかった ―――――――――――――― 29
6章・一色いろははあざとく、そして誰よりも臆病 ―――――――――――――― 35
7章・やはり比企谷八幡は捻くれているのだ ―――――――――――――― 39
8章・ガールズトークｉｎ奉仕部の部室（上） ―――――――――――――― 47
8章・ガールズトークｉｎ奉仕部の部室（下） ―――――――――――――― 52
9章・その少女は独り未来に期待する ―――――――――――――― 57
10章・由比ヶ浜と留美の邂逅 ―――――――――――――― 61
11章・相模南と開かずの部室 ―――――――――――――― 65
12章・この愛らしくも憎らしい中学生に祝福を ―――――――――――――― 71
13章・お姉ちゃんのことなんかぜんぜ

ん好きじゃないんだからねっ！ ―― 75
14章・からかい上手の陽乃さん
81
15章・小町がお兄ちゃんの出会いを求めるのは間違っているだろうか？
87
16章・最近、部長のようすがちょっとおかしいんだが。 ―― 92
17章・ゆきのんびより ―― 99
18章・城廻めぐりの憂鬱 ―― 105
19章・雪ノ下の冷徹 ―― 110
20章・奉仕部活動記録 ―― 116
21章・海老名ですが？ ―― 120
22章・折本語 ―― 125
23章・比企谷君と7人の美女 ―― 130
24章・ルミと八幡とちょこデート
137
25章・結衣は勉強が出来ない。
143
26章・さがみんの泣く頃に ―― 150
27章・ぼっち王子と笑いすぎな女子
157
28章・よんでますよ、一色さん
163
29章・川崎沙希は比企谷八幡に恋してる ―― 170

３０章・虎視眈々恋いろは　――　176
３１章・しあわせそうなサブレさん　183
３２章・結衣の名を　――　189
３３章・ゆきのさん@がんばらない　194
３４章・デート・ア・リーブ　――　201
３５章・実は私達は　――　208
３６章・やはり俺の青春ラブコメは…。　――　216
エピローグ　――　224

プロローグ

「…眠いな…」

3年になって早くも3ヶ月、今日は七夕だ。平日だから授業も当然あるが。仕方なくといった様子で俺はベッドから足を降ろし、ドアへ向かおうとする。

「おっにいちゃんー♪」

急にドアを開け入ってきた妹・小町。俺に似てはいるものの、俺とは違って人気があり、性格も明るい。総武高校に見事合格し、『生徒会』を手伝っているため教師からも生徒からも人望が厚い。無論男子生徒にも人気はあるが、手を出したら俺が全力で潰しちゃうよ?

「早くしないと遅刻しちゃうよー?寂しいお兄ちゃんの為に小町も一緒に行ったげるから。お、これって小町的にポイント高い?」

「高くねーよ、大体俺のチャリ目当てだろうに。」

小町が作った朝食を食べ、顔を洗って歯を磨き制服に着替え、自転車に股がる。晴れ渡る空を見て今日もいつも通りかと小町を後ろに乗せ自転車を走らせた。

何事もなく時間が経ち放課後になる。それぞれ部活に向かう者、帰り支度をする者、雑談を始める者、ザワザワとした教室が少しずつその音も小さくなっていく。そして一人の少女がこちらに向かって歩いてきた。

「ヒッキー、部室一緒にいこー。」

「おう…じゃあ先行っててくれ。俺はお前が行ってから行くから。」

「何で一緒にって言ってるのに先行かせようとするし!?」

「だってお前毎回いちいち掴まってくんだもん…暑いし…。」

由比ヶ浜結衣。俺と同じく『奉仕部』の部員でスクールカーストトップのメンバーでありながら誰にでも優しく、見た目も相まって男子人気がかなり高い。しかも柔らかい。主に胸が。うん、万乳引力は健在ですね。

「ヒッキー捕まえてないとすぐ逃げようとするんだもん、ゆきのんに怒られるよ?」

「ああ…あいつ怒らせるのはやべえな。」

マジでべーわーと心の中で戸部翔を登場させながら戦慄する。

雪ノ下雪乃。彼女もまた『奉仕部』の部員で、学校一と言われるほどの容姿を持ちながら、他人との関わりを好まず、クールさで由比ヶ浜とは違った男子人気を持っている。由比ヶ浜とは違って胸は…、…あーれれーおっかしいなー何か悪寒がするよー?…キモいな。

「…行くとしますかね…。」
「うんっ。」

「やっはろーゆきのん！」
「こんにちは由比ヶ浜さん。比企…ヒキオタニートくん？」
「…何で言い直してまで罵倒して来るんですかね…。」
「ふふ、ごめんなさい。こんにちは比企谷くん。」
「…おう。」
　雪ノ下は紅茶を3人分入れ、先ほどの席へと戻る。3年になったためか基本は部室では3人とも受験のための勉強をしている。由比ヶ浜は雪ノ下に教わりながらうんうん唸っている。それを見ながら俺はフッと微笑をこぼし、自分のノートへと目を移す。
「一休みしましょうか。」
「疲れたー、ゆきのん厳しいっ！」
「…由比ヶ浜が悪いだろ、主に頭が。」
「ヒッキーひどいし⁉」
「比企谷くん、言い過ぎよ。ちょっと理解力と読解力がないだけよ？」
「ゆきのんも結構ひどいし⁉」

「ふふ、冗談よ。由比ヶ浜さん以前よりはずっと出来てるわ。」
「ゆきのんのお陰だよ、ありがとうー！」
そう言って雪ノ下に由比ヶ浜は抱きつく。
「暑いわ由比ヶ浜さん…。」
そう言いながらも雪ノ下は笑顔を崩さず、無理に離そうともしない。雪ノ下さん甘すぎじゃないでしょうかね。まぁゆりゆりゆるゆりしてて俺の目にも甘いですが。うん、意味がわからんこと言った。反省している。
くだらないことを考えていると不意に部室の扉が開かれる。
「こんにちはぁ！」
一色いろは。去年1年生にして生徒会長になり、色々なイベントをこなしてきた総武高校での有名人の一人だ。かなりの容姿とあざとさで男子生徒をちぎっては投げちぎっては投げしていた結果、同級生の女子に反感をくらい、勝手に生徒会長に立候補させられた為、当初は落選させてほしいと依頼してきたが雪ノ下と由比ヶ浜が立候補してしまうなど様々な事情で俺が説得、生徒会長の座について貰った。…が、あんまり生徒会長の仕事してねーんだよなこいつ…。副会長ごめんね…。
「こんにちは一色さん。」
ノックもしないで来たのに一色にも甘くないですか雪ノ下さん？

「やっはろーいろはちゃん！」
「…。」
「せーんぱーい何で無視するんですかぁ？」
「そうだよお兄ちゃん、無視はいけないよー？」
「おう小町、お前も来てたのか。」
一色の後ろからピョコンと小町が顔を出す。あざといなぁ、小町はやはり最強だな！
「ちょ、先輩まだ無視するんですかぁ⁉」
「やっはろー小町ちゃん！」
「こんにちは小町さん。」
「やっはろー結衣さん！こんにちはです雪乃さん！」
雪ノ下は再び紅茶を入れ、それぞれの前に置いた。

「先輩今日は七夕なんですよー？」
「いや、知ってるから。なに俺のこと馬鹿にしてんの？」
あざとくて可愛いけどぶっ殺しちゃうよ？やらんけど。
「そんなわけないじゃないですかー。そうじゃなくて、何か駅前で竹を飾って、短冊配ってるらしいですよー。一緒に行きましょうよー。」

「嫌だけど。」
　葉山と行きなさい。
「早っ!?何でですかー!?」
「小町も行きたいから皆で行きましょう!お兄ちゃんもだよ?」
「…わかったわかった…。」
「先輩わたしが言ってもダメなのに小町ちゃんの言うことはすぐ聞くんですね!シスコン過ぎ、キモいです!はっ、もしかしてわざとわたしのこと冷たくしてわたしの気を引こうとしてますかそういうのは彼女になってから沢山してほしいのでちゃんと付き合ってからにしてくださいごめんなさい!」
　何で小町の言うこと聞いてるうちにフラれてるんですかね…。何言ってるのか面倒だから聞いてねーけど。
「あたしはいいよー!ゆきのんも行こう!」
「そうね。由比ヶ浜さんも比企谷くんも行くのだし、依頼も無さそうだから今日はもう部室を閉めて行きましょうか。」
　その後部室を出て、雪ノ下が鍵を閉め、職員室に鍵を返しに行っている間に小町と一色は生徒会室の方へ帰り支度をしに行った。…つーか一色はまだ生徒会の仕事あんじゃねーのか?…副会長ごめんね…。

俺は駐輪場に自転車を取りに行き、校門で４人を待って駅前へと向かった。

1章・比企谷八幡はぼっちとして間違っている。

駅前に着くとそこは人で埋まっていた。何本もの大きな竹に沢山の短冊が括られ、人々の笑い声がそこかしこで聞こえる。…遠くの方でぱねえわー、べーべーと聞こえるのは気のせいだろう。戸部自重しろ。

「凄い人だねー、あ、あそこで短冊貰えるみたいだよー！あたしもらって来るね！」

「小町も行きますよー結衣さん！」

二人は短冊を取りにトトトと走って行くと5枚の短冊とマジックを持ってくる。

「何書こうかなー？」

「小町はお兄ちゃんの為にお兄ちゃんにイイ人が出来るように書いてあげるよ！あ、今の小町的にポイント高い！」

「…いらねえし、ポイント高くもねーから。じゃあ俺は小町に悪い虫がつかねえように書くわ。あ、今の八幡的にポイント高いな。」

八万ポイント位だな、八幡だけに。

「うえ、お兄ちゃん気持ち悪いよ。」

「うっわ先輩キモすぎです。わたしは先輩に好きになってもらうように書いちゃいま

すっ♪」

キャルンっと決めポーズでこっちに言ってくる一色。あざといなぁいろはす。やっぱあざとすだな。

「おお書け書け、葉山に好かれるといいな。」

「もうー先輩適当に対応しすぎですよう！」

軽く頬を膨らませる一色。あざと過ぎてそのまま告ってフラれて泣いちゃうレベル。泣いちゃうのかよ。

横では何やらぶつぶつやはり猫かしら、パンさんも捨てがたいわとか聞こえてくるが、聞こえなかったことにしよう。

「あたしは書き終わったから括ってきたよー！」

さてなに書くかね。…ま、適当に書くか。

「私も書き終えたわ。瀬死谷くんは書けたのかしら？」

「何で死にそうなんだよ、…ああ書き終わった。」

「小町も書き終えました！」

「わたしもです♪」

今日は晴れ。澄み渡る夜空には天の川がハッキリと見え、これなら願いも届くかも知れねーなと呟く。由比ヶ浜と雪ノ下が笑いあい、小町と一色が兄が、先輩がと騒ぐ。こ

ういうのも悪くないとさっき短冊に書いた事を思い出す。
『俺の知りあい達の願いを叶えてくれ』
少し気恥ずかしいが、叶うかわからないもんだ、どうせならこのくらい願っても良いだろ。

帰り道サイゼに寄って飯を食べる。
「明日みんなでどっか行こーか！休みだし！」
「私は構わないけれど。」
「わたしもいいですよー♪」
「小町も大丈夫ですっ。」
「俺は行か」
「お兄ちゃんも大丈夫ですよっ！」
拒否権は無いようですね。ううっ、小町ちゃんひどいっ！…我ながらキモすぎだな。
「ヒッキー大丈夫？」
由比ヶ浜がこちらを心配そうに見てくる。
「…ああ大丈夫だ。どうせ暇だしな。暇すぎてカマクラみたいに猫じゃらしで遊んじゃうまである。」

「意味わかんないし。」
　由比ヶ浜はそう言って笑う。他のみんなも同じく笑い、明日どこ行こーかー？と話し合っている。…こんなの数ヶ月前には考えられなかった事だが、やっぱ悪くない。

「私は…私は雪ノ下家の人形じゃない！」
　雪ノ下は3ヶ月前、始業式の帰りに雪ノ下の家の前でそう母親に訴えた。何度も挫けかけた雪ノ下はようやく雪ノ下雪乃になれた。一度も雪ノ下家に逆らわなかった雪ノ下の訴えに雪ノ下の母親は折れ、あなたの好きなようにしなさいと優しく雪ノ下を抱いたあと、俺たちに微笑んで去っていった。
「私はディスティニーランドに行きたいわ。」
　雪ノ下の声に我に返る。…もう自分の意志を持てるんだな。
「良いですね！小町も良いと思います！」
「じゃあそうしよー！ヒッキーも良いでしょ？」
「めんど」
「勿論ですよっ！ね、ごみいちゃん？」
「…おう。」
　有無を言わせてくれないな、小町ちゃん。お兄ちゃんちょっぴり怖いんだが。

「せんぱーい、何でニヤニヤしてるんですかぁ？気持ち悪いですよぉ？はっ、もしかしてわたしを見てにやけてましたかわたしを見つめるのは付き合ったら沢山していいですけどまだ付き合ってないのでまずは告白してもらっていいですかごめんなさい！」

…いや何でフラれてんの？俺には微笑む権利も無いんですかね？後半聞いてないけど。

「一色さん、比企谷くんは元から気持ち悪い顔なのだからニヤニヤしていても特に変わらないわ。」

「言い過ぎじゃね？気持ち悪いのは否定しねーけど。」

「否定しないんだ⁉」

まぁ昔から言われて来てるしね、もう否定しても仕方ないしな。…なんか目から出てきたな。

みんなそれぞれ食べ終わり、帰る事になった。

「せーんぱいっ、奢ってください♪」

「いや何でだよ。」

ＳＵＮ値も失ったのにお金も失っちゃうの俺。

「…しゃーねーな。」

どうせ小町の分も払うつもりだったし、サイゼは安いからいいか。庶民の味方サイゼリア△

「あれヒッキー、あたし達のは良いのに。でもありがとーヒッキー！」

「気にすんな、こいつにだけ奢るのも全員奢るのも大して変わらないし。」

「私の分まで…ありがとう比企谷くん。」

「先輩どうもですっ♪」

「…ま、いつか俺にも何かしてくれりゃいいよ。」

「お兄ちゃんさすがだよ、小町的にポイント高いよっ！」

何のポイントなんだろうなー。還元されるのかね？

「さようなら。比企谷くん、小町さん。」

「じゃあねヒッキー！小町ちゃん！」

「先輩またです！小町ちゃんも！」

「ああ、じゃあな。」

「また明日ですっ！」

３人と駅でわかれ、俺と小町は自転車で帰る。

「…楽しかったねー、お兄ちゃん。」

「…ああ悪くないな。」
「みんなやっぱりイイ人だねっ！」
「…ああ。」
風を受けながら明日もこういう風になるのもいいかもな、と囁いた。

2章・不思議と彼の周りは騒動が集まる

ピピピ…ピピピ…

携帯のアラームが朝を告げる。今日は休日だが、ディスティニーランドに行く用事がある。少し早いが、目を覚まさなきゃいけねーな…でもあと少し…

「お兄ちゃん！朝だよ！ディスティニー…ってウワァァァァァァァ!!!」

何だよ小町…お兄ちゃんはまだ眠たいから叫ばないでくれよ…。そんなことを寝ぼけながら考える。

「お、お兄ちゃんがな、何人もいる!?」

小町も寝ぼけてるのか意味不明なことを叫ぶ。俺が何人もいるって気持ち悪いなー、そんな風に考えて小町へと話しかける。

「「「おう、小町…ん？」」」

何か俺の声反響してね？携帯のスピーカーでも入ってて小町の携帯から声が入ったのか？そう思いながら目を擦り周りを見渡す。ん？んんん？誰だコイツらは。みんな一様に死んだ魚みたいな腐った目をしてるが…ん？腐った目……俺じゃねえかアアアアアア!!

「「「ななななな‼なんじゃこりゃああああああああああ」」」

目を覚ますとそこには大量の俺がいた。何を言ってるのかわからんって？俺にもわからん。

「と、とにかく！お兄ちゃんが何人もいるのは小町にもビックリだし、気持ち悪いけど、まずは何でこんなことになったのか考えよ…お兄ちゃん昨日何かした？」

「「「んなこと言われてもわからん。」」」

「だぁぁ！一人で喋って！とりあえずベッドで寝てたお兄ちゃん！」

意味不明な発言にしか聞こえねーな…。しかしわからんもんはわからんし…。

「いやマジでわからん。昨日に原因があるのかもわからんしな。つーか小町お前さっき俺を気持ち悪いって言わなかった？」

お兄ちゃん泣いちゃうよ？

「そんなことどーでもいいでしょっ！今日はディスティニーランド行くのにどーすんの!?」

そんなこと…まぁしかし確かにそんなことではあるな。むしろどーでもいいまである。だがマジで何故俺が増えたんだ。一人は何か猫耳付けてるし。…我ながら猫耳とか気持ち悪いな…。

「と、とりあえず雪ノ下や由比ヶ浜、一色に連絡するか…。」

何ていやいいんだ…。

「はい！お兄ちゃんがちょっと大変な事になっちゃって、なので小町もお兄ちゃんを診てなきゃいけないので行けそうにないです、ごめんなさい！え、いえいえ大丈夫ですっ、ありがとです！」

小町が3人に連絡してくれてディスティニーランドに行くのは止めることになったが…どうすっかね…幸い明日も休みだから今日中に原因がわかれば後は少しずつ何とかしてけばいいが…。

ふと昨日の事を振り替える。昨日はいつものように授業を受けて、いつものように部室で受験勉強をしていただけだが…。いやそのあとに七夕の願い事を書いたか。しかし、俺の願いは『俺の知りあいの願いを叶えてくれ』、俺を増やしてくれ、ではない。やはり関係無いのか？知らないうちに影分身覚えちゃったのかな？しかもこの人数結構なチャクラあるね？いやねーよ。

それともミラミラの実の効果で偽物増やされちゃったか？ぼっち王に俺はなる！…ぼっち王ってなんやねん。

「お兄ちゃん結構大ごとなのに変なこと考えてるでしょ。」

「ば、ばっかお前俺がそんなこと…いやすいません考えてました。」
めっちゃ睨まれた。しかし…何人いるんだ?…８人か…そんなかで何故か一人猫耳をしてる俺…更に意味不明だ。しかもよく見たら尻尾まで付けてるし…。
そもそもコイツらに意思はあるのか?
「猫耳お兄ちゃんは何で猫耳してんの?」
猫耳お兄ちゃんと呼ばれた『俺』が返事をする。
「わからん。だがそもそも外れん。」
おお…まさに俺…。これって１週間毎日入れ替われば学校楽じゃね?…いや知識が共有されてねーしダメか…。
どうするか考えてうちに何時間か経った。その時インターホンが家中に鳴り響いた。

3章・雪ノ下雪乃は一人悟り、決意する

小町さんから突然連絡がきた。イマイチ彼女は事態を把握できていない様子で、それは比企谷くんに何かが起きた、ということだったけれど。しかしそれ以上の説明はなく、こちらもどういう状況なのかわからなかった。大丈夫だとは言っていたけれど、小町さんの様子は明らかにそうではないことを物語っていたし、私を雪ノ下家から救ってくれた比企谷くんのことも心配で、私は由比ヶ浜さんと一色さんには今日は残念だけれど中止にしましょうと提案し、彼の家に訪ねる事にした。

…何が起きたのかしら…。大丈夫だと言っていた以上は事故や突然の大病ではないのでしょうけれど、凄く心配だわ…。

ピンポーン。

比企谷くんのお宅に着いて、インターホンを鳴らす。少し経って、スピーカーから小町さんの声が響いた。

「…はい、比企谷です！どなたでしょうか？」

「雪ノ下ですけれど。こんにちは。」

「雪乃さん!?ちょっと待ってくださいねー!」
バタバタという足音が中から聴こえ、ガチャリと玄関の扉が開いた。
「雪乃さん！いらっしゃいませ！」
別段特に青い顔をしているわけでは無さそうだけれど、しかし焦ってはいる様には見える。
「どーしたんですか？」
「比企谷くんが大変だと聞いたものだから、お見舞いを、って思って…。それで小町さん？何があったのかしら。」
「たはは…実はですね…。」

小町さんから聞いた話はとても荒唐無稽で、信じるには難しいものだった。
「比企谷くんが八人に…？どういうことかしら…？彼は単細胞生物だったの…？」
「誰がアメーバだよ…。」
不意に小町さんの背後から声が聞こえる。
「あらミドリムシくん、居たのね。」
「動物ですら無くなっちゃったよ…。」

特に変わった様子は見られないけれど、ショックではあるのか、それともどうしていいのかわからないのか、元気は無さそうね…。

「こんなとこではなんなので上がって下さい！」

小町さんに中へと促される。

「ええ、ありがとう小町さん。」

比企谷くんの部屋へと行き、驚く。本当に比企谷くんが増えている…!!よく見ると猫耳している比企谷くんまでいる…!!私が猫耳の魔力に惑わされそうになっていると、その比企谷くんに話しかけられる。

「何しようとしてんだお前は。猫耳だからって惑わされ過ぎだろ…。」

そう言われて焦って手を引っ込める。

「な、何をいってるのかしら。ぜ、全然触ろうとなんてしてないのだけれど…。か、勘違いされるのは不本意だわ。」

顔が熱くなっている気がするけれど、気のせいでしょう。

「いや今手を…」

「気のせいよ。」

ニコリと微笑む。

「気のせいでしたすいません。」
素直に謝ってくる。
…少し可愛く見えてしまう。私は比企谷くんの事が好きだという気持ちにはもう気づいてしまっているし、猫耳なんて反則だわ。
猫耳の比企谷くんをついじっと見てしまうと彼は目を反らし恥ずかしそうに頭を掻いている。…何て可愛いのかしら…。そんなことを考えながら見ているとあることに気がついた。尻尾まで生えている…!!だがどうやら猫の尻尾ではないようだ。…どこかで見たことがある気がするのだけれど…。何の尻尾だったかしら…。
「尻尾まではえてるんですよー! お兄ちゃんなのに猫耳とか尻尾とか気持ち悪いですよね!」
そう言って小町さんが苦笑する。
「小町、お兄ちゃん泣いちゃうよ? なんなら号泣しちゃうまである。」
「猫の尻尾ではないようだけれど、どこかで見たことがある気がするの。どこだったかしら…。」
「ああ、そう言えばパンさんの尻尾みたいですねー!」
パンさんの尻尾…? まさか…?
比企谷くんに猫耳とパンさんの尻尾なんて、最強過ぎるわ…!!ズルすぎるわ比企谷く

ん…!!…コホン。

なんとなく原因がわかった気がするわ…。しかし確信は持てない…それにこの原因は1つだけではないみたいだし…。『彼女たち』にも訊かなくてはいけない。

「少し原因を探って見るわ…比企谷くん、小町さん。」

「ああ、すまんな。」

「ありがとうです雪乃さん！」

「ところで8人も比企谷くんがいるけれど、さっきから話をしてるのは1人の様だけれど。何か決めているの？」

「ああ、ベッドにいた俺を1番にして、適当に2～7番を付けておいた。猫耳は分かりやすいからそのままだが…で、1番の俺が基本的に話をするようにしてる。」

1番～7番…

「比企谷一幡から比企谷七幡だねっ！」

「八幡いなくなっちゃったよ…。」

…比企谷一幡…比企谷七幡……。

余りにも可笑しくて笑いを堪えようとするけれど耐えられなかった。

「…なに笑ってんだよ…。」

「ごめんなさい…余りにも可笑しくて…一幡…七幡…。」

「それでは私も原因を探って見るわ、小町さん、比企谷くんさようなら。」
「おう。」
「またです雪乃さん！ありがとうございました！」

さしあたってまずは二人に訪ねるところからね…。
「もしもし由比ヶ浜さん？ええ、今から少しいいかしら？そう、一色さんにも聞きたいことがあるの。どこかで会いましょう。」

4章・彼女は後悔し彼らを羨む

七夕、織姫と彦星が一度だけ逢うことが許される、そんな切ない日。仕事を怠けて神様を怒らせた二人ホントは逢うことを許されなかった。…うちに似ている。似てるだけで全然違うけどね。うちは許されるわけないから。

去年の文化祭、文実をサボって雪ノ下さんやアイツに全部押し付けて、アイツに文化祭のテーマで馬鹿にされて発奮したのに最後にあんな醜態を晒し、アイツに罵倒され、そしてまた発奮した。…ううん、発奮させられた。うちはその後アイツの悪口を言いふらした。アイツが全部悪いんだって。

体育祭でうちは遥とゆっこならわかってくれると、うちを評価してくれると思って、色々やったけど、ことごとくあの二人とは意見が合わず、結局体育祭も危なく出来なくなるとこだった。あの時にわかった。わかってしまった。アイツはうちがムカついたから、ただ腹が立ったから文化祭の最後やテーマ決めの時にあんなことを言ったんじゃなかった。全部自分を悪者にしてまで、全ての悪意を自分に向けさせてまでうちの失敗で崩壊しかけた文化祭自体を成功させたんだって。

…体育祭の後にそんなことに気付いたうちはアイツが、比企谷が気になってしまっ

た。葉山くんに憧れてたうちは何にも知らない、何にも持たない、ただ臆病で、小心者で、自分を認めてもらいたいだけの薄っぺらな奴だったんだ。周りもそんなうちを腫れ物に触るみたいになって、うちは自分から一人ぼっちになることを選んだ。

下だと勝手に見下してた比企谷はうちよりも自分を持ってた。友達だと思ってたのに壊れたうちと遥とゆっこより、比企谷はもっと強い関係を持ってた。

全然比企谷は下なんかじゃない。むしろうちよりも、ううん、葉山くんよりも凄いヤツかもしれない。

気になってからうちは比企谷ばっかり見てた。怠慢で文実という仕事を放棄したうちには比企谷に逢う、逢って謝る勇気さえ持てなかった。だからずっと、ただチラチラと見てるだけだった。織姫と彦星みたいに許されるわけないから。

比企谷を見てて、結衣ちゃんが比企谷と花火大会に一緒に居たのも思い出した。結衣ちゃんは知ってたんだ。比企谷がホントは凄いヤツだったんだって。あの時うちは結衣ちゃんも下だって笑ったけど、違う。後悔しても悔やみきれない。

3年になって、また比企谷とは同じクラスになれたけど未だにうちは一歩を踏み出せないでいる。あの時から一人ぼっちになったうちと違って、比企谷の周りには今、沢山の凄い人たちがいる。雪ノ下さん、結衣ちゃんは勿論、入学してからずっと有名になってる妹さん。去年の生徒会選挙で1年にして生徒会長になった一色さん。女子より可

愛いかもしれない戸塚くん。ちょっと怖いけど、意外と比企谷の近くでは乙女な川崎さん。2年の時は城廻先輩や雪ノ下さんのお姉さんまで比企谷の周りにいたし。そしてあの葉山くんも。それだけじゃない。三浦さんも、戸部くんも、海老名さんも比企谷を認めてた。

うちはダメダメだ。多分うちは今、比企谷が好きなんだ。だけど許されない。比企谷を認めもせず、勝手に見下してたうちにそんなことが許される訳がない。気持ちだってうちは雪ノ下さんや結衣ちゃんや生徒会長にも勝てないだろう。あの人達は比企谷に心から繋がりを求めてる。うちは謝る勇気さえ持てない、繋がりを怖がってる。

学校の帰り道、駅前で何かやってるらしく、ざわついてる。どうやら竹を飾って、短冊に願いを書いて括ってるみたいだ。…うちも書いて見ようかな。

比企谷に謝って、いや、あの時の比企谷の周りにいたみんなにも謝って、そして伝える勇気を貰えるように。

比企谷とみんなに謝る勇気と、この気持ちを伝える勇気を下さい

短冊にそう書いて誰にも見られない様に括りつける。…卑怯だよね。あんなことを比企谷にしたのにホントは許されない。でも織姫や彦星みたいに一度でいいから、一度だけでいいからそれを許されたい。そう願ってるんだから。

でも、今決めた。絶対にうちはもう逃げない。うちは、相模南は、比企谷やみんなに謝る。きっと誰もうちを許してくれないけど。謝らなきゃ始まらない。謝らなきゃうちは織姫になれないから。そしてみんなに謝ったらうちは比企谷にこの気持ちを伝えよう。フラれてもいいから、うちは比企谷が好きだって言おう。ズルいとみんなに言われるだろうな。お前は何様なんだって。比企谷にあんなことをしておいて、好きだって、言える立場じゃないだろうって。でも言うんだ。もう後悔はしたくないから。

5章・比企谷八幡は誰にも答えず応えなかった

「え…ゆきのん、それホント？」
「ええ、本当だし、私はあなたに嘘はつきたくないわ。」
　ゆきのんはあたしといろはちゃんにヒッキーがどうして今日急に行けなくなったか教えてくれた。でもいくらなんでもヒッキーが８人に増えたと言われて信じられるわけないよ！ゆきのんが嘘をつくわけないから本当だろうけど、ヒッキー…さすがに気持ちわ…あ、でもでも！それなら１人くらいヒッキー貰っても！…ってそんなわけにいかないよね。
「せ、先輩が８人に、って何でそんなことに…。雪ノ下先輩は理由がわかったんですか？」
　いろはちゃんもやっぱり驚いてる。そりゃそうだよね、人間がいきなり増えるわけないもん。
　でもどうやらゆきのんには考えがあるみたい。
「ええ。あくまでも私ながらに考えた結論で、自信があるわけではないし、予想の範囲なのだけれど。…多分原因は私達にある、と考えているわ。」

ゆきのんは真剣な顔でそう答える。…あたし達に原因って何だろう…何か悪いもの食べさせたかな？確かにあたしは料理がへ、下手だけど、最近はヒッキーにあげてないよ！

「何ですか？わたし達に原因って。先輩に何かしましたっけ？」

キョトンと音が聞こえるくらいに愛らしくいろはちゃんが首を傾げる。ヒッキーいろはちゃんに甘いから何かされちゃった、とか!?

するとゆきのんがはぁ、とため息をついた。

「…凄く屈辱的だし、あまり言いたくは無いのだけれど…。…わ、私は比企谷くんに惹かれているわ。その気持ちにも嘘は無い。…多分だけれど、それが今回の原因でしょうね。」

「ええ?な、何で急にゆきのん、恋ばなするの!?そ、それにヒッキーが好きなのが原因って!?」

「…だから言いたくなかったのよ…けれど、比企谷くんが今のままでいたら不便でしょう？どうやら8人の比企谷くんはそれぞれ意思がばらばらのようだし。」

「で、でもそれと雪ノ下先輩の告白に何の関係が…。しかも先輩が好きだって今まで一度も言わなかったじゃないですかー？何で急に…」

いろはちゃんの疑問は当然だと思う。ゆきのんはヒッキーが好きだって言うのは勿

論あたしは知ってるけど、ゆきのんからちゃんと聞いた訳じゃない。いろはちゃんどころかずっと一緒にいるあたしにだって言ったことはないし。

「先にも言ったけれど、私達に原因はある、と考えたからよ。…実は比企谷くんの分身の中に1人だけ猫耳とパンさんの尻尾をつけた彼がいたの。」

「何ですかそれ見たいんですけどどうしてわたしにも教えてくれなかったんですか先輩の猫耳とかヤバイじゃないですか雪ノ下先輩ズルいですすぐ見に行きましょう！」

「…い、いろはちゃん落ち着こうよ。ゆきのんそれがどうしたの？」

いろはちゃんの勢いにゆきのんがすっごく焦ってる。でも確かにヒッキーの猫耳とかパンさんの尻尾とか見てみたいかも！ゆきのんはコホンと咳払いをして話を続ける。

「…とても恥ずかしいのだけれど、昨日の七夕の短冊に書いたことが原因だと考えているわ。」

「短冊？ゆきのん何か書いたの？」

「え、ええ。…その、えっと、ひ、比企谷くんに想いを伝えたいって…。それと、猫とパンさんのグッズの事もつい書いてしまったわ…。」

そう言うとゆきのんは顔を真っ赤にして俯く。ゆきのん可愛すぎだよ！

「…予想の範囲と言ったのは、私の願いを叶えたのかもしれないと思ったからよ。科学的ではないし、根拠もないから。それに私の願いだけであんなに増えないもの。猫耳比

企谷くんも1人だけだし。」

そっか。ゆきのんそんなこと書いてたんだ。それから原因を見つけたんだ。…。あれ？ってことはあたし達に原因って言ったのってもしかして…。

「…正直に言って貰いたいのだけれど、あなた達はなんて書いたのかしら？」

ゆ、ゆきのん、笑ってるけど怖いよ…。でもあたしもゆきのんに隠し事したくないから言おう！

「ゆ、ゆきのん！あたし、あたしもゆきのんと同じだよ！」

「由比ヶ浜さんも猫とパンさんの尻尾の事を書いたの？」

「ち、違うよ！ひ、ヒッキーに告白したいって書いた…。」

うう…顔が熱いよー。

「ふふ、冗談よ。でもやはり由比ヶ浜さんも書いたのね。それで一色さんはどうかしら？」

それあたしも聞きたい！絶対いろはちゃんもヒッキーが好きだもんね！

「わたし、は、葉山先輩と、」

「一色さん？」

ゆきのんの声が凄く怖い…。いろはちゃんがヒッて涙目で小さく悲鳴をあげてるし。でも今のはいろはちゃんが悪いよね。隼人くんが好きだってもう嘘だってバレバレだ

もん。ここだけの話、サッカー部には生徒会が忙しいって言ってマネージャー業務やってないけど、奉仕部の部室にはほぼ毎日遊びに来るもん。

「はぁ…わかりましたよ！わたしも先輩が好きです！先輩に好きだって伝えたいって書きました！」

　こんなにみんなに好かれてるのにヒッキーは誰にも答えてくれないんだもんね…やっぱいろはちゃんもヒッキーが好きなんだ。…ヒッキーは誰かを選ぶのかな？それとも…。

「やはりみんなあの男に想いを伝えたいと短冊に書いている。だから多分、比企谷くんは増えてしまったのよ。まったく常識的ではないけれど、そう考えるのが妥当でしょうね。ただ…比企谷くんは８人。７人増えたことから、多分７人は短冊に同じことを書いた人が居ることになるわ…。私達は３人。一体あと誰があの比企谷くんに惹かれたのかしら…。」

　そう言われてあたしは１人思い当たった。

「…多分１人は沙希ちゃんじゃないかな？最近よくヒッキーの事を見てるし。」

「川崎さん？…そうね、川崎さんは比企谷くんにお世話になっているものね。」

「それにしても、先輩はこんなに沢山の可愛い女の子に好かれてるのに気づかないなんて、鈍感過ぎですよねー！」

違う、かな。ヒッキーは多分気付いてる。だけど昔あったことでそういうのに臆病になっちゃってるんだよね。自分に好意を持ってるなんて勘違いだって。好きでいる女の子の想いも一時の迷い、勘違いなんだって。…でもそんなの悲しいよ。

「ね、ヒッキーが好きな女の子集めて、みんなでヒッキーに告白しよう！も、勿論一人ずつだけどさ。だからまずは探そう！」

6章・一色いろははあざとく、そして誰よりも臆病

はぁ…雪ノ下先輩に睨まれてつい本当の気持ち言っちゃったけど、恥ずかしかったな…。わたしは先輩が好き。だけど、ずっと言わないでおこうって思ってた。

だって先輩は恋とか人からの好意にひねくれて返してしまうほど、そうゆうのを怖がってる。…ううん、違うかな、わたしが怖いんだ。結衣先輩も雪ノ下先輩も先輩と凄く強い絆を持ってるから。勝てるわけないもんね。

「せんぱーい、わたしはどうすればいいんですかー…？」

わたしはずっと恋愛なんて簡単で積極的にいけると思ってた。男子なんてちょっとあざとさ満点の上目遣いで頼めばわたしの願い事を聞いてくれる。それは勿論葉山先輩もそんなの効かなかったけど、でも葉山先輩は仕方ないよね。あんなに人気だもん。あざとい女性もきっと沢山いたんだから。

それでも葉山先輩を彼氏に出来れば誰にでも自慢出来るし、そういうステータスみたいなのも含めて恋愛だと思ってたし。

でもあの日、わたしは先輩のあの一言でそういうモノは偽物だって気づかされた。

「それでも、俺は本物が欲しい…!!」

本物…。葉山先輩への思いは想いでは無かったってきっとその時にはわかってたんだよね。ただ、違うって言われてるみたいで、悔しくてついデスティニーランドで告白しちゃった。あの時、わたしは葉山先輩にフラれて、悲しかったと同時に何だかホッとしてた。フラれて良かったって。

この恋だと思ってるのはただのステータスが手に入るってだけのそれへの憧れ。そうやって思ったら、葉山先輩に全然興味が無くなってる自分に気がついた。

「…責任、取って下さいね。」

あの時にとっくにもうわたしは先輩が好きになってた。最初は何でこんなに眼が腐ってるみたいな人に相談しなきゃいけないんだーって、でもあざとく言えば男子なんて簡単、きっとコロッと何でも聞いてくれるって思ってた。

でも先輩は、ハマらなかった。いくらあざとく言っても、照れはしても素直に聞いてくれない。何でこの人には効かないんだろうって不思議だった。でもそうやって接してたら少しずつ、先輩がわかってきた。

先輩は本当はすんごく優しい。わたしに対してもひねくれてはいても、最後は必ず、

「…わかったよ、やりゃあいいんだろう！」

って…恥ずかしそうに頭をボリボリ掻きながら聞いてくれる。何かこの人可愛い、と思ってしまった。

…わたしも相当にひねくれてるけどね。本当は構って欲しいだけなのに、つい先輩に甘えて変な事を言ってごまかしちゃうし。好きで好きで仕方ないのに、葉山先輩が今も好きだって言っちゃうし。

先輩が好きになってからわたしは、今までの様には男子をこきつかったり出来なくなっちゃった。先輩だけに、やってほしくて、聞いてほしくて。それで、生徒会を言い訳にしてドンドンサッカー部の方に行かなくなって気付けば奉仕部のドアの前に行っちゃう。

先輩は葉山先輩みたいに直ぐにパパッと何でも出来ちゃうわけでもない。女の子に人気のお店を知ってるわけでもない。女の子をエスコートして、女の子が好きそうな事をするわけでもない。…でも、わたしが持ってた荷物をさりげなく持ってくれるって手を出してくれたり、葉山先輩にフラれちゃった時も一緒に居てくれた。

いっぱいワガママ言ってるのに、どんなことでも適当にやったりしなくて、めんどくさくてやる気出ねえって言いながら、結局聞いてくれた。

結衣先輩も雪ノ下先輩も今日、ハッキリと先輩が好きだって言ってた。もう今までみたいにはいかないみたい。…短冊に書いたけどやっぱり怖い。二人とも先輩との気持ちの繋がりは強いし、何よりも一番先輩と深く関わってる。わたしは二人に勝てるんだろうか?…先輩に好きだって素直に言えるんだろうか?

「…こんなにわたしを本気にさせたんですから責任取って下さいね、せーんぱいっ♪」

明日からも先輩だけに、あざとく可愛い後輩でいてあげますねっ！覚悟しててください♪

7章・やはり比企谷八幡は捻くれているのだ

青春とは嘘であり、悪である。
青春を謳歌せし者たちは常に自己と周囲を欺き、自らを取り巻く環境のすべてを肯定的にとらえる。
彼らは青春の2文字の前ならばどんな一般的な解釈も社会通念も捻じ曲げてみせる。
彼らにかかれば嘘も罪とがも失敗さえも青春のスパイスでしかないのだ。
仮に失敗することが青春の証であるのなら、友達作りに失敗した人間もまた青春のど真ん中でなければおかしいではないか。
しかし、彼らはそれを認めないだろう。
すべては彼らのご都合主義でしかない。
結論を言おう。
青春を楽しむ愚か者ども・・・
砕け散れ。
「…君は私をバカにしているのかね？」
「…いえ、俺は平塚先生は尊敬してますよ。」

ヒュンッという風を切るような音が聴こえる一瞬前に俺の顔のすぐ横に平塚先生の拳が掠れる。あっぶねー、この人やっぱりヤバイな。

「…次は当てるぞ。」

マジかよこの人。昨今の体罰問題とか色々問題になってるっつうのに、平気で生徒にグーパンかますって、どこの上条さんですか。

平塚先生はふうっとため息をつき、椅子に座り直す。

「この作文は君が去年書いてきたものと同じだ。…何も変わらなかったのかね。」

「いや、変わりましたよ。歳も1つとりましたし、」

「衝撃のファーストブリットぉっ!!」

ドゴッ!という音が俺の腹に響く。

「ぐえっ。」

余りの痛さに漫画みたいな声が出ちまった。…つうか、またそれかよ。

「せ、先生も変わらないっすね…。」

そんな古いアニメの技叫ぶと年齢バレますよという言葉は怖いので口にはしない。これは逃げじゃない、戦略的撤退だ。…結局逃げてるじゃねえか。

「私も変わってはいるよ。で、何故君はまたこんな作文を書いたんだね?」

「本心だからですよ。やっぱりリア充は爆発すべきですよね。」

「…そんな逃げ口上が通じるわけがないだろう。君にも何人も友人と呼べる者が出来ただろう。」
そうですね、戸塚とか彩加とか天使とか。最後のはとつかさいかと読む。…戸塚しかいないね。
「…君ももうそのリア充と変わらんと思うが。…私は君の将来が心配だよ。」
俺も先生の将来が心配ですよ。…誰か早く貰ったげて。
心の中でそんなふざけた事を考えていると、平塚先生が立ち上がる。
「ついてきたまえ。」

平塚先生について歩く。やはり向かうのはあの特別棟だ。
「雪ノ下、いるかね。」
「平塚先生、ノックをしてください。…比企谷くんを連れてどうしたんですか?」
「いやすまん。この小僧がまたふざけた作文を書いたのでな。ちょっと雪ノ下に矯正してもらおうと思ってな。」
「小僧って…そりゃ先生の年れ」
「撃滅のセカンドブリットおぉっ!!」
ドゴオッ!

「ゴフッ」
　やべえ、何かデジャヴな上にドラ〇エで死んじゃう兵士みたいな声が出た。
「女性に年齢の話をするなと去年も教えたはずだが。」
「平塚先生、さすがに体罰はまずいと思うのですが…。」
　いいぞ雪ノ下もっと言ってくれ。
「今のは確かにそこにいる比企虫くんが悪いと思いますが、所詮虫の戯言ということで穏便に済ませてはいかがでしょうか。」
　…やはりお前も敵か。八幡に味方はいないのかしら。…ぼっちに味方がいるわけありませんでした、てへ。…おえっ。
「ヒッキー…。」
　やめて。憐れむような目で俺を見ないで。ってか由比ヶ浜も居たのかよ。…勉強してるから当たり前か。だが何故一色や小町もいるんでしょうか。
「まあそんなことは今はいいんだ。比企谷は君たちがいるというのにリア充爆発しろとか言っているのだよ。」
「先輩ひどすぎですよう、こんな可愛い後輩がいるじゃないですかー。」
「ああああざといあざとい。つうか、何で居るんだよ。生徒会どうした。」
「ええと、今日は雪ノ下先輩たちに相談がありましてー。」

なんだ、遂に俺をヤっちまおうとかそういう相談なのか。ダメ、小町を巻き込まないで！

「お兄ちゃん、いつも以上に眼が腐ってるよ…。」

「お兄ちゃん泣いちゃうよ小町ちゃん。俺を矯正ってなにさせる気ですか平塚先生。」

「うむ。ちょうどここに友人がくれたディスティニーランドのチケットがある。…真希のヤツ、私に誰かいい人と行きなよーとか自分は結婚してるからって…」

先生、そういうのは心の中で言ってください。可哀相過ぎて俺が哀しくなってきます。…誰かやっぱり貰ったげて！

「先生。」

「ああ、すまん。それで、だ。君もリア充らしくデートを経験すれば変わるだろう。行ってきたまえ。」

「いや俺は…」

「ゆきのん！いろはちゃん！ジャンケンしよう！あたし何か凄くジャンケンしたくなってきちゃった！」

「そうですね！わたしもジャンケンしたくなってきましたし、是非しましょう！」

「奇遇ね、私もよ。勿論負ける気はないけれど。」

何かジャンケンし始めたが小町は入れないのか？

「…やはり君はリア充だよ。ではな。」
　平塚先生は俺にチケットを2枚渡して去っていく。
「お兄ちゃん、小町は嬉しいよ。ううっ…。」
「何でだよ。つうか、お前はジャンケン入れてもらわないのか？」
「…お兄ちゃん、小町は悲しいよ。」
　小町がメッチャ睨んできた。何かしたっけ？
「…やはり私の勝ちのようね。そ、それでひ、比企谷くん、その、チケットを、も、貰えるかしら？」
「ん？ああ、ほらよ。」
　ディスティニーランドのチケットを2枚とも雪ノ下に渡す。
「…何故2枚とも渡すのかしら？」
「え、だって行きたいんだろ？だから…」
「はぁ…。比企谷くん、平塚先生は貴方を矯正させるためにそれを渡したのよ？私はそれを頼まれた。ならば貴方も行くに決まってるでしょう。ま、真に遺憾だけれど、頼まれたのだから、し、仕方なく貴方と行ってあげると言ってるのよ。」
「マジかよ…。」
「うう…ゆきのんにまけた…。」

「負けてしまいました…。」
ジャンケン位でどんだけショック受けてるんだよ。
「ああ、じゃあまあ次の日曜な。…あの問題も片付いて無いってのに…。」
「ええ。あの事については私達に考えがあるから大丈夫よ。」
「そうなのか?…原因わかったのか?」
「ええ、ただ少し準備がいるし、比企谷くんには手伝って貰えないから私達だけで進めていくわ。…理由があって原因も今は言えないの。でも必ず貴方を助けるから。」
「あ、ああ。」
何か恥ずかしそうにしてるが、気のせいか。…何かこっちまで恥ずかしくなってきた。
コンコン。
扉をノックする音が聞こえ、川、川、川なんとかさんが入ってきた。そういや弟の川崎大志も総武高に来やがったんだよな、小町狙いだったらヤっちまおう。…川崎って判明してるな。
「何か用事って聞いたんだけど。」
「川崎さん、こんにちは。…悪いのだけれど比企谷くん、今日ははずして貰えるかしら。」
「ん?ああ、わかった。じゃあまたな。」

「ええ、また。」
「ヒッキーバイバイ！」
「先輩また明日ですっ！」
「小町も帰りますねっ！お兄ちゃん待ってよー！」
「川崎もまたな。」
「え？あ、うん。また、ね。」
…川崎ってこんな感じだったか？

8章・ガールズトークｉｎ奉仕部の部室（上）

比企谷がいきなり挨拶してくるから焦った…。い、いや別にあたしは…って誰に否定してるんだあたしは。

っと、それより。

「…で、何か用なの？戸塚が由比ヶ浜たちが呼んでるって言うから来たんだけど。」

「率直に言うわ。川崎さん、あなたは比企谷くんが好きでしょう？」

「なっ……！」

何て事聞いてくんだ、雪ノ下のヤツ！

「隠さなくていいよ、沙希ちゃん。あのね、ここに居るみんな、…ヒッキーが好きなんだ。沙希ちゃんの態度見てればわかるし。」

ゆ、由比ヶ浜まで…。

いや、焦ってばっかだあたし！ひ、否定しなきゃ…。

「な、なんでそういう話になってんのか知らないけど、よ、用が無いならあたしは帰るよ…！」

否定出来てない！馬鹿かあたしは！

「悪いんですけどー、帰しませんよー！わたしも先輩のことさらけ出したんですから、川崎先輩、うーん…沙希先輩も言ってもらいますよ！」

な、何で生徒会長まで…！しかも扉の前に居るから出られない！

「安心して。別にあなたをどうこうするつもりはないの。…簡潔に聞きます。あなたは七夕の日、短冊を書かなかったかしら？」

「な、何で知ってんの？み、見たの？」

「いいえ。見てはいないわ。ただ、少し比企谷くんに問題が発生してしまったの。正直に言って貰わなければ、比企谷くんが困るのよ。それで、どうなのかしら？」

比企谷が困る…？さすがにそれは…。仕方ない、言うしか無いんだね。

「か、書いたよ。ひ、比企谷に気持ちを知ってほしい、伝えたいって…。で、でもこんなので何で比企谷が困んの？あたしが好きになったら…ダメ、なの？」

確かにあたしは結構暴力振るっちゃうし、睨んだりしてるけど…。

「ち、違うよ沙希ちゃん！あたし達もヒッキーが好きだよ！そうじゃないの、えと、ゆきのん！」

「ええ。実は七夕の次の日から比企谷くんが何故か増えたの。」

…は？比企谷が…増えた？

「あんた、ふざけてんの？」

「いいえ。私は嘘偽りは言わないわ。信じられないかもしれないけれど、これは事実よ。そしてあくまで憶測ではあるけれど、その原因として考えられるのが、七夕の短冊。私達の願いが原因だと思われるわ。理由は私の他の願いまでが増えた比企谷くんに影響を及ぼしているから。増えた比企谷くんは７人。つまり７人が比企谷くんに伝えたい事があるということよ。」

７人…比企谷が増えたってのも信じられないけど、その原因があたし達の告白したいって気持ち…？

「あ、あんたも比企谷に告白したいんだ？」

「…ええ。恥ずかしいけれど、私も比企谷くんが好きよ。」

あの雪ノ下が、ねぇ。噂だけでも相当な数の男子をフッてきたって聞くけど。ま、まあ比企谷は格好いいもんね、…って何考えてんだあたし！

「そ、そう…。由比ヶ浜はわかってたけどさ…。あんたや生徒会長まで比企谷が好きって、比企谷モテるんだ…。」

「え⁉あたしバレてたの⁉ど、どうしようゆきのん、みんなにもバレてるのかな…？」

バレてないと思ってたのかよ…。にしても、こんなに比企谷が好きなヤツいたらあたしじゃ勝てないんじゃ…。

「…由比ヶ浜さん、比企谷くんは気づいていないのだからそんなに気にすることは無い

わ。」
「そ、そっか。…うん、そうだね！ありがとうゆきのん！」
「苦しいわ、由比ヶ浜さん…。」
「それで？どうすんの？」
　増えたことと原因がわかったって対処出来ないんじゃ話にならないでしょ。比企谷助けないといけないし。
「まずは比企谷くんのことが好きな女性を探さなければいけないのだけれど。」
「そうだね。ま、それはわかるけど全員見つかったら？」
「告白するわ。」
「は？」
「告白するわ。」
「え？」
「…告白するわ。」
「なななな…!!」
　聞き間違いじゃないのかよ！比企谷に告白って、あ、あたしも⁉ヤバイヤバイヤバイ！告白なんて出来る訳ないでしょ！馬鹿じゃないの？
「ば、馬鹿じゃないの⁉ひ、比企谷に告白って⁉」

「…川崎さん、声が大きいわ…。…仕方ないでしょう？私達の願いは比企谷くんに告白する、なのだから。それを解消しなければ多分比企谷くんはこのままよ。」

そ、そっか…あたしがあんなこと書いたから…。…あん時のあたしをぶん殴りたい…。

「沙希先輩、先輩のこと好きな人に誰か心当たりありませんか？」

８章・ガールズトークｉｎ奉仕部の部室（下）

「沙希先輩。先輩のこと好きな人に心当たりありませんか？」
「え？ああ、うーん…。一人怪しいヤツなら居るけど…ただアイツは比企谷のこと嫌いだって思うんだけど…それに比企谷もアイツには関わりたくないと思うし…。」
　アイツはあたしもムカついてるし！
「沙希ちゃん誰かそういう人知ってるの？」
「由比ヶ浜も同じクラスだからわかるかと思ってたけど、そっか、あんたは三浦とかと一緒にいるもんね。あたしも比企谷と同じクラスなんだけどさ、ソイツいっつもコソコソ比企谷のこと見てるんだよ。」
「え⁉同じクラスの子⁉あたしわからないよ⁉」
　そりゃ由比ヶ浜は三浦達見てるか比企谷見てるかだけだもんね。あたしも比企谷を遠くから見てたから気づいただけだけど…。
「どなたかしら？今はどんな情報でもいいから知りたいの。教えて貰えるかしら？」
「…相模。」
「さがみん⁉」

「相模さん…⁉」

驚くよねやっぱ。

「その相模先輩？と先輩って何かあったんですか？」

ああ、この子はまだ比企谷のこと知らなかった時なのか。

「いろはちゃんはさ、去年の文化祭で文実に凄い嫌われものが居るって話聞いたことない？」

「えと、文実の他の女の子に凄く酷いこと言ったって。あと、テーマ決める時にも何かやったとか、2年に居るって聞きましたけど…。」

「それが比企谷くんのことなのよ、テーマ決める時は笑わせて貰ったわ、フフ。」

「ええ⁉先輩だったんですか⁉ああでも、先輩のことだから自分犠牲にして、何かやったとかですよね？」

「うん、正直言うとね、この話あんまりしたくないんだけど…。さがみんが実行委員長で文実自由参加にするってゆきのんやヒッキーとかに任せてほとんど来なかったんだ。あ、これは他の子から聞いたんだけどね。それでゆきのん倒れかけて…そんな時にヒッキーがテーマ決める時に『人～よく見たら片方楽してる文化祭～』みたいなこと言って来なかった人とかさがみんが怒って…参加するようにはなって何とか文化祭は出来る感じになったんだけど、さがみんがラストのスピーチから逃げちゃって。それを見つけ

たのがヒッキーなの。それからヒッキーはさがみんにやる気出させる為に隼人くんやさがみんの友達の前でわざとさがみんに酷いこと言って自分を悪者にしたんだって。それが2年で嫌われものが居るって噂の真相…。その後も体育祭でさがみんと色々あって…。」

今聞いてもムカツク。比企谷のおかげで文化祭出来たのに。まあ比企谷もやり方はダメだったかもしれないけどさ。

「そう、なんですか…。でもでも！先輩はやっぱ先輩ですね！どうせ『仕事だからな…俺がやりたいからやっただけだ、気にすんな。』とか言ってホントは雪ノ下先輩が心配だっただけな癖に捻くれたんですよね？」

「フフっ、その通りよ。」

「あはは、いろはちゃん似てる！」

「ぷっ、あんた、比企谷好きすぎでしょ。」

一色だっけ。こいつもやっぱ比企谷が好きなんだ。良く見てる。…ライバル強いな…。

「…それで？どうする？」

相模はムカつくけど比企谷が好きだったら必要なんだろうし…。

「さがみん…かぁ…。あたしも止められなかったから悪いけど、やっぱりあの時のはさ

がみんやりすぎだと思うし…。」
「…私は、相模さんに尋ねるべきだと思うわ。」
やっぱ雪ノ下はそういうだろうね。
「わたしは正直に言うと嫌ですっ。先輩や雪ノ下先輩に迷惑かけたのに先輩をひどい目にあわせておいて、先輩が好きだなんてふざけてますよ！」
うわー…こいつあざとい。わざとらしくプクーッて頬膨らませてるし。でも可愛いからこういう方が比企谷はいいのかな。
「あたしも雪ノ下に賛成…かな。ムカつくけど今は比企谷のことが一番大事でしょ。」
「さ、沙希ちゃん…ヒッキーが一番大事って…。大胆…。」
「ちょ…そ、そういう意味じゃないからっ！」
由比ヶ浜、ぶん殴りたい…。
と、とにかく！
「問題を解消するためにも！あたしから相模に当たってみるから。」
「先輩の為ですもんねー♪」
「あん⁉」
「ひっ、結衣先輩助けてくださいー！」
はぁ…まあいいか。

「じゃあね、あたしは帰るよ。妹とか待ってるから。」
「ええ。さようなら。」
「沙希ちゃんまたねー！」
「…沙希先輩またです…。」

9章・その少女は独り未来に期待する

――こんなくだらないものがあるんだって、私は知らなかった。少し前の私は、いつものように家を出て、そこに向かって駆けていく。そして仲のいい子達と笑いながら話してた。

――くっだらない。

自分も含めて全部がくだらない。クラスの女子はみんな私を見てクスクス笑う。だけど、その前は私もあっち側だった。気持ち悪く相手を笑い、話しかけても無視をする。こんな関係がくだらなく見えるのも当たり前だった。

あの日私は林間学校に行った。私は行きたくはなかったけど、お母さんにバレたくなくて、意地を張ってカメラまで持って。

そこで、八幡に会った。死んだような、腐って見える目。その目は、すでに私みたいな期待も持ってなくて、周りを完全に隔離してた。私は中学校に入ればもしかしたら、なんて少しは期待しちゃってた。でも、違うと知った。

「残念ながらそうはならないわ。」

八幡の横にいた女の人。凄く綺麗で八幡なんかとは違った意味で孤独な人。その人

が、中学校に行っても何人かは必ず同じ学校に来て、結局同じようになるって。
私はやっぱりそうなんだ、って諦めた。
八幡はそんな関係なんていずれ薄れてくって言ってた。どんなに友達が出来ても、大人になればそんなのは1人2人残ればいい方だって。
林間学校でも色々あったけど、その後は私は結局一人を選んだ。お母さんは少し悲しんでたけど、私が決めたから。
クリスマス、また八幡に会った。相変わらず捻くれてるみたいで
「俺の方がもっと上手く一人を出来る。」
とか変な事言ってた。でも多分あれは八幡の優しさなんだと思う。一人で居るって楽だけど、やっぱり何か寂しいと思う自分もいることに気づいたから八幡の優しさにも気づけた。そして私は八幡に劇の主役をやってみないかと言われてやったんだ。上手く出来たし楽しくて、久々に笑えた。…まあ一度一人になったら戻れなかったけど。
中学校に入って、クラスの女の子がまた標的になった。あの時林間学校で同じ班だった子は別の学校に行ったけど、違う班の子は大体居たから、まだ続けてるんだって思って気持ち悪くなった。
「…いつまでくっだらない事してんの？」

我慢出来ずに、クラスで言ってしまった。

「…小学生じゃあるまいし、いつまでやってんの。あんたもさ、何で何もやらないの？ばっかみたい。」

私はその後、またクラスで陰口をされた。対象がその子から私に変わる。…その子は違う子と仲良くなったけど、一人にはならなかったし、そういうことをしてる奴等からは離れられたんだろう。

ある時、その子からお礼を言われた。あの時はありがとうって。あんな言い方をした私に対して優しいねって言って去っていった。ああそうか、八幡もきっと優しくしてくれてたんだ、って初めて気づいた。

八幡はぶっきらぼうに言ったけど私が寂しく見えたから、あんな言い方だけど話しかけてくれたんだ。

八幡もそうなんだ。

そう思ったら私はあることに気づいた。

八幡に会いたい。会ってまた変な話をしたい。でもこの気持ちが何なのかわからなくてお母さんに聞いた。お母さんはびっくりしたけど、恋だって教えてくれた。会いたくなって、話をしたいなら、それは好きになったって事だって。

全然会えなくて、七夕の日、ちょっと用事で行った総武駅の前で竹に短冊を括ってる人達がいた。

ー八幡だ…！

妙に嬉しくなって、呼ぼうと思ったら隣にあの時の女の人達や知らない女の人に囲まれてて胸が苦しくなった。

それを無言で見送って、私も短冊にお願いを書いた。

ー八幡にまた会って沢山話をして、私の気持ちを言いたい。

それから私はちょこちょこ総武駅に出掛けたりした。そして、

「留美ちゃん？」

あの時八幡が八方美人だって言ってた女の人に会った。

１０章・由比ヶ浜と留美の邂逅

「留美ちゃん？」

その後ろ姿には見覚えがあった。鶴見留美ちゃん。去年奉仕部でお手伝いに行った小学生の林間学校。そこで彼女はひとりぼっちだった。

あたしには助けたくても方法がわからなくて、そんな時、ヒッキーは助けるんじゃなくて、周りもバラバラにしてしまうやり方で彼女を助けた。

クリスマス、また一人でいた彼女にヒッキーは劇の主役に抜擢して大成功に導いた。その後彼女は笑顔ではいたけど、どうなったんだろう？

「えっと、どうしたのかな？」

「…八幡。」

ヒッキー？ヒッキーに何かされちゃった⁉…ヒッキーめぇ～、こんなようじょにまで手を出すなんて～、なんて心のなかで怒ってたら留実ちゃんが話しかけてきた。

「八幡に、…お話があって…、その、会いたくて…。」

えっ⁉もしかして、もしかしなくても、留美ちゃんまでヒッキーに⁉何かされた訳じゃなくて、え～とでもされたことには変わりなくて？？？？？あれ？ま、まあいっか！それよ

り！
「ヒッキーに会いたいんだ？」
「ヒッキー？八幡のこと？」
「え～と、うん！そう！あのね、もしかして…ヒッキーが好きなの？」
　最後の方は小さな声できく。そしたらちょっとクールでゆきのんぽかった留美ちゃんがカァーッってまるでこれもゆきのんみたいに真っ赤になる。あー…やっぱり恋しちゃってる。もうヒッキー！どんだけ女の子おとしてるのさ！
「実はね、ちょっと困った事が起きてるんだけど、ヒッキーを助ける為にもしかしたら留実ちゃんが必要かもしれないんだよね。留美ちゃん力貸してくれる？」
　そう留美ちゃんにたずねる。
「…八幡何か困ってるの？それなら助けなきゃ…前のお礼もあるから…。」
　うん、今前のお礼「も」って言ったね。やっぱり好きだから助けたいんだなー。あたしもそういう気持ちわかるし。
「うん！お願い出来るかな。ただあたしはそのー、ちょっと馬鹿だから説明が下手というか…明日またここに来てくれるかな？ちょっと連れてきたい人がいるんだ。」
「あ、確かにアホっぽいもんね。…うん、いいよ。八幡に会えるなら…。」
　うむむ…中学生にまでアホっぽいって…。確かにはっぽーびじんの意味知らなくて

後からゆきのんに聞いてヒッキーに怒ったけど…。しかも最後にぽしょっとヒッキーに会えるならって…好きすぎでしょ！

「じゃ、じゃあ明日もこの時間に来てくれる？」

「…わかった。…八幡に会えるよね？」

「うん！大丈夫、会えるよ！明日は難しいけど、明後日から総武高校とかにも来れるかもだし、帰り道もこの辺通るだろうから。」

そう言ったら留美ちゃんぱぁーって凄く嬉しそうな顔してた。うーん、やっぱりゆきのんみたいだけど中学生なんだなー！可愛い！

「それじゃあ明日だね！あ、あたしは…」

「結衣。」

「ほえ？」

「結衣、でしょ？」

「う、うん！覚えてくれてたんだ。」

「…うん。一応。」

一回くらいしか言ってないし、あんまり話してないのに凄い！…あたしより頭良いかもしれない…。

「じゃあ結衣、明日ね。」

「うん！じゃあね！留美ちゃん！」

…あれ？呼びすてにされてる？…ま、いいか。ヒッキーも八幡って呼びすてにされてるもんね。さて、ゆきのんに相談だ！

11章・相模南と開かずの部室

はあ…七夕に短冊書いて、勇気出すって思ってたのに未だに謝りに行けてない…うちってやっぱり小心者だったんだなぁ…。比企谷の近くに行ってもごまかしちゃうし。昨日なんて話しかけようとして、

「ひ、ひき…」

「ん？相模か…何かよ…」

「引き締まるなぁー！あはは…。」

「??」

って…。何だよ、引き締まるって…怪しすぎだろうち…！せっかく比企谷が返事しようとしてくれてたっぽいのに、何してんのよー…。そんで今日もどうしようか悩んでたらもう放課後だし…。誰にも手伝って貰える訳もないし。はぁ…何かしばらくいたけど…帰ろ。

「相模。」

「ふぁい！」

ビクンッって音が出るくらい驚いた。最近誰とも話してなかったから。誰かと思っ

て振り向くと…

「…なんでそんなビビってんの？」

「川崎…さん？」

「何？あんたもあたしの名前覚えてないの？」

いきなり訳のわかんないことを言ってくる川崎さん。何かうちしたっけ…？川崎さんに怒られるような事はしてないはず…。

「え、いや覚えてるけど…な、何の用…？」

「ああ、うん…ちょっとね。ここじゃなんだからさ、ちょっと付いてきてよ。」

ええ⁉呼び出し⁉やっぱりうち知らないうちに何かしたの⁉怖い怖い怖い！

…でもとりあえず付いていかなきゃ…怖いよぅ…。川崎さん不良じゃないけど、態度が怖いというか…。

そうして付いていくと、ある場所の前に辿り着く。去年2回ほど訪れた、あまりいい覚えがない場所。うちが何度も来ては扉の前で立ちすくんで逃げ帰った場所。…奉仕部の部室。遂に今まで開けられなかった場所。

コンコン。

川崎さんがノックをして、扉を開く。え、何？うち遂に復讐されるの？比企谷によく

もーって…。ダメだ終わった。
「相模連れてきたけど。」
「そう、ありがとう川崎さん。」
「沙希ちゃんありがとう。」
あれ？比企谷いない…。うちがキョロキョロしてると雪ノ下さんが話しかけてくる。
「相模さん。あなたに話したい事があるの。」
ひっ。雪ノ下さんが凄く真剣な顔で言ってくる。…話って、やっぱりあれだよね、うん。…謝るぞ！
「ごめ」
「ごめんなさい。」
…へ？なんでうちが謝られてるの？
「ゆきのん⁉」
「文化祭と体育祭の事だけれど、私の力不足だったわ…依頼を受けたのに不甲斐ない…あなたにも、比企谷くんにも辛い思いをさせたわ…。」
「ちょ…雪ノ下さん！」
あれは全部うちの落ち度だ。雪ノ下さんは関係ない！
「…文化祭も体育祭もうちが招いた結果。それはうちの罪であって雪ノ下さんは責任を

感じる必要はない！…ずっと謝らなきゃって思ってて…ごめんなさい！とにかく雪ノ下さんは悪くない！…うちが勝手に雪ノ下さんの力に甘えて文化祭を壊しかけたし、体育祭もうちの見通しが悪かったから、…みんなに迷惑をかけたの。それは勿論あの時は比企谷にあんなこと言われて腹が立ったけど、…今ではあれがうちを救って文化祭を成功させるためだったんだってわかった。うちにこれ以上、罪を増やさないで欲しい。わがままだなってのはわかるけど、雪ノ下さんのせいにさせないで。うちは実行委員長は自分の意志でなったし、それは雪ノ下さんに勧められたからじゃなくて、うちの傲慢な考えからだったんだから。みんなにうちを見てもらいたい、結衣ちゃんよりも上でいたい、なんて考えてたから…。雪ノ下さん、結衣ちゃんごめんなさい！」

「…さがみん…。」

あ、あれ？何か目から…な、何でうち泣いてんの⁉

「…そう。わかったわ。相模さん、ありがとう。」

そう言って雪ノ下さんはにっこり笑う。…やっぱり雪ノ下さん可愛い…。

「わたしは許したくないですけど…先輩はあの後絶対傷ついてた筈ですし。」

生徒会長…。比企谷にも謝らなきゃいけないけど…この子も比企谷好きなのかな。

「…比企谷にも謝りたいんだけど…今日はいないの？」

「比企谷くんには帰って貰ったわ。…少し彼に聴かれるのを憚られる話があるから…。」

「はば、か…?」

結衣ちゃん…高校生なんだからそこは…。比企谷に聞かれたくない話ってなんだろ？川崎さんが少し赤くなってるけどどうしたのかな？

「相模さん。」

「へ、あ、はいっ！　」

急に話しかけられて変な声出た…最近うちコミュ障になってる…。

「尋ねたいのだけれど、…あなたは比企谷くんが好きなのかしら？」

「え？」

顔が熱い。雪ノ下さん今何て言ったの？比企谷が好き…？えええええええ！

「な、何で⁉」

声が裏返った…。死にたい…。ていうか何でそんな事聞いてくるの？比企谷を好きになるなんてどういう神経してんだよってボコられちゃうの？雪ノ下さん笑顔だけど、それが怖い！に、逃げたい…！

「正直に言うとここにいるみんなヒッキーが好きなの。さがみんはどうなのかな？」

「す、好きだとどうなるの？」

生徒会長も川崎さんも二人もやっぱり好きなんだ…。

「何もしないわ。むしろ協力して欲しいことがあるの。実は…」

その後雪ノ下さんは色々語ってくれた。…比企谷が増えた？

「ど、どういう事⁉何で増えたの？」

「…それでもうひとつ尋ねるけれど、正直に答えてちょうだいね？あなたは七夕の日、短冊に比企谷くんに告白したいと書いてはいない？」

な、何で知ってんの⁉雪ノ下さんエスパー⁉でも…正直に答えよう…それが何かの贖罪になるのなら…。

「か、書きました…。」

顔が凄く熱い！

「そう、やはりね。相模さん。比企谷くんが増えてしまった理由はその短冊に原因があるの。私達も同じ事を書いているから。そしてそれは比企谷くんに告白しなければいけないという事でもあるのだけれど。とにかく、比企谷くんに謝るなら協力はします。けれど、告白は少し待って貰えるかしら。まだ、短冊を書いた人を全て見つけられた訳ではないから…。とにかく、今日は解散しましょうか。だいぶ遅くなってしまったし。」

「そだね、さがみん頑張ろうね！」

結衣ちゃん…。そっか。告白してもいいんだ。

「ありがとう…みんな…。」

１２章・この愛らしくも憎らしい中学生に祝福を

由比ヶ浜さんに頼まれて、今日は鶴見さんに会いに来た…のだけれど…。
「こんにちは。鶴見さ…」
「…八幡は？」
…何故この子は私に挨拶も返さず、比企谷くんを探しているのかしら？
「…留美ちゃんやっはろー。ヒッキーは今日来ないって言ったよ？」
「そう…で？結衣じゃなくてえ～と…雪乃が説明してくれるの？」
「え、ええ…それはそうなのだけれど、何故あなたは私を呼び捨てにしているのかしら？」
中学生に呼び捨てにされる謂れは無いのだけれど。
「…別に。仲良くしたいわけじゃないから。」
ふふふふ…この子はどうやら私に喧嘩を売っているようね…。
「ゆきのん⁉怖いよ⁉」
「ふぅ…まあいいわ。ところでここではなんだから、あそこの喫茶店にでも行きましょう。」

「…という訳なの。比企谷くんが単細胞だから増えてしまったという可能性も無いわけではないでしょうけれど、七夕の短冊が最も高い可能性を持っているわ。鶴見さんあなたも書いたのでしょう?あの短冊に。」
「書いた、けど…八幡に会いたかった、から…。」
　真っ赤になってるわね…私の小さい頃に似てるしやはり可愛いわ…比企谷くんがロリコンである可能性も否定出来ないから…もしそうなら不味いわね…。コホン。
「早急に対処したいけれど、残念ながらまだ一人見つかっていないの。見つかり次第連絡するから連絡先教えてくれるかしら?」
「…結衣ならいい。」
「え、あたし?」
　…前言撤回。可愛くないわ。
「何故?」
「雪乃は同じぼっちだとあの時は思ってたけど、性格が怖そうだから。」
　…やはりこの子とは決着をつけなければいけないようね…。
「ゆ、ゆきのん落ち着いて!」
「あら、由比ヶ浜さん?私は落ち着いているわよ?」

「ひぃー…ゆきのん怖すぎるよぉ…。」

由比ヶ浜さんが失礼なことを言ってるけれどまずはこの子ね…。

「鶴見さん。そんな態度では残念ながら協力出来ないわ。当然比企谷くんにも会わせない。比企谷くんは奉仕部の備品なのだから。」

「…ばっかじゃないの？」

こ、この子…！

「ま、まあまあ二人とも落ち着いて。あたしが連絡するから。ゆきのんもそれでいいでしょ？」

「ま、まあ由比ヶ浜さんがそう言うのなら…。」

由比ヶ浜さんには何故かあまり逆らえないのよね…。何故かしら…。

「結衣はアホだから、気をつけてね。」

「留美ちゃんひどいし⁉」

はぁ…。大丈夫かしら…。

「と、とにかく今度比企谷くんに会える日を伝えるわ。それまでは待っていてくれるかしら。」

「…いいけど。早くしてね。八幡に会いたいから。」

鶴見さんも比企谷くんが好きなのだから…許すとしましょうか。…比企谷くんは最

後に誰を選ぶのかしらね。誰を選んでも、たとえ鶴見さんを選んだとしても、私は祝福出来るのかしら…？

13章・お姉ちゃんのことなんかぜんぜん好きじゃないんだからねっ！

鶴見さんとの話を終えて家路につく。

今日は色々話をしたいからと由比ヶ浜さんがお泊まりに来てくれた。…誰とも仲良くなれずにいた私と、友達に、親友になってくれた由比ヶ浜さん。同時に一番のライバルでもあるけれど…私はとても感謝している。去年のバレンタインデーの後、比企谷くんはこう語った。

「…これはひとり言だが…俺は今、こんな状況が正直幸せに感じてる。俺からあんなことを言った手前、悪い。だけど結論を急いでお前らに、二人にテキトーに答えたくはないんだ。だから、いつか必ず決めるから、それまでは奉仕部でいて欲しい。」

彼はひとり言だと言っていたけれど、私達二人に言っていた。気づいてはいるんでしょうね。でも彼はそういう気持ちに臆病な人だから…ひとり言だと言ったんでしょう。私も由比ヶ浜さんもそれを受け入れた。本当は決めて欲しかったけれど、明確に彼が自分の意思を表示した以上は受けようと二人で決めた。…今年はライバルが増えそうだけれどね。

「あと一人だね～。さがみんや留美ちゃんまでそうなんだってびっくりしちゃった。あ、ゆきのん今日はありがとうね、あたしだったら説明しづらくて。あはは…。」
「いいのよ、由比ヶ浜さんも頑張ってくれてるし、とても助かっているわ。」
　ピンポーン。
　誰か来たのかしら？営業とかじゃなければいいのだけれど。
「由比ヶ浜さん、ごめんなさい。はい、雪ノ下ですが。」
「ひゃっはろー。雪乃ちゃん元気？」
　ね、姉さん⁉な、何をしにここへ…。
「何の用かしら…。私は姉さんを呼んだ覚えがないのだけれど。」
「ん？私は用事あるよ？雪乃ちゃん今日は何月何日か覚えてるかな？」
「…７月１２日だけれど…。」
　何の日だったかしら…。そう言えば姉さんも比企谷くんの事を…？
「とりあえず入れてくれる？ちょっと用事済ませたら帰るからさ～。」
　仕方ない…確認の為にも姉さんには聞かなくては。
「陽乃さん…だよね？どうしたのかな。」
「わからないけれど、もしかすると比企谷くんに…。…姉さんいいわ。入って。」
「ありがと。」

「で、何の用かしら。」
「ひゃっはろーガハマちゃん。雪乃ちゃん冷たいな～。」
「陽乃さんやっはろー。」
一体何をしに来たのか…不安だわ…。
「ん～。さて雪乃ちゃん。5日前は何の日だったかな？」
5日前…七夕。比企谷くんが増える原因になった日…。
「あ…。」
「ど、どうしたのゆきのん？」
「姉さんの誕生日…。」
すっかり失念していたわ…。一応4月の時に手助けはしてもらえたからプレゼントは買ってはいたけれど…比企谷くんの事で頭がいっぱいだったし…。
「そうだよ～。雪乃ちゃんお姉ちゃんの誕生日忘れたのかと思って悲しかったよ～。ま、気にしてないけどね。それで久しぶりに祝ってもらいたくって来ちゃいました！」
「陽乃さん誕生日だったんですね、おめでとうございます！プレゼントはないですけど…。」
「ありがとうガハマちゃん！大丈夫だよ、雪乃ちゃんと仲良くしてくれれば。ね？」

姉さんはそう言ってにっこり笑う。４月のあの日から姉さんも以前は見せない様な笑顔を見せてくれる。比企谷くんと姉さんが母さんに熱心に訴えてくれて私は本音を母さんに言えた。その事には感謝している。そしてそれは姉さんもまた母さんに本音を言えた日だったのかもしれない。比企谷くんが姉さんにも何か影響を及ぼしたのかしらね。

「ね、姉さん。私からもおめでとう。それとこれ…。」

そう言って私は持ってきた紙袋を渡す。

「んん？何かな？雪乃ちゃんからのプレゼント？」

「え、ええ。最近ちょっと困ってて…忘れていたわけではないの。その…４月の事もあったから姉さんには感謝してるわ。これはそのお礼も兼ねて…。」

「おお～。ありがとう雪乃ちゃん！大好きだよ～。」

姉さんが抱きついてくる。く、苦しい…。

「さてさて、何かな？お、おおお⁉綺麗なネックレスだね～。雪乃ちゃんありがとう～。形はヘンテコだけど嬉しいよ♪」

「似合ってますよ陽乃さん！」

私が渡したのはちょっと変わった形のネックレス。タイガーズアイという変わった宝石。意味は高潔とからしい。姉さんっぽいと思ったから。形は…ちょっと目付きの

悪い、やさぐれているような猫の形。…比企谷くんにちょっと似ているそんな猫の。
「ふんふん、比企谷くんっぽいね～。これ。」
　な、バレてる⁉
「ゆきのんそうなの⁉」
「それは違」
「嘘はダメだよ～。雪乃ちゃんは嘘つきじゃないでしょ？私は雪乃ちゃんのこと何でもわかるんだからね？」
「くっ…。」
　迂闊だったわ…。
「そ、そうよ！悪いかしら！姉さんには比企谷くんの様に少しはひねくれたりしてぼっち？の気持ちを知ってもらいたいからよ！」
「雪乃ちゃん…ぷっ。素直に自分の好きな男の子みたいに私も少しは信頼してくれてるって言ってもいいんだよ～。」
　くっ…。顔が上気しているのがわかる。
「ゆきのん可愛い～。」
「そ、そんな事はいいのよ！そ、それより！姉さんに話があるの！」
「ん？何かな？雪乃ちゃんから話なんて珍しいね。」

１４章・からかい上手の陽乃さん

私に雪乃ちゃんが訊きたいことねぇ…。比企谷くんのことだろうね、雪乃ちゃんわかりやすーい。

「比企谷くんの事なのだけれど…」

やっぱりねー、しかもちょっと俯いてるから比企谷くんを取られないか心配なのかな？

「比企谷くんがどうかしたのかな～？」

どうせちょっかいかけないでとかそのくらいだろうな～。

「比企谷くんの事、好きなのかしら？」

…？雪乃ちゃん今、何て言ったの？

「え～と、雪乃ちゃんもう一回良いかな？」

「比企谷くんの事、好きなのかしら？と言ったのだけれど。」

あれ～？やっぱり聞き間違えでは無いみたいだね～。雪乃ちゃん、嫉妬かな？比企谷くんが私のこと好きだった、とか？

「なになに雪乃ちゃん、比企谷くんを私が好きだったら何かまずいのかな？取られちゃ

うって思ってるのかな～？」
　ニヤニヤしてそう言うと、
「な…！そんな訳無いでしょう！何故私がひ、比企谷くんを、と、とられりゅ、るなんて嫉妬しなくちゃいけないのよ！」
　焦ってる焦ってる。楽しいな～。雪乃ちゃんが焦ると凄く可愛いからね～。
「おやおや～？何でそんなに焦ってるのかな～？」
「～!!」
　雪乃ちゃんは顔を真っ赤にしてちょっと涙目でこっちを睨んできた。ちょっとやり過ぎたかな。
「ふふふ、冗談、冗談だよ。それで雪乃ちゃん。私が比企谷くんが好きだったとして何かあるの？」
「はぁ…。だから姉さんを家に入れたく無かったのよ…。まあいいわ。…比企谷くんが七夕の次の日から８人に増えたわ。」
　ん？８人に、増えた？雪乃ちゃん頭おかしくなっちゃった？
「だ、大丈夫？雪乃ちゃん、熱でも出たの⁉」
　そう言っておでこを触れてみるが特に熱はないようだ。
「姉さん。私がそんな嘘やふざけた冗談を言うわけ無いでしょう。これは事実なのよ。」

「でも比企谷くんが増えたって言われてはいそうですかって信じられるわけないよ～。」
「ならこれを見なさい。」
　そう言って携帯の画面を見せてくる。
「猫耳パンさん尻尾の比企谷くんＬＯＶＥ？なあにこれ？雪乃ちゃんの惚気？」
　雪乃ちゃんはカァーッと音が聞こえるくらいに真っ赤になる。
「ま、間違えたわ…。」
「ゆきのん今の何⁉見せて！」
「何でもないから！離しなさい由比ヶ浜さん！」
　ふむふむ、どうやらガハマちゃんにもナイショであんな画像にあんなこと書いちゃったみたいだね。ぷっ。
「こ、これよ！」
「ゆきのん後で絶対見せてね！」
「お～。本当に比企谷くんが８人いる～。それでこれと私が比企谷くんを好きかどうかが何か関係あるの？」
「七夕の日私達は短冊にあることを書いた。ひ、比企谷くんに告白したいと。」
　そこまで言って更に赤くなる雪乃ちゃん。んー可愛い！
「わ、私が書いたのはそれに猫が欲しい、パンさんのグッズも欲しい、って書いたのだけ

れど…どうやらそれが」
「さっきの比企谷くんラブラブ画像って事ね。」
「違うと言ってるでしょう！」
　いや～書いてたし。否定しても無駄なのに。
「あ～、でも私は関係ないかな。私そんなこと短冊に書いてないし。そもそも私彼氏いるしね～。」
「「え⁉」」
　あ～やっぱ驚いたか。そりゃ言ってないからね。
「同じ大学の男の子なんだけどね、すっごく純粋なんだよね～。弄りがいがあるって言うか…比企谷くんがもっと素直で可愛いげがある感じ？なんだよ。ま、弄ってるうちにちょっと好きになっちゃった、みたいな。私も雪乃ちゃん達のお陰で外面気にしない様になれたしね。」
「姉さんいつの間に…。」
「陽乃さんおめでとうございます！」
「ガハマちゃんありがと～。雪乃ちゃん、私はちゃんと母さんにも伝えたよ。雪乃ちゃんもちゃんとしなきゃね。」
「え、ええ。」

雪乃ちゃんはそう言って頷く。
「さって、それはともかく。雪乃ちゃんさっきの画像もう一度見せなさい！」
「あっ、そうだよゆきのん！ずるいよ、あたしにも見せて！それとあたしにも画像ちょうだい！」
「ちょ、姉さん、由比ヶ浜さんやめ、やめなさい！」
ガハマちゃんと協力して携帯を雪乃ちゃんから奪う。
ガハマちゃんに雪乃ちゃんを捕まえて貰ってる間にさっきの画像を見つけて表示した。
「ほらほらガハマちゃん！比企谷くんが凄いことになってる上に凄い文字を書いてるよ～。雪乃ちゃん凄いな～。」
「うわぁ…ゆきのんずるいよ～。ヒッキーはまだゆきのんのじゃないんだから！」
「くっ…もういっそ殺しなさい…！」
雪乃ちゃんは諦めた様に目を逸らす。よしっ決めた！
「帰ろうかと思ったけど、今日は雪乃ちゃん家に泊まろう！」
「なっ…！」
「雪乃ちゃんに色々聞かなきゃね～。」
「あ、あたしも！ゆきのんに色々聞く！そんで画像も貰う！」

「も、もう勝手にしなさい…。」

今日も雪乃ちゃんは可愛いな〜。

15章・小町がお兄ちゃんの出会いを求めるのは間違っているだろうか？

はいはーい小町ですよ～。比企谷小町、最近のブームは我がごみいちゃんこと比企谷八幡のお嫁さん、つまり私のお姉ちゃん候補探し！こっそり雪乃さんと結衣さんといろはさんから聞いた情報によると、お兄ちゃんが増えた理由は七夕に原因があるとか⁉ななななんと、お兄ちゃんに告白したいという願望がお兄ちゃんを増やしたとからしいですっ！これは小町的に相当ポイント高いですよっ♪

で、今日も今日とてお姉ちゃん候補の一人、いろはさん率いる生徒会にお邪魔させて貰ってるんですが…。

「先輩が～、先輩で～、先輩だから～。」

いろはさんお兄ちゃんの話ばっかりで仕事してない（笑）副会長さんと書記さんもラブラブイチャイチャしながら　仕事してますが、正直大変過ぎますね～（笑）で、いろはさんから色々聞いたところ、お姉ちゃん候補は今5人、大志くんのお姉さんこと川崎沙希さんと、文化祭でお兄ちゃんと一悶着あったらしい相模南さんって人らしいですよ。

「小町ちゃんはわたしの味方してくれるの?」
「え～と小町はお兄ちゃんの味方なのですよ～。なので、いろはさんの味方というよりはお姉ちゃん候補のみなさんの味方です。」
「そうなんだ～。小町ちゃんが味方だったらやりやすいんだけどな～。」
　いや～、しかしあのごみいちゃんにこんなにお嫁さん候補が出来るなんてびっくりだな～。あ、勿論嬉しいびっくりだけどっ。
「いえいえ、いろはさんが必要な時は協力しますよ～。それもお兄ちゃんのためです。」
「お～。ありがと～小町ちゃん♪」
　それにしてもお姉ちゃん候補は綺麗な人ばっかりでお兄ちゃん目移り沢山しそうですね!いろはさんも凄くモテるのに、お兄ちゃん以外には結構キツい事言うしね。戸部さんとか（笑）噂をすれば戸部さん登場!
「ちょ、いろはす～、俺に仕事任せて自分は話しまくりとかずるくね?」
「わたしか弱いんで～、力仕事とか戸部先輩の体力作りの為にもなるのでいいじゃないですか?」
「いろはすっべえわー、俺泣きそうだわ～。」
「あ、もう仕事無いんで、戸部先輩帰っていいですよ～。」
「っべえわー。いろはすひどすぎっしょ～。」

この戸部さんの人の良さ（笑）これでモテないとか可哀相ですね～。ま、しゃべり方がちょっとウザいのでしょうがないかも？

「あ、戸部先輩、ついでに先輩呼んで来てくださいお願いします。」

いろはさんがひどすぎる！

「マジか～、ヒキタニくんのとこ遠すぎっべ、妹ちゃんもいるんだから携帯で…」

「お願いしますねっ♪」

「…。っべえわー…。」

うわぁ…もう可哀相過ぎて見てられないっ。

「で、何の用だ一色。」

我がお兄ちゃんの登場だよ！相変わらず目が腐ってるけどお兄ちゃんはこれが一番だし小町は好きだよ！あ、今の小町的にポイント高い♪

「せんぱーい、これなんですけどぉ～。」

戸部さんの時とは全然違ういろはさん。うーん、甘えまくりだな～。お兄ちゃんもなんだかんだでちゃんと聞いてるし。お兄ちゃんはお兄ちゃんだから、年下に甘いんだよね。あ、お姉ちゃん候補みんなに甘かったのかな？そうだとしたらお兄ちゃんなかなかのやり手！

「あ～、わあったわあった。俺がやっとくからお前はそっちちゃんとやれ。小町、一色はちゃんと仕事してるのか?心配なんだけど。」
「してるよ～。お兄ちゃんについて色々話しながら♪」
「なんだよ、俺の悪口で盛り上がってんの?小町、お兄ちゃん泣いちゃうよ?」
「うわぁ…お兄ちゃん気持ち悪いよ…。」
　どうしてお兄ちゃんはすぐネガティブに考えちゃうかな～。
「小町ちゃん辛辣ぅ～。さって、泣きたくなるから仕事に没頭しますかね…。」
「せんぱーい一緒に仕事しましょうよ～。」
「あ～くっつくな!一人もしくは小町とやれ!」
「も～、先輩のくせに～!」
　ぷく～っとほっぺを膨らますいろはさん。いろはさんが散々アピってるのに気づかない唐変木なごみいちゃん。うーん、雪乃さんや結衣さんもいいけど、いろはさんもなかなかですね～。迷うな～。お兄ちゃんは誰を選ぶのかな?あ、戸塚さんとか言ったら殴ろう。
「お兄ちゃんお兄ちゃん、お姉ちゃん候補は今誰が一番?」
「何言ってんだお前は。そんなのぼっちの俺にいるわけねえだろ。むしろ将来すらぼっちの可能性まである。強いて言うならとつ…」

ボカッ。
「いてっ！何すんだ小町！」
「お兄ちゃん、戸塚さんは可愛いけど男の人だよ…。」
「ばっか、戸塚は天使だから性別とか…」
ボカッ。
「うおっ。一色まで何すんだ！」
「先輩キモいです！」
「お兄ちゃん小町的にポイント低いよ…。」
全くこのごみいちゃんは…。素直じゃないんだから。ま、小町はそんなお兄ちゃんで良かったけどね。願いごと叶うといいなぁ。

お兄ちゃんに素敵な彼女が出来ますように。お兄ちゃんが幸せになれますように。
七夕の短冊、小町的にポイント高い♪

１６章・最近、部長のようすがちょっとおかしいんだが。

今日も今日とて便利機能付き目覚まし（携帯電話）のアラームによって目を覚ます。学生である以上仕方ないのだが、そもそも専業主夫を目指す俺が学校という社会の縮図へ行く理由はあるのか？いやない（反語）

朝から賢さを披露して疲労していると

「お兄ちゃんまたアホな事考えてたでしょ。小町はとっても悲しいです。」

「何で俺の考えてる事がわかるんだ。ニュータイプなのか。」

「訳がわからないよ。」

「まさかキュゥ〇エだったのか。」

おかしいな。声はむしろ主人公の中の人のはず…。中の人ってなんだ。

「本当に訳がわからない事言ってないで早く支度してね。ご飯出来てるから。」

「おう。それにしても…」

…なんつーか自分が沢山いるとやはりキモいな。

「とりあえず今日も大人しくしてろよ。」

「「「「「おう。」」」」」

…やっぱキモい。いつになったら消えるんかね。

放課後、奉仕部。今日もいつものように雪ノ下が出した紅茶を飲みつつ、受験に向けての勉強をする。今日は金曜だから、由比ヶ浜は雪ノ下の家に泊まりで勉強を教えて貰うらしい。

「そういや、俺の分身なんだけど。」

雪ノ下と由比ヶ浜、何故かいる一色と小町が同時にこちらへ向く。そんなに見られたら八幡恥ずかしいっ!…おえっ。

「…大丈夫よ。今のところ順調に原因になったであろう要因は集まって来ているわ。…ただ、あなたに話すのは少し難しいの。…時期が来たら説明するから待っていてくれる?」

「…ああ、まあいいんだが。俺の事だから何か出来ねえかなって。」

「ひ、ヒッキーはいない方が良いから!」

なんだ。俺にはぼっちがお似合いだからですか。それともゆるゆりの邪魔だからですか。それなら仕方ないな、うん。誠に仕方ない。

「なにニヤニヤしてるんですか?キモいですよ先輩。」

そういうお前もさっきからこっち見てニヤニヤしてるじゃねえか。

「ニヤニヤなんてしてねえよ。雪ノ下と由比ヶ浜が仲いいなーって思ってただけだ。」
「わたしも先輩と仲良くしてあげますよー？」
「いらね。」
「ひどいですよせんぱーい！」
　ぷく～っと頬を膨らます一色。あざといなぁ。
「そう言えばね、いろはちゃん！これ見て！昨日ゆきのんに貰ったんだけどね、これゆきのんが書いたんだよ！」
「ええーっ⁉雪ノ下先輩こ、これは…！」
「ちょっと由比ヶ浜さん、それは…。」
「ほほう、雪乃さんこれは凄いですね～！」
　何か由比ヶ浜が一色に携帯を見せてそれから雪ノ下が凄く焦って隠そうとしている。小町に見られてるけど。…ゆるゆりが更に熱くなった。いいぞもっとやれ。
　しかしどんな画像なんだか。
「…？」
　雪ノ下がこっちをチラッと見て顔を真っ赤にして背ける。…なんだ？
「…雪ノ下先輩あとでわたしにもくださいね～！」
「…何でこうなるのかしら。」

雪ノ下が凄く困った様に溜め息をつく。…と。

コンコン。

「どうぞ。」

雪ノ下がそういうと入って来たのは…天使？いや、戸塚だった。

「さいちゃんやっはろー。」

「やっはろー。八幡ここにいたんだ。」

「おう、どうした戸塚。俺の膝に座るか？」

「もう、何言ってるの八幡。そんなことしないよ！」

可愛いな戸塚は。とつかわいいな。…周囲の女性陣の目付きが凄く冷たい気がするが気のせいだろう。

「ヒッキーキモい…。」

「キモいです先輩…。」

「気持ち悪いよお兄ちゃん…。」

「…。」

全員から罵られる。気のせいではありませんでした。というか、雪ノ下の無言の溜め息が一番キツいんですが。

「それでどうした？何かあったか？」

「ああうん。ちょっとだけなんだけど、テニスの練習に付き合って欲しいなって。僕じゃなくて新入部員のなんだけど。」
「そういうことか。まぁ少しならいいぞ。」
「そうね、息抜きにもなるし。由比ヶ浜さんも何だかパンクしそうになってるものね。」
「ちょ、ゆきのん！まだ大丈夫だよ！ちょっと悩んだだけ！」
あははうふふと二人はまたゆるゆりしていらっしゃる。目に毒である。

「こ、こんなところね…。」
雪ノ下は上手いんだが体力がない。なのですぐにバテる。まだ来て１０分位だというのに息があがっている。
「相変わらず体力ねえな…。」
「体力なんていらないもの。」
「誰かに襲われたらどうすんだよ。」
「あら、心配してくれるの？でも大丈夫よ。護ってくれる人がいるもの。」
護ってくれる人？誰だそりゃ。
雪ノ下は顔を少し赤らめながらこちらをチラチラ見てくる。だからさっきから何なんだ。

「何か付いてるか？」
「えっ⁉いえ、あ、その…。別にそういうわけでは無いのだけれど…。えっと、明後日のデスティニーランドなのだけど、都合は大丈夫かしら？」
「ああ、残念ながら空いてるぞ。というか毎週暇まである。」
「ふっ、ふふふ。そうだったわね。」
　以前に比べて笑顔が増えた。それは凄く良いことなんだろうな。もう前の様な氷の女王という者はいないだろう。…相変わらず告ってきた奴は轟沈してるらしいが。無敵艦隊雪乃かな。艦こ〇でも相当強そうだな。
「あー、ヒッキー！ゆきのんとイチャイチャしないでよ！」
「い、イチャ…⁉そ、そんなこちょしてないわにょ⁉」
　落ち着け雪ノ下。噛みまくってるぞ。
「してねえよ。それよりどうだ？」
「うん、新入部員の子達も大分慣れてきてるよ。今はさいちゃんがゆきのんのたてた計画通りに練習手伝ってる。」
　戸塚はやっぱ面倒見がいいなー。俺も面倒見てくれないだろうか。と戸塚を見て妄想していると
「…ひき肉くん。」

「ん？何で俺ミンチになってんだよ。」
「今からなるのよ？」
「何で⁉」
　凄い笑顔で言ってくるのがめちゃくちゃ怖いんだが。俺が何をした。
「ヒッキーさいちゃん見すぎ、キモい！」
　しっかし、何か今日の雪ノ下のテンションはおかしい。赤くなったり、笑顔で怒ったり、笑ったり、俺をチラチラ見たり。何か昨日あったんだろうか。

17章・ゆきのんびより

今日は日曜の朝。こんな早くから起きるとか普通はあり得ない俺だが、当然理由がある。雪ノ下とのいわゆるデートの練習、俺を矯正するためだとか。んで、更に小町に叩き起こされた。

「女の子は迎えに行かなきゃダメだよ、デートなんだから！」

…と。渋谷とか待ち合わせとかしてる連中でごった返してるし、千葉駅とか舞浜だって同様だろう。何故俺は迎えに行かなきゃいけないんだろうか。とは言うものの小町に逆らうと色々大変なのでしぶしぶ、あくまでしぶしぶ雪ノ下の家に来た。

「…何かワクワクしてるみたいで嫌だな…。」

ピンポーン。

『…雪ノ下ですが。どなたでしょうか？』

「ああ、俺だ。」

『折田さん？そんな方は存じ上げませんが。』

「おい、比企谷だよ！」

『比企谷さん？そんな方も存じ上げ…』

「小町も知ってるだろ！比企谷八幡だよ！」
『ふふ、冗談よ。まだ時間も早いし、あがって。』
　疲れた。何で俺は朝早くから漫才みたいなことをしてるんだ…。

「いらっしゃい。紅茶でいいかしら？」
「おう。サンキュー。」
　雪ノ下の淹れた紅茶を飲む。あちっ、やべ。猫舌だった。
「随分早く来たのね。…楽しみだったのかしら？」
「ちげーよ、小町に行けって脅されたんだよ。」
「…そう。小町さんが。」
　何で小さくガッツポーズ取ってるんでしょうか。ちょっと可愛くてうっかり告白してフラれそうだぜ。フラれるのかよ。
「全然嬉しくはないのだけれど、暇ヶ谷くんが寂しくてこんなに早く来てしまったのかと思ってしまったわ。小町さんにも困ったものね。後でメールしておくわ。」
　小町に何する気だ。俺を送ったから冷気で凍らせる気なんでしょうか。まるでシヴァだな。マジで召喚しそう。
「さてと。少し早いけれど、出発しましょうか。混むでしょうから。」

「…そうだな。帰」
「らせるわけないでしょう？」
「…デスヨネー。」
うち、とても怖いの見たのん。笑顔で怒ってるのんな。…うん、俺キモい。

日曜だからか電車は混んでいて苦しかったが何とかたどり着いた。雪ノ下はすでにヘロヘロだ。
「…やはり日曜は混んでいて大変だな。雪ノ下大丈夫か？」
「え、ええ。平気よ。さあ行きましょう。」
何かいつになく行く気満々だな。パンさんに会えるからかな。
その後デスティニーランドに着くや否やパンさんを見つけて写真を撮ったり、握手したり、グッズも大量に買う雪ノ下。当然荷物持ちな俺。こういう時は１０８ある俺のお兄ちゃんスキル『自然に荷物持ち（パシリマスター）』が発動してしまうのだ。…小町に調教された結果の弊害だ…。
「ありがとう、比企谷くん。少し買いすぎてしまって…。」
「別に構わねえよ。それよりアトラクションどこに行くんだ？」
雪ノ下はマップを見て考え込む。そして、

「パンさんのバンブーファイトね。」
　…絶対最初から決めてましたよね。何故悩んだ振りをしてたんでしょうか。怖いから聞かんけど。
　相変わらず終始無言で私語厳禁。パンさん好きすぎだろゆきのん。顔は前よりは緩んでたけど。
「次はどうすんだ？」
「そうね。混んでたから結構時間もかかったし、ランチにしましょうか。」
　昼食を済ませ、アトラクションをいくつか廻る。雪ノ下はどうやら七夕の時に言ってたようにデスティニーランドに余程来たかったらしく、楽しそうだ。
「雪ノ下。」
「何かしら。」
　スゲーにこやかだな。今日は氷の女王封印で普通に可愛い女の子みたいだな。
「…いや、楽しそうだなって。それだけなんだが…。」
「ええ。一緒に来た相手が比企谷くんなのはとっても残念だけれど、楽しいわ。」
「へいへい、俺ですまんかったな。」
「冗談よ、比企谷くんとで良かったわ。」
　そう言ってフフ、と笑う雪ノ下。表情が豊かで見ていて少し戸惑ってしまいそうだ。

「次は…」
　雪ノ下は本当に楽しんでいた。もう雪ノ下家に囚われた人形ではなくて普通の女の子だからな。…普段は笑顔で人を射殺す女王だが。

――帰りの電車の中――

「結構廻れたな。」
「そうね。とても楽しかったわ。比企谷くんありがとう。」
「俺は何もしてないけどな。」
　雪ノ下が決めたアトラクション廻ってただけだし。
「比企谷くんはどうだったかしら？」
「ん…まぁ楽しかったんじゃねえの。」
「相変わらず捻くれてるのね。」
「うるせ。」
　雪ノ下はまた笑う。今日は本当に楽しめたみたいだな。俺なんかより由比ヶ浜と一緒に来たらもっと楽しかったんだろうけど。
「それじゃあまた明日。送ってくれてありがとう。」

「ま、荷物持ってたしな。またな。」
雪ノ下は胸の前で小さく手を振る。…相変わらず胸がぺった…ゲフンゲフン。何か急に寒くなってきたな。まだ夏だというのに。

雪ノ下の家から帰っている電車の中、俺は自分の分身について考えていた。
「雪ノ下は大丈夫だって言ってたが、やっぱ俺も何か考えなきゃな…。」
「あれ？比企谷くん？」
不意に名前を呼ばれ、振り向くとそこには去年始めの生徒会長、城廻めぐり先輩が立っていた。

18章・城廻めぐりの憂鬱

「こんばんは比企谷くん。」
「…こんばんはっす。」
城廻めぐり。前年度の生徒会長であり、去年結構お世話になった先輩だ。その癒しのパワーは一色とは違ってあざとさもなく、生徒からも絶大な人気を誇った。めぐりんパワーメーイクアーップ!…のように魔法少女になってもきっと癒しの側だな、うん。
「どっかお出かけ?」
「ええ、まあ。」
「あー、あれかな?デートでしょ。誰かなー?」
天然だから癒しにはなるんだが、何というか、こんな俺にも平等に癒しの笑顔を向けてくるので正直苦手だ。可愛いんだけどね。
「デートじゃ…」
否定しようとしたが少し口ごもってしまう。城廻先輩の表情が少し悲しそうだったからだ。城廻先輩は俺の話の返事が聞きたかった訳じゃないようだ。
「…何かあったんですか?」

「…あのね比企谷くん。私ね、大学行ったんだけどね、ちょっと困ってるんだ。…まだ奉仕部ってやってるかな？雪ノ下さんや比企谷くんに相談したいんだけどさ。」
「やってますよ。…城廻先輩の相談にのれるかはわからないですけど。」
大学…か。城廻先輩は優秀だ。それに誰にでも優しい。…本当に誰にでも。俺でさえ優しかった城廻先輩だ。きっと大学でも優しいのだろう。その後の話はそれが原因だとわかる様な事だった。
「…大学でね。ちょっと話をした男の先輩がいたの。サークルの先輩なんだけど…その人に付きまとわれてるみたいなの。友達に警察も薦められて行ったけど、何も起きてないから動けないって。」
ストーカー…か。警察は確かに動かない。何度それで被害者が出ようと、結局は動かないから犠牲者が増える一方だ。ニュースに何度もなっていても警察は動かない。動けないからだ。だが俺達は一介の高校生だ。何が出来るのだろうか。
「…城廻先輩はその人にどうして貰いたいんですか？」
「…付きまとうのを止めて貰いたい。それだけだよ。」
「…優しいですね。優しすぎます。」
本当に優しすぎだ。誰彼構わず優しい城廻先輩は知らないのだ。こういう奴はその優しさが勘違いの原因になることを。そしてその優しさは『自分だけ』に向けられたも

のだと思い込む。自分に好意があるのだと。ソースは中学の頃の俺。それで折本に告ってフラれたからな。折本は誰にでも優しかった。そんな事はどうでもいいですね。

「俺だけではどうにもならないです。」

「そ…そーだよね。ごめんね。無理言っちゃって。それじゃ…」

「俺だけじゃってのは、他にも居れば大丈夫って事ですよ。」

「え？」

そうだ。今の俺はもう一人でやらなくていい。一人でやるから間違うのだ。今は信頼出来る奴等がいるから。

「明日、放課後に奉仕部の部室で良いですか？」

「う、うん！ありがとう！」

あいつらとなら。きっと大丈夫だ。

「…そういうわけだ。お前らに協力して欲しい。」

「事情はわかったわ。…けれど何か方法は見つかっているの？」

放課後に城廻先輩は来るが、その前に少しでもと昼休みに部室に来ている。雪ノ下は無論いつもここに居るから大丈夫だとは思っていた。

「先輩は女の子なら誰にでも優しいんですね～。」

…何で一色がいるのん？
「世話になってるからな。誰にでもじゃねえよ。」
「ヒッキー、城廻先輩はどうしたいの？」
由比ヶ浜は…雪ノ下にくっついてるからそういうことだろうな。
「付きまとうのを止めて貰いたい、それだけだと。」
「…甘いわね…。」
「どうする？無理そうなら断ってもいいんだぞ。高校生の力じゃどうにも出来ない事もあるからな。」
「ヒッキー、あたしはやるよ。せっかくヒッキーがあたし達に頼ってくれたんだもん！ヒッキーいつも一人でやろうとするから心配だし。」
「…そうね。私も協力するわ。…別に比企谷くんのためでは無いけれど。」
「あ～、ずるいですよ～！わたしも手伝います！」
こいつら…やべ。な、泣いてなんかいないぞ！これはえっと、そう！汗だ！…。
「しょうがないなぁお兄ちゃんは。小町も手伝ってあげるよ、お兄ちゃんのために。あ、これって小町的にポイント高い！」
小町も居たんか。
「…サンキュ。」

「あ、ヒッキーがデレた！」
「で、デレてねえし！」
「全くこの男は…。」
さぁて頑張らなきゃ、な！

放課後になって城廻先輩が奉仕部に訪ねてきた。
「こんにちは～。」
「…うっす。」
「こんにちは、城廻先輩。」
「城廻先輩やっはろー。」
「城廻先輩こんにちはですっ！」
「こんにちは、そしてはじめまして！コレの妹の小町です！」
誰がコレだ。
「あ、うん。はじめまして小町ちゃん。」
相変わらず少し元気がない。きっと今日も何かあったのだろう。雪ノ下が紅茶を差し出すと一口飲んだが、しばらく話さなかった。

１９章・雪ノ下の冷徹

「えっと、ね。」

　城廻先輩はようやく話し始める。優しい先輩だからこそ、こういう状況に戸惑っているんだろう。雪ノ下の様に撃沈させるわけでもなく、由比ヶ浜の様に周りに三浦の様な絶対強者がいるわけでもなく、一色の様に男を手玉に取るような事も出来ない。自分ではどうしようもないのだ。

「その先輩とは一度しか話はしてないの。だけどそれから色々付きまとわれて、やんわり断ったけど、ダメで…。…どうする事も出来なくて。それでちょっとだけ去年の事思い出したの。奉仕部は雪ノ下さんや比企谷くん、由比ヶ浜さんがいるからこの３人ならもしかしてって。」

　それは買いかぶりすぎだろう。俺達は単なる高校生だ。雪ノ下は確かに優秀だし色々出来るが、今回のケースは本来雪ノ下ではどうしようもない案件だ。由比ヶ浜も本来人に強く言ったりも出来ない。俺に至っては話が拗れるだけだろう。

「今日もね、こんなのがメールで来たんだ。メールアドレス教えてないのに…。」

『めぐりちゃん、昨日の男、誰かな？高校生くらいっぽかったけど…まさか浮気？あんな

暗そうなヤツと何を話してたんだ？俺がいるんだから他のヤツと話したらダメだろ～？』

…俺の事だな。見られていたか。

「うわ、きもっ。酷すぎですね…。」

一色の感想はもっともだろう。こんなメール不快以外のなんでもない。

「…確認ですが、城廻先輩は付き合ってる訳ではないのですよね。」

「うん…。話したのも一度だし、それ以来近くに行ったこともないよ…。」

「ゆきのん、これ結構ヤバイヤツだよ、何とかしないとヒッキーも城廻先輩も危険かも。」

最近はストーカー殺人等の事件も多い。その可能性もあるだろう。

「ええ。…わかりました、城廻先輩。承ります。その人に会いに行きましょうか。」

…うちの氷の女王は何を考えてるんだ。メールで相手を呼び出したがこれは相当ヤバイ。相手に好意を持ってると思われる事もあり得る。因みに小町と一色は生徒会あるから来ていない。手伝えないのが悔しそうだったが、奉仕部員じゃないししゃーないだろ。

「…城廻先輩、どれが『それ』なのかしら。」

大学生をそれ呼ばわり…こわい。あとこわい。

「えっと…あそこの髪が長い青いTシャツの人…。」
「ゆきのんどうするの？」
「叩きのめすわ。」
　ニッコリ笑って何て事言ってんのこの女王様は！
「おい雪ノ下。何か策はあるのか？」
「正面から潰すわ。それだけよ？」
　マジかコイツ。雪ノ下らしくないんだけど。
「策無しってお前の身もヤバイだろ。もうちょっと冷静に…。」
「あら？私が行くわけではないわ。比企谷くんあなたが行くのよ？」
「…は？」
「比企谷くんごめん…私のせいで…。」
　いやいやいや。俺の事はどうでも良いのかよ。いえ良かったですね、はい。…雪ノ下が酷すぎる。
「冗談よ。ふふ。」
「おい。」
「今回は助っ人を呼んでいるから。大丈夫よ。」
「助っ人？」

葉山…じゃねえよな。雪ノ下が葉山を頼ることはない。未だに雪ノ下は葉山を許してないからな。…誰だ？

「うーん、めぐり、ヤバイねーあれは。」

「うおっ！雪ノ下さん⁉」

「はるさん⁉」

「ひゃっはろーみんなー。」

この人か…!!!いや確かにこの人なら。つーかこの人今も世紀末みたいな挨拶だな。

「姉さん、大丈夫そう？」

「うん、まあアイツなら大丈夫だよ。一度だけ私も会ったことあるし。うちのサークル仲間の後輩でさ、一回だけ呼ばれて飲み会に来てからストーカーチックになったんだけど、思いっきり泣かせた。」

…マジかよ。この人やっぱ雪ノ下の上位互換なだけあるわ。もう赤いモビルスーツ纏ってんじゃないかってレベル。

「じゃあめぐり行こっか。」

…あの後、城廻先輩が色々言っても全然話にならなかったが、陽乃さんが行って、私の後輩なんだけど。って言ってちょこっと話したら相手は引き下がった。つーか涙目

で謝り始めた。…こええ…。
「終わったよー。」
「はるさんありがとうございます！みんなもありがとう！」
「いや俺は何もしてねっすよ。」
「あ、あたしも何もしてない…。」
「私はただ姉さんを呼んだだけです。」
「そんな事ないよ！私一人だったらどうしようもなかったけど、比企谷くんから雪ノ下さんに、雪ノ下さんからはるさんに、話が行ってくれたからだよ！由比ヶ浜さんもいっぱい勇気づけてくれたし。」
　やっぱめぐりんパワーヤバイ。癒し効果高くて悟りひらけそう。
「ところで城廻先輩。ちょっとお話が…。」
　何かヒソヒソと雪ノ下が話している。
「えっ⁉そ、そんな事してないよ⁉」
「そう、ですか。それならいいんですが。」
　何の話かわからんけど、最近雪ノ下も色んな人とゆりゆりしてるなぁ…。
「みんな本当にありがとう。これで安心出来るよ。またね！」

「…うっす。」
「ええ、さようなら。」
「城廻先輩また！」
　何とかなって良かった。本当に俺一人だったら答えを間違えていただろう。もしかしたら俺も城廻先輩も由比ヶ浜が言ってた様にヤバかったかもしれない。…相談して良かったかもな。
「…サンキューな。」
「…？何か言ったかしら？」
「いや。何でもねえよ。」
「そう。じゃあ比企谷くんも由比ヶ浜さんもまた明日。」
「おう。」
「うん！」

２０章・奉仕部活動記録

私は去年、一人の少年を奉仕部に斡旋した。当初彼は捻くれていた。今も若干捻くれているが、以前ほどではない。

雪ノ下雪乃や由比ヶ浜結衣の力もあって彼は確実に成長している。前の彼は余りにも痛みに慣れすぎていたが、今の彼はその痛みを怖がっている様だ。それは一見すると弱さかもしれないが、必要なものだ。怖さを知らねば人は強くはなれないからだ。

彼は最近人を頼ることを知った。自分をぼっちだと偽り、人に頼らなかった彼は心配の種だった。

「…平塚先生、そんなネタ古すぎですよ。年齢バレ…」

「死にたいのかね？」

「…ないですよねー。」

…まだピチピチのアラサーだもん。まだチャンスあるはずだもん。はぁ…結婚したい…。

と、それはともかくだ。私はそんな彼らの事を記録している。ずっと見ていたいがそれも叶わないからな。彼らは今年で卒業してしまうから。

「…まったく、君は変わらないのか変わったのか…だがもう君に心配はないよ。期待している。」
「…平塚先生、何かあったんですか？暗いっすけど…。まさかまた…」
「何かね？」
「…何でもないです。」
そんな彼らの記録を少し語ろうか。

奉仕部。雪ノ下雪乃が部長を務め、一人でやっていた部活、正確には同好会扱いではあるが…そこに私は比企谷八幡を去年紹介した。二人は違いこそあれ、共に独りぼっちだったのだ。
比企谷は彼の性格ゆえに、相手を突き放してしまうために。雪ノ下は彼女の優秀さを妬む者達との馴れ合いを嫌うが故に。
当然最初は二人は合わなかった。数々の依頼を彼らは由比ヶ浜と共にこなしたが、これは二人ではなし得なかった事だろう。そして彼らは関係を緩和し、更に深く繋がり、しかし文化祭の依頼で傷つき、一度は壊れかけた。
彼らはすでに奉仕部を居場所にしていた。3人が3人とも、一人であるが故に、その居場所を失いかけた。比企谷はそれを取り戻すために、二人を頼ったのだ。

私の思惑はある程度は上手くいったようだ。比企谷の更正と言う名目は正直に言えば嘘なのだ。比企谷の更正だけではなく、雪ノ下の更正でもあったのだから。

上手くいきすぎたのか最近奉仕部の部室に行くと、雪ノ下や由比ヶ浜から比企谷への熱い視線を感じてイライラしてくる。おまけに最近だとクラスを受け持ったのだが、何人か同じような目線を比企谷に向けていた。生徒会長である一色もだ。なんだアイツは。私は更正しろとは言ったが、女をおとせと言った覚えはないぞ。…今度比企谷を殴ろうかな。

３年になり、彼らは受験勉強をしながら依頼をこなしている。

新入生からの進路関係の相談。

部活動関係の悩み。

人間関係での葛藤。

概ね彼らはきちんと依頼を達成している様だ。今は「３人で」協力して。誰を傷つけることなく、自分自身も傷つけず。

さて、たまには見に行ってやろうか。

「…平塚先生、ノックをしてから入ってきて下さい。」

「ハハハ、すまんすまん。どうかね？順調かね。」

「ええまあ。由比ヶ浜さんも大体は理解しているようですし。依頼も大丈夫です。」
「そうか。由比ヶ浜に教えるのは大変だが見放さないでくれよ？」
「平塚先生ひどいし⁉」
「…善処します。」
　善処って…不安なのか。
「…国会議員が、出来もしないマニュフェスト語って難しくなった時みたいだな。」
「ええ⁉ゆきのん出来ないの⁉」
「ひ、比企谷くん何て事を言うの…！」
　ふむ。雪ノ下があわあわしていると言うのも珍しいものだ。いつもは優秀を絵に描いた様な雰囲気だからな。やはりこの３人は面白い。私の選択は間違っていなかった様だな。
　比企谷、君は優しい。だから自分にももう少し優しくしたまえ。そうすれば二人も君に微笑んでくれるだろうからな。
　…頑張りたまえ。

２１章・海老名ですが？

「ぐ腐腐腐腐…今日もさいはちキマシタワーーーーーーー!!!」
「姫菜自重しろし！」
　スパーン！
　いつものようにテニスコートにいる比企谷君と戸塚君を見かけて８０１妄想をしてると優美子に叩かれた。だけどこれはこれで私と優美子の関係。優美子は怖がられているけど、実は誰よりも優しくて、泣き虫で、仲間思いで、隼人君が好きな普通の女の子なのだ。
「もう～痛いよ優美子～。」
「姫菜が欲望をさらけ出すからだから。あんたいい加減自重しなきゃ大学に行ったらどうすんの？」
「うーん…多分変わらないと思うよ？」
　私は私だしね。誰かの目を気にするならこんな事はやってないし。
「海老名さんはそれが一番っしょ～。」
　戸部っちの事は嫌いじゃないし、仲間だと思ってもいるけど、それは好きとかじゃな

い。だから私は去年比企谷君に頼んで、戸部っちの好意を避けて貰った。それで私達は大丈夫だったけど、比企谷君には悪いことをしちゃった。

「優美子だって姫菜が変わらない方が良いだろう？」

「そうだけどさ。あ、隼人～、今日一緒に帰ろ。」

「ああ、構わないよ。」

優美子は隼人君が好きだったから、今年の始めに告白した。結果フラれたけど、その後も変わらずに居続けて、関係が壊れることもなかった。その後も優美子はあきらめなくて、５回目の告白で隼人君も優美子の強い意志に根負けして付き合ってるみたい。

「あたしも部室行かなきゃ！じゃあねみんな！」

結衣も頑張ってるみたい。比企谷君と同じ大学に行きたいらしい。その為に雪ノ下さんに勉強を教えてもらっていて、最近は隼人君の次にこのグループの中でテストの成績が良い。私も負けてられないかな？

「私にも好きな人出来るのかな～？」

そんな事は絶対無いなって思いながら、そんな事を口にする。戸部っちの好意は嬉しいけど、私はそんな気分にはなれない。私と戸部っちが合うわけないから。

「ま、そんな事あるわけないか。」

廊下から窓の外を見る。あ、あの野球少年、隣の男の子と仲良さげ…ぐ腐腐腐腐…。良いですなぁ～。
「うわ…。」
聞いた声に振り向く。比企谷君だ。
「何かな、比企谷君。」
「いや、戸塚の後輩の特訓の後に通りかかったら海老名さんがまた…。」
「ぐ腐腐…さいはち良いですね～。」
比企谷君は結構ひいている。それが普通の反応だろう。私はいわゆる腐女子だけど、一般人には理解し難い趣味だ。ましてや男子なら尚更だ。だからこそ私は私を好きな人に対して、好意が向く前に避けてきたのだから。
「ま、まあ一人で妄想するのは自由だしな。戸塚なら気にもならんし。」
「おやおや?私が好きだったのでは?」
意地悪な質問だ。比企谷君は戸部っちの告白を回避してグループの関係を壊さないようにするために嘘の告白をしただけだ。
「あれはもう忘れて下さいよ…。んじゃ部室行くんで。」
「ん。またね比企谷君。」
後ろ向きに手を上げて比企谷君は戻っていった。…比企谷君なら私を理解出来るの

だろうか。私と合うだろうか。…いや、やっぱり合わないだろうな。比企谷君には多分今好きな女子がいるだろうから。

まだボーッと廊下から窓の外を見ていた。そろそろ帰ろっかな。

「あんれー、海老名さん？」

「戸部っち？まだいたんだね。」

「いろはがさー、扱き使って来るんよー。酷くね？」

ズキッ。何故か胸がちょっとだけ痛む。…何だろう？

「戸部っちが甘やかすからだよきっと。」

あれ？何だろ。自分の言いたかった事よりもずっとキツい一言になってしまった。

「海老名さん辛辣っしょ～。まあそうだろうけどね～。」

戸部っちはそう言って私に微笑む。何か心地いい。そう思ってしまう。

「じゃあ私帰るね。じゃね戸部っち。」

ズキズキ胸が痛むし、何か調子が悪い。早く帰りたい。

「あ、ちょっと待って。俺も今から帰っから、送ってくっしょ。」

「そんな、悪いよ。」

「いいからいいから。結構遅いし。」

言われて気づいたがもう7時をまわるみたいだ。…何でこんな時間までいたんだろ。
「…うん、じゃあ駅までで良いから送って貰おっかな。」
「任せてよ～。海老名さん絶対守っからさ。」

私と戸部っちは何を話すでもなくただ駅に向かって横を歩いているだけだった。でも全然気まずくない。不愉快でもない。むしろ安心感があった。
「あ、駅着いたね。ありがと戸部っち。」
「任せて欲しいっしょ。海老名さんがよかったらいつでも送ってくから。」
「うん、またお願いするかも。」
そう言うと戸部っちは凄く嬉しそうに頷く。
「勿論!じゃあね海老名さん。」
「うん。ばいばい。」
電車に揺られながら窓を見て、自分がニヤけてる事に気づいた。何で笑ってんだろう私。

22章・折本語

「千佳～、一緒に帰ろうよ～。」
「ごめんかおり、今日ちょっと用事で残らなきゃいけないんだ～。」
「そっか～、わかった～。」
今日は一人で帰るか～。…ちょっと総武方面通って帰ろっかな。
「あれ？折本さんは今帰りかい？」
「あ～、玉縄君。そうだよ。」
「じゃあ僕と帰らないかな。」
「うーん、今日はそれ、ないかな。玉縄君と勘違いされても困るし？」
玉縄君は良い人なんだけど、中身無いんだよね～。何言ってるかわからないし。
「そっか…。」

玉縄君の帰り道デートを断って総武方面に向かって歩く。たまにだけど、私一人の時は最近総武方面を通って帰る。遠回りだけど、もしかしたら、比企谷に会えるかもなんて思いながら。

中学校の時に大して知らない比企谷に告白された。私は当然フッたし、更にふざけてみんなにもバラした。あの時の事は比企谷に悪いことをしちゃったな～。

去年比企谷に再開して千佳と葉山君とダブルデートみたいな事をして、以前の様に比企谷を馬鹿にしてたら葉山君に怒られて、しかも比企谷に二人も可愛い女の子の知り合いが居てびっくりした。

クリスマス、うちの学校と総武高校と合同でイベントをやったんだけど、玉縄君含めたうちらが話を進めなかったら比企谷にめっちゃ言われた上に雪ノ下さんって人に怒られちゃった。玉縄君何言ってるかわかんないもんね～。私もそれある！ばっか言ってた（笑）

で、バレンタインデーにも比企谷に会って、話したら意外と面白い。比企谷って頭良いし、玉縄君をコテンパンにするのは凄いって思ったし。

それからたまに会った時とかもちょこっと話したら楽しかった。何か良いかもなんて思ってきて、気づいたんだよね。私比企谷の事好きなんだな～って。

七夕の日、あの日も今日みたいに一人で総武方面通って帰ってた。駅の方に行ったら何か短冊配ってたから私も貰った。思い切って、書いた。

『比企谷に気持ち伝える！』

って。や～、私にしては頑張った方かな～。いっつも他人の言うことに流されて生きてきたからな～。私が比企谷に告白するのってアリかな～。
「ん～、今日も比企谷いないか～。なかなか会えないな～。」
「あれ？海浜総合高校の、先輩のお知り合いの人じゃないですか～。」
「あ、総武の会長さん。久しぶり～。」
比企谷の知り合い、発見。ちょっと聞いてみよ～。
「比企谷って今どうしてるの？」
「先輩ですか？先輩は受験勉強で奉仕部の部室にいますよ。先輩に何か用事ですか？」
「うん！ちょっと比企谷と話したいな～って。会長さんにお願いできないかな。」
積極的に行かなきゃね～。ライバル多いっぽいし。
「えっと、先輩とどんな話をするんですか？」
おおっと、この子も比企谷好きなのかな？怒ってるっぽいな～。
「…もしかして先輩狙ってます？」
「え？あ～、えっと…あはは～…」
私動揺してる！見透かされてんじゃん！
「えっと、まあ、うん。比企谷の事いいなーって…会長さんもでしょ？」
「ふぇ⁉」

お～顔真っ赤。やっぱりだ～。
「えと、そんな事は…」
「それある！でしょ？」
うんうん。しかしこの子も可愛いな～。比企谷可愛い女の子にモテすぎ。

会長さんを誘って喫茶店来たんだけどそこで衝撃的な話を聞いた。何か比企谷が分裂したらしい。しかも原因は私達の短冊だとか。告白したいって気持ちが比企谷分裂の原因って…それはない。
「マジ？」
「ですです。先輩がモテすぎて。」
「ふ～ん、それじゃこれからメンバー集まって話をするの？」
「そうですね～。告白の順番とか、そもそも先輩と少しでも関わらないと告白しづらいと思うので、まずはあんまり関わってない人はデートとかです。正直に言えば、やめて欲しいですけど、雪ノ下先輩とかが怖いですし。」
雪ノ下さんってあのおっかない人か。やっぱ比企谷の事好きなんだ。って、比企谷とデート出来るんだ～。それある！
「じゃあこれ私の連絡先！よろしく！」

「そういえば、先輩と折本さんは中学校の時に何があったんですか？」
「え？あー…比企谷に告白されてフッたんだよね～…。」
「ええっ⁉あのへたれな先輩が⁉」
「あはは、比企谷可哀相だよそれは。でも勿体なかったかもね。今は好きだし。」
本当に勿体ないな～。比企谷とあの時付き合ってたらどうなってたかな。
「そ、それじゃ折本さん、今日はこれで失礼します！」
「え、あ、うん。じゃあね。」
凄い焦って帰っちゃった。どうしたんだろ？

２３章・比企谷君と7人の美女

昨日いろはちゃんから連絡があった。去年会ったヒッキーの中学校の頃の同級生、折本さんが最後の1人だったって。しかも折本さんはヒッキーが中学校の時に告白した相手だったって。

「まさか比企谷くんが好きだった女の子が1人だったなんて…。」

ゆきのんもショックみたい。好きな人が昔好きだった女の子だ。折本さんが告白して、やっぱりまだ好きだったなんてなればあたし達に勝ち目ないし…。

「雪ノ下先輩心配し過ぎですよ～。先輩ですよ?」

「折本さんが最後の1人だったとは。小町的にはポイント高いですが、雪乃さん達の事を思うと複雑です。」

「小町ちゃん知ってるの?」

「ごみいちゃんが告白して玉砕した事は学校中で噂になってましたから～。」

ヒッキーが人の好意を素直に受けられなくなったのってやっぱり…。折本さんが原因だったんだ。正直に言ってムカついた。けど、今は折本さんもヒッキーが好きだから、ヒッキーの為にがまんしなきゃ。

「それでは皆に集まって貰わなくちゃいけないわね。…伝えて貰えるかしら。」
「はい！」
「うん。」

何だかんだで話をするのに場所が広いと言うこともあって、ゆきのんの家にみんなで集まることになった。他の場所だとヒッキーに見つかるかもしれないしね。
メンバーはあたし、ゆきのん、いろはちゃん、沙希ちゃん、さがみん、留美ちゃん、そして、かおりん。話をしてたら凄く話しやすくて、ここに来るまでに仲良くなっちゃった。
各自自己紹介した後、ヒッキーとの関係を話した。やっぱりさがみん、ちょっと落ち込んでる。みんな、もう気にしないで良いって言ったけど、さがみん自身が自分を許せないみたいで。
「ほんっとうにごめんなさい！うちが、うちの軽薄な行為が比企谷の立場を悪くしちゃって、みんなもムカついてると思うから…。」
「さがみんもういいんだよ。気にしてないからさ。」
「でも…。」
「比企谷の事なら私も中学校の時に悪いことしたって思ってる。でもそれはここで言っ

てる場合じゃないよ～。比企谷に直接謝る事だよ。」
　かおりんやっぱ優しい！ヒッキーが好きだった女の子なだけある。
「コホン。それはいいのだけれど、そろそろ話をしましょう。まずは全員で比企谷くんに会って話をします。勿論、何故このメンバーかも理由も言うことになるわ。」
「え⁉そうなんですか～⁉」
「当然よ。比企谷くんに理由も言わず、比企谷くんがデートをするわけ無いでしょう。その上彼は人の好意に気付きやすい。理由を言わなければ告白する前に破綻するわ。」
「そうだね、比企谷は毎日見てて思うけど、観察眼があって鋭い。」
「毎日見てるんだ⁉」
「えっ、あ…。」
　沙希ちゃん顔が真っ赤になった。毎日見てるってやっぱり沙希ちゃんも乙女だ。
「今はそういうことを話してる場合じゃないよ。八幡と早くデートしたいから進めて。」
　る、留美ちゃん厳しい…。しかもしっかりヒッキー好きアピール強い。
「それある！でも留美ちゃん、比企谷好きとか変わってるね～。私も人の事言えないけどさ。」
　ヒッキー好きなのって確かに一般的には変わってるかもね。でも気持ちには嘘つけない！ヒッキーにとっての本物になるために。

「話が進まないわ…。デートの順番だけれどクジでいいかしら。」

クジの結果、最初に留美ちゃん、次にさがみん、かおりん、沙希ちゃん、いろはちゃん、あたし、最後にゆきのん。この順番でヒッキーとデートする。

「やー、決まったけどヒッキーに話すの緊張するね～。」

今スッゴいドキドキしてる。今回のデートはヒッキーに告白するまでしなきゃいけないし。

「忘れてはいないと思うけれど、デートは最後に比企谷くんに告白するまで。じゃないと比企谷くんの分身は消えないと思われるわ。では明日比企谷くんをここに呼ぶわ。みんなは泊まっても構わないから。」

「やったー！ゆきのん皆にもあの画像見せていい？」

その後みんなでヒッキーの猫耳パンさんしっぽ画像、ゆきのんオリジナルを見せて、みんなで騒いだり遊んだ。ゆきのん照れまくって可愛かった♪

ヒッキーを呼んで話を始める。

「…で？何で呼ばれたんだ？」

「原因と解決法がわかったからよ。」

「お、そうか…で、何でコイツらはいんの？ルミルミまで。」
る、ルミルミ…留美ちゃんズルい！あたしも呼んで貰ってないのに！
「全員比企谷くんの為に手伝ってくれるの。それで…」
「ひ、比企谷！」
さがみん⁉
「おう、相模か。どした？」
「あ、あの、うち…。ずっと言えなかったんだけど…ごめん！ごめんなさい！去年の文化祭もその後の噂も体育祭も…全部うちのためにやってくれたって気付いた。うちが悪者にならないようにって…。」
ヒッキーは頭をガシガシかきながら言葉を返す。
「あのなぁ…相模。俺はあの時そうすることが一番上手く行くと思ってやったんだ。それはお前の為じゃないし、俺が俺の為にしたことだ。それに他人の悪口なんざあれだ。７５日ももたないくらい影が薄い俺だから気にすんな。体育祭はお前も頑張った。それでいいだろ。」
ヒッキー…。やっぱり優しいな～。……。あ、ヒッキー見てボーッとしてた。
あれ？みんな…みんなもヒッキー見てボーッとしてるし！
「おーい、お前ら大丈夫か？」

「…ハッ。比企谷くん、いきなり現れないでくれるかしら。驚くわ。」
「いや、雪ノ下が呼んだから来たし、来てから話してただろ。」
ゆきのん混乱してる？
「そ、そうだったわね…。で、解決法なのだけど、あなたの偽物と私達がデートします。」
「は？」
え⁉本物とじゃないの⁉どういう事⁉
「ちょ、ちょっと本物とじゃないの⁉聞いてないよ⁉」
沙希ちゃん焦りすぎ。ヒッキーとデートしたいってバレバレになるよ。
「いえ、偽物と、よ。じゃないと消えないでしょう。それに昨日画像を見ていてわかったことがあるわ。」
「画像？」
「ひ、比企谷くんの分身を調べるために撮っておいたのよ。それでこれを見て。」
ゆきのんの言うように画像を見ると…なんだろ？どっか変かな？
「ん？これ何だ？」
ヒッキーが指を指した所を見る。…由？横のは川…。相…鶴…一…折…。そして猫耳ヒッキーには雪。それぞれの手の甲に文字が書かれているみたい。
「そう、これはここにいるみんなの苗字の一文字。ここにいる比企谷くんには無いから

本物。比企谷くん…まず伝えなくてはいけないのだけれど…。ここにいる全員…あなたに、その、…こ…は…。」
「いや聞こえないからね⁉」
　ゆきのんメンタル弱すぎだよ！
「ゆきのんあたしが言うよ！ヒッキー！あたし達は短冊にあることを書いたの。それを達成する事がヒッキーの分身を消す方法。ゆきのんやっぱりまだ内容は言っちゃダメだよ。言うなら自分達で言わなきゃ。」
「そ、そう…ね。由比ヶ浜さんありがとう。」
「何を書いたかわかんねえけど…で、デートした後に聞くってことか。最初は？」
「鶴見さんよ。」
「八幡、久しぶり。八幡元気だった？」
「おう、じゃあよろしくな。」
　こうしてヒッキーとのデート大作戦が始まった。

２４章・ルミと八幡とちょこデート

昨日、雪ノ下の衝撃の言葉により7人の女子とデートすることになってしまった。幸い本物の俺ではないが、性格は俺のままだ。何かやらかしそうで凄く怖い。マジ怖い。信じるしかないが…。日曜日と言えど流石に一気に全員と、というわけにはいかない。俺が何人も居たら知らない人は絶叫ものだろう。信じられるか?これ生きてるんだぜ…。

――――――偽八幡（鶴）――――――

「おう、待ったかルミルミ。」

「大丈夫、八幡なら待ってても辛くない。あとルミルミはダメ。留美って呼んで。」

鶴見留美。去年林間学校で会った少女だ。色々あったが、どうやらなついてくれたらしい。俺は偽物ではあるらしいが、記憶はどうやら七夕以前のはあるが、その後の記憶はずっと家で読んでた本と夢の内容くらいだ。

「何をしたい?」

「公園…。」

公園、か。まだ中学生だしな。

「あのね八幡。去年の事なんだけど…。」

公園のブランコに揺られながら、留美は話し始める。

「私ね、あれで良かったのかなって最初は思った。だって、結局一人だったから。」

「…そうだな。あれはやり方がまずかったかもしれん。お前は戻りたかったんだろうからな。」

だが…それは結局一度壊れた関係を無理矢理くっつけるだけの見せかけの関係でしかない。…小学生には見せかけでも良かったのかもしれないが…。それでも俺は留美に偽物を与えたくはなかった。

「ううん。いいの。あの時の班のメンバーはもう違う中学校行ったし。だけど、同じクラスだった子はまだいて…また同じ事してた。標的は私じゃなかったけど、我慢出来なくてそいつらにもやられてた子にも怒鳴っちゃった。でもさ、やられてた子は私にお礼を言ってくれたの。それで八幡のやってくれた事にも意味があるってわかった。」

「意味…か。そんなのあるのかはわからんけど、今の留美は一人だけど独りじゃねえんだな。」

「うん。」
そう頷いた留美は林間学校で泣きそうになってた少女ではなかった。クリスマス、一人で辛そうに折り紙を折っていた留美でもない。そう思えるほどの笑顔だった。
「私ね、ずっと八幡に言いたかった。ありがとう。それで八幡とずっと話したかった。林間学校もクリスマスもありがとう。」
「…気にすんな。俺がそうしたのは仕事だからな。」
「ふふふ。八幡がそう言うのは照れてる時だって雪乃と結衣が言ってたよ。」
そう言われて俺は頭をガシガシかきながら返事を返す。
「雪ノ下と由比ヶ浜が…あいつら覚えとけよ…。」
何もしないけどね。出来ないし。怖いから。特に雪ノ下。氷の女王、いや氷の魔王？
「私がもう少し早く生まれてて、八幡の同級生だったら仲良くなれてたかな。」
「いやそれはねえだろ、俺たちお互いにぼっちだぞ。」
ぼっちは自分から仲良くしにいけないからぼっちなのだ。ぼっちとぼっちが会ったところで線が繋がる訳がない。
「そっか、そうだね。」
今日の留美はよく喋る。同じぼっちで、こうして関わったから、きっとわかるところもある。勿論、確実性はなく、あくまで空想でしかないが、それでも少しは俺と留美は

共通するところもあるのだろう。留美はそれで俺に話すのだ。
「私は八幡と会えて良かった。あの時、林間学校に本当は行きたくなかったけど、行って良かった。色々わかったから。一人だからってなんにも困らない。八幡みたいな人も居るもんね。」
「うるせ。俺はプロぼっちだからな。留美よりも上手く一人が出来るんだよ。」
「またそれ、変なの。ふふふ。」
　そのまま数時間、俺と留美はたわいもないことを話した。学校や、奉仕部のこと、ぼっちとは何たるか。くだらない話だったが不思議と心地いい。留美はその間よく微笑んだ。留美はこれからも一人で居ると言ったが、きっとそれはいつか終わるだろう。留美はもうあの時の顔をしていないから。
「さてと、そろそろ帰るか。送ってくぞ。」
「うん、ありがとう。行こう。」

　少し歩いて電車に乗り、そして留美の家の前に着く。
　留美はそこで少しさみしそうな顔をした。
「何かあったか？」
「ううん。今の八幡はさ、偽物なんだよね。消えちゃうの怖くないの？」

消える…。そういえば考えてなかった。本物が居る以上、俺は偽物であり、消える存在だ。怖くないと言うのは嘘だろう。だが…

「消えるのが俺の仕事なんだろう。消えたあとどうなるかはわからないが…きっと本物の俺はそうしないと困るだろうしな。いつまでも隠しておけることじゃねえからな。」

「…私と話した事とかも消えちゃうのかな。」

「さあな。だが、留美が覚えてればいいんじゃねえの？そうすりゃ消えないかもな。知らんけど。」

「…うん。あのね八幡。今日はありがとう、楽しかった。」

「話しただけだけどな。」

「うん。…それでも楽しかった。八幡。」

急に留美が真剣な顔になる。思わず姿勢を正してしまった。

「私は…鶴見留美は、八幡が好きです。私はまだ中学生だけど、この気持ちは伝えたいから。」

鶴見留美は笑った。頬を少し赤くして、照れくさそうに。

「返事はね、後でいいよ。記憶は無くなっちゃうかもしれないけれど、その時はもう一回、本物の八幡に伝えるから。…じゃあね。」

そう言って留美は再び笑う。俺は…その告白に返事をする事は出来なかった。

―――――――――八幡―――――――――

どうやら一人消えたらしい。　と言うのは、俺にその消えた偽物の記憶が残っていないからだ。由比ヶ浜から連絡があって、鶴見留美から消えたと聞いたと。

「方法は合ってたみたいだな。どんな方法かは知らんが、ルミルミがやったことは成功したらしいな。」

「ごみいちゃんが一人減って小町はさみしいような、悲しいような…。あ、今の小町的にポイント高い！」

「言っちゃったら、嘘っぽいだろ…。」

…偽物の俺はどんな気持ちだったのかね？

２５章・結衣は勉強が出来ない。

今日も真夏日で太陽は地面をジリジリと焼いている。セミが鳴き、そこかしこで営業をしているサラリーマンは汗を拭いながら仕事のために歩くのだ。やはり俺は将来働かないと心に誓った。

「比企谷くん。変な妄想をしていないで由比ヶ浜さんの勉強を手伝ってくれないかしら。」

「いや変な妄想じゃねえよ、この暑さと将来についてだよ。」

「あら、あなたが随分高尚な事を考えているのね。それで何かわかったの？」

「ああ、やっぱり働いたら負けだ。」

「…やはりあなたはあなたなのね…。」

雪ノ下は溜め息をつくと、こめかみに手をあてて明らかに呆れている。失礼だな、充分高尚な考えだと思うが。

「うーん、ここの作者の考え…。」

どうやら由比ヶ浜は現代文で悩んでいるようだ。

「なるほどな。これはまずこうして必要ない部分を削るだろ。それから…。」

「あ、そーなんだ！ヒッキーありがとー！」
　由比ヶ浜の悩んでいる部分を要点だけ伝えて、解き方を教える。よく作者の考えや心情を書けと言う問題があるが、実際作者の考えなんざわかる訳がないのだ。締め切りめんどいとか、腹へったーとか、っべーわーとか何を考えてたかなんて本人にしかわからない。あくまで文章から考えて解くのだから、要らんものは削り、必要な部分から読み解けば良いのだ。
「比企谷くんもたまには役に立つのね。」
「失礼だな、たまにでも役に立ったことなんて無いぞ。」
「何故自慢気なのかしら…。」
　再び溜め息をつく雪ノ下。そんなに溜め息ついてると幸せが逃げますよ？実際は知らんけど。
「ところで由比ヶ浜ってどうやって総武に受かったんだ？」
「ヒッキーうるさいし！」
「私も少し疑問に思っていたわ。」
「ゆきのんが裏切った⁉」
　由比ヶ浜は騒々しいなー。元気な事は良いことだが。
「推薦か。」

「推薦ね。」
「何で息ピッタリだし⁉違うし！ちゃんと受験して受かったの！あたし中学校の頃はこんな派手な格好してなかったから、結構勉強もしてたし。」
由比ヶ浜が地味な格好…予想できんなー。多分どうやっても雪ノ下と違う部分は派手だっただろうし…。
ゲシッ！
「いてっ！何すんだ雪ノ下！」
「あなたが何か失礼な事を考えていた気がしたのだけれど。」
いや確かにそうだけども。エスパーか。

「いやぁヒッキーとゆきのんのおかげで今日はいっぱい出来たよ！二人の教え方分かりやすいし頭に入ってくるし。」
「まぁ元々空っぽなら入るだけだしな。」
ゲシッ！
「いてっ！」
「空っぽ言うなし！」
「悪かった悪かった。空っぽじゃなくて、違う所に栄養が行っただけだったな。」

ゲシッ！ゲシッ！
「いてっ！いてっ！」
何でか両方から蹴られる。いやまぁ胸とかに行ったって事だけどさ。何故由比ヶ浜だけじゃなく雪ノ下まで蹴ってくるのん？
「比企谷くん、死にたいのかしら？」
「い、いや…。」
「ヒッキーさいてー。」
う～む。ハッキリと言ってないのにこの察し力は何なんでしょうか。怖いんだが。
「やっはろーでーす！」
小町が突然入ってくる。当然ノックなしだが、雪ノ下は何も言わない。雪ノ下さん俺以外に甘すぎぃ！
「こんにちは小町さん。」
「やっはろー小町ちゃん！」
「今日は一色はどうしたんだ？」
いつもならせんぱーいとか言いながら騒がしく来るんだが…。
「平塚先生に捕まって、色々やらされてるよ～。いろはさん一応生徒会長だからね～。」

「あはは…。」

由比ヶ浜も呆れてるな。確かにあいつ、職権乱用しまくるし、仕事全然しねえもんな～。

「今日は何してたんですか？」

小町が由比ヶ浜の方を覗く。

「これなんだけどね。1年の時の復習だったんだけどわからなくてゆきのんとヒッキーに聞いてたの。」

「おー、小町が今やってるとこですね～。」

「小町ちゃんは出来た？」

「バッチリですよ！」

ビシッと指を立て、片目をきゅぴーんと閉じてウィンクする小町。あざといがやはり可愛いな小町は。

「うう…。あたしだけだったかぁ…。」

「だ、大丈夫よ由比ヶ浜さん。私が教えるから…。」

雪ノ下はとことん由比ヶ浜に優しいな。親友だからかな。それともゆるゆりだからでしょうか。いいぞもっとやれ。

結局最終下校時間ギリギリまで由比ヶ浜の勉強を手伝っていた。
「小町今日は食って帰るか。」
「せんぱーい、仕事頑張ったのでおごって下さい♪」
「うおっ！」
一色がいきなり現れたからビビった。
「どっから現れたんだ…。」
「先輩待ってたんですよ～。」
きゃぴっとウィンクする一色。可愛いけど…
「はいはいあざといあざとい。」
「あー、酷いですよ先輩！こんな可愛い後輩が待ってたんですよ？もっと喜んで下さい！」
頬を膨らませてふて腐れる一色。
「はいはい嬉しい嬉しい、嬉しいし可愛い可愛い。小町と戸塚の次くらいだけどな。」
「え⁉」
いきなり頬を赤くしてテレる。
「ヒッキー、あたしは⁉」
「きょ、興味は無いけれど負けるのも癪だから私も比企谷くんの意見を聞いてあげる

わ。」
「いや何でだよ。…ま、同じ位じゃねえの…。」
そう言ったら二人とも真っ赤になって俯く。お、怒った？
「そっか…そーなんだ…。」
「…。」
何か二人ともニヤニヤしてるんだけど。怖い。あと怖い。
「お兄ちゃんもすみにおけませんなー。」
小町が茶化してくる。可愛いけどムカついたので頭を目茶苦茶ワシャワシャした。

２６章・さがみんの泣く頃に

今日は相模とのデートだ。去年の文化祭での一件を引き摺っていた相模は今俺以上に一人でいることが多い。クラスで仲良くしていた奴も今は相模に対して距離をおいているし、相模自身も近づかない。ま、俺の方がぼっち歴長いから。先輩だから。

――――――偽八幡（相）――――――

待ち合わせた千葉駅に着くと、相模がこちらに気付き、少し微笑みながら歩いてくる。…一応こいつも見た目は可愛い方なんだよな。

「悪い、待たせたか？」

「ううん。うちも今来たし。比企谷ってさ、普段何処いってんの？」

「普段？…家だな。」

「そういうことじゃないから！いきなり家でデ、デートなんて出来るわけないじゃん！」

デート…そう聞いて顔を真っ赤にして反射的にお互いに顔を逸らしてしまう。そ、そうか…デートだった…。

「比企谷は…あの時うちにムカついた？」

ららぽーとに向かいながら歩く道すがら相模がそんな事を聞いてくる。
「…おう、ムカついたぞ。ムカつきすぎて魔女化してしまうくらいだ。」
「ぷっ、何それ。あんた男じゃん。」
おいおい、魔法少女まど〇☆マギ〇を知らないのか…⁉くっ…話を繋げられるのか！
「あんたってやっぱアニメとか見るんでしょ？今のもアニメでしょ。でもやっぱムカついたんだ…。」
さっきまで笑っていたが急に俯きがちになる。コイツ…何か守ってやりたくなるだろ、やめろよそういうの。お兄ちゃんスキル発動しちゃうだろ。
「ちょ…何してんの⁉」
あ、しまった。小町にいつもやってるみたいに頭を撫でてた。
「あ、すまん…嫌だったか。ついいつも妹にやってるみたいにやっちまった。」
「嫌…じゃないけど。か、勝手にすれば。」
そう言って俺とは反対に顔を向けてしまった。
「エヘヘ…ラッキー…。」
相模は何かボソッと言ったが周りの喧騒にその声は飲み込まれてしまった。

「ゲームセンターかぁ…ま、比企谷だしこんなとこだよね。」

「悪かったな、デートなんてしたことねえから、どういうとこが良いかわからないんだよ。」
「悪いなんて言ってないじゃん。比企谷らしいよ。」
今日はよく笑うな。クラスじゃ最近誰かと話しているとこすら見ないのに。
「あー、これ欲しい。比企谷これ取ってよ。」
相模はＵＦＯキャッチャーの景品のぬいぐるみを指差す。どうやらウサギのぬいぐるみのようだ。こ、コイツ…戸塚と同じ動物が好き…だと…。
「ああ…まあいいけど。」
そう言って相模に手を向けるが、不思議そうに首を傾げている。
「何？」
「いや何って…金。」
「えっ⁉デートなんだよ？取ってくれないの？」
マジか。デートするとこういう景品は男が自腹切って取ってあげるのか。カップル最低だな。
「マジかよ…仕方ねーな…。」
「比企谷頑張れー。」
応援がムカつく。このアマ反省したら今度はわがまま放題かよ。本物の俺に聞いて

知ってるんだぞ。
7回チャレンジしてようやっと取れた。
「…ホラよ。」
「やった、比企谷ありがと。ごめんね。」
これで許しちゃうんだから俺も大概甘い。だって一時腹立ったとはいえ、やっぱ可愛いんだもんコイツ。
「次これやろ！ほら比企谷早く！」

5時間位付き合わされた。ゲーセンで5時間も居たせいで金もやべえ。何がヤバイってマジやばい。俺の語彙力が無くなるくらいにヤバイ。
「おい、さすがに金ねえよ…。」
「わかった。あ、気付かなかったけどお昼過ぎてたんだね。ご飯食べよっか。」
「いや、だから金…」
相模はいそいそと持ってきていた手提げかばんからランチボックスを出す。
「どっか座って食べよ。」
コイツ…意外と女子力たけえ。
「今日はせっかくだから作ってきたんだ。うちの特製サンドイッチ。ほら比企谷の分も

あるから。」
「お、おう。」
　サンドイッチを１つ、貰って食べる。
「おお…旨い。」
「でしょ？うち一人っ子で両親も普段共働きでいないから料理してて得意なんだよね。今日は簡単なのだけど、いつかちゃんとしたの作ったげる。」
　いつかって…何で約束みたいになってるんだよ。…俺は今日で消えるかも知れないのに。
「比企谷って何が好きなの？」
「あー…甘いものかな。」
「あ、やっぱり。ＭＡＸコーヒー飲んでるもんね。あれうちは甘すぎて無理。でも、はい。」
　相模が不意にこっちに何かを渡してきた。それは…俺が好きな千葉のソウルドリンク、通称マッ缶だった。
「おうサンキュ。」
　マッ缶は旨いなー。人生は苦いからね、マッ缶位は甘くていいよね。

今日は相模の意外な一面を沢山見れた。ゲーセンでは子供みたいにはしゃぐし、お昼ご飯は料理の腕前に驚かされた。由比ヶ浜にもこのくらいの腕があれば…。
「比企谷今日はありがと。それでさ、うちを家まで送ってくれる?」
「ああ、まあそのくらいなら。俺を消す方法もあるしな。」
「うん…。」
相模を送って相模の家の前に着く。相模は家の前で俺の方を向いてモジモジしている。
「比企谷あの…さ。去年の文化祭の時あるでしょ?アレは比企谷にとってもうちにとっても最悪だったし、最低だったよね。」
「…。」
相模は何かを言おうとしているのだ。ここで茶化すのは違うだろう。
「でもね、うちにとってはアレは良かったって思うんだ。比企谷には迷惑沢山かけておいて何がだよって感じだけど…。」
相模の目にはうっすらと涙が滲んでいる。
「うちがグズでミスっちゃって、パニクって、屋上に隠れてさ…。そしたら比企谷が見つけてくれて怒鳴ってくれてさ…。比企谷の癖に!って思ってやる気だして…。うちって…どうしようもないよね。」

違う。そう言おうとして、だが相模の涙が頬を伝ってるのを見て思わず止まってしまう。

「比企谷、見つけてくれてありがとね。そしてごめんなさい。やっぱアレはうちのミスだから。だからごめん。それでさ…その…うちは…相模南は比企谷が好き、です。へへへ…今の比企谷は偽物だから、いつかまた本物にちゃんと言うから。だから…またね。」

相模の頬には涙が何本も流れていたが、顔は確かに微笑んでいた。

27章・ぼっち王子と笑いすぎな女子

昨日で二人目が消えた。順調だ。だが、何故消えたのかは一切語られていない。俺にはあの7人とのデートの記憶が入らないのだ。無論理由は後で教えてくれるだろう。今は信じる以外ない。

――――――偽八幡（折）――――――

今日は折本とのデートだ。中学校時代に唯一俺が告白した女子。誰にも気兼ね無く話し、誰とも距離を取らない。それは由比ヶ浜ですら出来ない行動力の為せる業だ。それを勘違いした当時の俺は、その後から勘違いをしないように生きてきた。

「あっ、比企谷先に来てたんだ～。待った？」

「いや、大して待ってねーよ。とっととどっか行くぞ。」

「だよね～。」

折本はタハハと笑う。ウェーブのかかった茶髪に整った顔立ち。そしてこの距離感のない笑顔で俺は騙されたのだ。

「じゃ～、カラオケでも行こっか。」

「おい、いきなりハードル高すぎだろ。」
「だって比企谷そういうの決めれなそうじゃん。マジウケる。」
「いや、ウケねえよ。」
　一体どんだけウケるんだよ。笑いのツボ簡単すぎっだろ。
「いいからいいから。カラオケ決定ね。私、比企谷と行くの初めてだよね？」
「ああ、そりゃそうだろ。むしろ誰かとカラオケが初めてまである。」
「何それウケる！」
　コイツ…。ツッコミ待ちなのにボケ殺しかよ。俺傷ついちゃうよ？
「あれ、折本さん？」
「あ、玉縄君じゃん。どうしたの？」
「たまたま買い物のためにここに来たんだけど…折本さんに会えるなんてこれはミラクルな奇跡だね。」
「玉縄君ウケる、何言ってんのかわかんないし。」
　まあ奇跡の奇跡だからね、同じ事言ってどうすんでしょうか。
「折本さんはどうしてここに？」
「え？えっと、この比企谷とデ、デートかな。」
「えっ⁉」

おいおい、玉縄が目茶苦茶ショック受けてるぞ。どう見ても折本の事好きだもんなコイツ。そして折本が照れて言うから俺もある意味衝撃的なショック受けました。衝撃2回言っちゃう位。玉縄やっぱ何言ってんのかわからないわ。

「そ、そうなんだ…ハハハ…。」

「うん、じゃあね玉縄君。」

「…。」

完全に撃沈したな～。

「お前、ひでえな。アイツ絶対お前に好意抱いてるだろ。」

「うん？そうだね～。でも私、玉縄君苦手なんだよね～。何言ってんのかわかんないし。ウケるけどさ。」

「いや、だからウケねえよ。」

何回ウケるんだお前は。

「比企谷って何歌えんの？」

「アニソン。」

「やっぱそうだよね、ウケる。」

ケタケタと笑う折本。可愛いんだが、何でこんなに笑うんだコイツは。

折本の歌は上手かった。由比ヶ浜と雪ノ下も上手かったが、何て言うか明るくて裏も表もない純粋な歌だ。聴きやすいし、性格の様な歌声だった。
「ほら、比企谷も歌いなよ。私ばっか歌ってるし。」
「苦手なんだよ、ぼっちだったから。」
「それあるよね。私も最初は苦手だったからね～。でも一度歌ったら変わるよ。」
仕方無しにマイクを持って得意なアニソンを歌う。女性ボーカルの歌ではあるが、ユキトキや春擬きを歌った。いいよね、ヤナギナギ。
「全然あるじゃん。比企谷歌上手いよ。何か比企谷が歌上手いって意外だしウケる！」
「何回ウケるんだお前は。」
「だって楽しいしさ。比企谷といるの。」
「…は？」
俺と居て楽しい？馬鹿な。過去にフッた男だぞ。
「ま、まあいいじゃん。ほら歌おうよ。」
心なしか折本の頬が赤く見えた。
「いやー、歌った歌った！やっぱ歌はいいよね。」
「まあ悪くないんじゃね。」

「さって、結構歌って疲れたし、どうしよっか。」
「そりゃ歌いたい放題だからって7時間もいりゃそうだろ。」
朝から夕方まで歌えば疲れるのは当たり前だ。
「比企谷の歌良かったからさ～。」
「ヘイヘイ、ありがとよ。」
「ホントだって。私比企谷の歌、好きだよ。」
ドキッとするからそう言うのやめろ。また勘違いで告白して玉砕しちゃうだろ。玉砕するのかよ。
「私、比企谷の事何にも知らなくてさ。葉山君に怒られたじゃん？それに由比ヶ浜ちゃんや雪ノ下さんみたいな可愛い優しい子も知り合いでさ。比企谷の事知りたいなって思ったんだよね。」
折本は相変わらず笑っている。
「クリスマスイベントの話し合いとか比企谷凄かったしさ。玉縄君論破して。」
「いや、アレは雪ノ下と由比ヶ浜が…」
「それに一色ちゃんみたいな子も周りにいるし、他にも居てさ。バレンタインデーとか私がチョコあげるって言ったらみんなビックリしちゃって。ウケるよね。」
無視な上、またウケちゃうのかよ。

「私そのあとも比企谷とたまに会って色々話したりしてたじゃん。それで、それでさ。比企谷と話すんの楽しくなっちゃってた。比企谷、私、比企谷が好きになっちゃった。ウケるよねこんなの。私比企谷フッたのにさ。」

困ったように笑った折本に俺は何も言えなかった。

「今日のは練習みたいなもんだから。歌と一緒だね、最初は緊張するけど。本番は頑張れる気がする。ありがとね比企谷。」

最後にまた笑った折本の顔から俺は目を逸らすことができなかった。

２８章・よんでますよ、一色さん

折本とのデートも終わり、これで3人の偽物が消えた。しかし…全然共通点が見つからない7人が何故俺の偽物を消す方法なのか…イマイチわからない。

今日も奉仕部の教室で勉強をしながらそんな事を考える。もうすぐ終業式だから、夏休みに残り4人とのデートを済ますらしい。と、そんな時にいつも通りノックもせずに平塚先生が入ってくる。

「一色はいるかね。」

「平塚先生、ノックをしてください。一色さんは今日はまだ来ていませんが。」

「そうか、では来たら職員室に来るように伝えてくれたまえ。」

一色の奴また何かやらかしたのか。仕方ない、一応平塚先生には世話になってるからな…。

「…一色探しに行ってくる。」

「え、ヒッキーいろはちゃんに用事？」

「ちげーよ、平塚先生が呼んでただろ。」

由比ヶ浜も聞いてたはずなのに…。アレか、ナギナギですか、そーですか。

「電話すればいいんじゃないの？」
「あ。」
そーか、むしろ俺が何言ってんだってことだったのか！恥ずかしー！今すぐベッドでゴロゴロ悶えたい！

ダダダダダ…ガラッ！ピシャッ！
「ハァ…ハァ…せ、先輩が呼んでるって…どうし…たんですか…？ハァハァ…。」
何でコイツこんなに疲れてんの？
「はっ、もしかして、わたしに会いたいけど自分で電話するのは恥ずかしいから結衣先輩に頼んでしてもらったんですかちょっと可愛いかもとか思っちゃいますけどやっぱり自分でかけてくれた方が嬉しいので次は自分でかけてくださいごめんなさい！…ハァハァ…。」
は、早口過ぎて何言ってんのか聞き取れねえ。つうか疲れてんのに早口で話すなよ…。
「一色さん、呼んでるのは引き金くんではなくて、平塚先生よ？」
「何で俺は危険な奴みたいになってんの？何か危険のきっかけなの？」
「う…平塚先生…でしたか…。」

何かやったのか。ヤバイって顔してるけど。
「どうしたんだ？」
「じ、実は…生徒会の仕事あるじゃないですかー。その書類の締め切りを忘れてて…まだ…終わってなくてー。
」
「終わってなくてー。…じゃねえよ、平塚先生怒らせたら死ぬぞ。」
「で、ですよねー…。」
『2ーA、一色いろは、至急職員室に来るように！』
「ひっ！」
あー…終わったなー。
「…じゃあな一色。短い間だったが、お前の事は忘れない。」
「ちょ、せんぱーい！見放さないで下さいよー。」
「おい、掴むな！俺はまだ死にたくねーんだよ！」
「ぶう…先輩のせいでもあるんですからね！責任取ってくださいよー。」
あばばば…襟を掴まれてガクガク揺らされる。
「だぁー！何で俺のせいなんだよ！」
「先輩がぁ、増えたからに決まってるじゃないですかー。というわけで一緒に来てくだ

さい！」
　ぐっ……！きたねえ！コイツ、いつも思うが意外と策士だ……！
「比企谷くん…五月蝿くて勉強の邪魔だわ。一色さんと行きなさい。」
「…わかったよ…はぁ…。」
「よろしくです！」
　キャピっとウィンクする一色。あざとい…。

「ほう…つまり締め切りを忘れていたと。どんな理由があったのかね？」
「えっと…その…。」
　理由は言えないよな、あんな事を正直に言っても馬鹿にしてるとしか思われないだろうし。
「平塚先生。」
「なんだ、比企谷。そもそも何故君が居るのかね。」
「えーと、一色にはちょっと俺の用事を頼んでまして、代わりに俺が生徒会の書類の方をやるって言ってたんですけど…。」
「ふむ、言ってたんですけど…何かね？」
「忘れてました！」

てへぺろっ！おえ！
「比企谷、言い残すことはあるかね？」
「え？いや、ちょっと暴力はんた…」
「二重の極み！」
ドゴォッ！
「ひでぶっ！」
「仕方ない、一色、比企谷。二人で今日中に終わらせてこい。」

「すいません、先輩。」
「い、いや、別にいいんだけど…何か冷やすものくれね？」
思いっきり殴られたから腹がヒリヒリする。あの人マジで何で訴えられないの？俺だけなの？
「先輩、さっきのてへぺろは無いですよー。キモかったですし。」
「助けたのに酷くない？」
「でもちょっとかっこよかったですよ♪ありがとうですっ！」
すげーいい笑顔だなー俺殴られて痛いんだけどなー。
「それじゃ、ささっと終わらせちゃいましょー。」

「おー…。」
はぁ…。

「一色、こっち終わったぞ。」
「あ、ハイです！わたしも終わりました！」
「じゃあ後はいいだろ？平塚先生のとこは頼む。」
「えー。一緒に行きましょーよー。」
あざとく頬を膨らませやがって。断りづらいでしょうが。
「わかったわかった。じゃあ行くぞ。」
「はーい♪」
その後、平塚先生に二度とこんなことが無いようにと釘を刺された。怖い。平塚先生マジ魔王。
「終わって良かったです！先輩助かりましたー。」
「もう忘れんなよ。」
「はいっ♪」

後日、一色はまた平塚先生に呼ばれた。また違う書類忘れたらしい。俺は行ってない

から知らんが、その後一色を見た者はいない…。

「勝手に殺さないでください！ヤバイんですヤバイんです先輩！また手伝って下さいよー。」

「お前なぁ…わかったわかった。行くから裾を引っ張るな。伸びる！」

２９章・川崎沙希は比企谷八幡に恋してる

今日から夏休みだ。で、今日は川崎な訳だが…。何故か小町は大志の野郎と遊びに行くらしい。よし、アイツは俺が責任持って後で殺そう。

――――――偽八幡（川）――――――

何故か川崎家に呼ばれた。デートと聞いたんだが、これは所謂お家デートか…。しかしそんな仲でも無いのだが…。

ピンポーン！

「いらっしゃい、待ってたよ。」

「待ってた…？」

「え、あ、ち、違うから！けーちゃんが、ってことだから！」

ビックリしたわ、川崎が待ってるとか殺されるか殺られるしか思い付かないし。あらやだ！どっちも殺されてる！

「はーちゃんいらっしゃい！」

「おう、元気だったか？」

「うん！」
「悪いね。今日は私とでしょ？けど、今日は大志も他の連中も居なくてさ。けーちゃん見てなきゃいけないし…。」
「別に構わないけどな。」
　本当に弟たち想いの姉だ。
「じゃあけーちゃん、はーちゃんと遊んでてね。ご飯作ってくるからね。」
「うん！はーちゃんあそぼー。」
「よーし、何する？」
「う～んとね、おままごと！はーちゃんおとーさんね。さーちゃんがおかーさん。けーかはこども！」
「ちょ、けーちゃん⁉」
　マジかー。まさかそーくるとは思わなかったわ。
「まぁまぁ、気にすんなよ。遊びだし。」
「そ、そうだね。遊び…遊び…うん、遊び…。」
　なんだ、こえーな。川なんとかさん大丈夫か。お、良い匂いしてきた。料理も出来るし本当に良いお姉さんだ。
「はーちゃんおとーさん、けーかははーちゃんおとーさんすきー！」

「おう、おとーさんもけーちゃんが好きだぞー。」
「けーかはさーちゃんおかーさんもすき！」
「おう、おかーさんもけーちゃんが大好きだと思うぞー。」
　ちょっと言ってて恥ずかしいけど気にしないでおこう。
「はーちゃんおとーさんはさーちゃんおかーさんすき？」
「ぶっ、な、何でだ⁉」
「すき？」
「お、おう。す、好きだぞ。うん。」
　嘘でもいいからこう言っとかないとな、ままごとで夫婦役だしな。顔めっちゃ熱い。
　ガシャッ！
「ん？」
　何かが割れる音に振り向くと、川崎がコップを落として固まっていた。
「あ、あんた…私が好きって…。」
　げっ、今の聴かれてた⁉
「い、いや、ほら、ままごとで夫婦役だしな！だから！」
「そ、そうだよね、うん。あ、片付けるね。」
　カチャカチャ。心なしか川崎の顔が赤い。俺も多分真っ赤だろう。

「はーちゃんおとーさん、つみきしよー！」
「おう、よーし、やるぞ！」

川崎が料理を作ってくれた。オムライスにスープ、なかなか旨そうだ。里芋の煮っころがしもある。
「サンキューな、俺の分まで。」
「いいよ、京華がお世話になったし。」
「おいしー。」
川崎は優しい笑みを浮かべて京華の頭を撫でる。
「そういえば、大志は小町とどこに行ったんだ？」
「男女何人かでプール行ったらしいけど。」
「何⁉よし、大志をフルボッコに…」
「あん？」
じょ、冗談ですよ、やだなぁ。怖い。あと怖い。本当にブラコン過ぎだわ、この人。
「ごちそーさま…けーかねむくなってきちゃった…。」
「じゃあ寝よっか。」
「うん。はーちゃんとさーちゃんもいっしょね。」

おいおい、流石にそれは…。
「け、けーちゃん、それは…。」
「だめなの？」
「わ、わかった。一緒に寝ような。」

京華を寝付かせ、隣で見ている川崎。その顔はまるで母親の様だ。
京華はスースーと寝息をたてている。
「すまないね、京華のわがままで。」
「気にすんな。俺を消すためだしな。」
「…あのさ、スカラシップとか、ありがとね。アレが無かったらこんな風に京華とか大志達と話せて無かったと思う。」
去年の話か。川崎は無理なバイトをして学費を稼いでたんだもんな。大志が心配して小町に相談して俺に話が来て…。それから多少川崎と関わるようになった。…黒のレース思い出した…。
「それも気にすんな。奉仕部の仕事のうちだ。」
「でもアレは、大志だろ？大志は総武じゃなかったしさ。」
まあ確かにそうだけど、雪ノ下は断らないしなぁ…。

「実はさ、私はあの時から、あんたの事好きになっちゃってたみたいなんだ…。」
「ほあっ⁉な、何で⁉」
「私達の為に仕事とはいえ、頑張ってくれたの嬉しかったし、あの後も京華の事とか…。文化祭であんたに『愛してる』なんて言われて動揺して…そこで気付いたんだよ。あんたが好きなんだって。」
川崎が真剣に俺への好意を語る。これを勘違いだと言うのは簡単なはずだが、俺にはどうしても答える事はできなかった。

３０章・虎視眈々恋いろは

昨日、また一人消えた。何か最初はキモいと思っていたが、自分が消えてくのもやはり気分の良いものでもないな。…概ね理解はした。七夕の日のあの願いが関係してるんだろう。

『俺の知り合い達の願いを叶えてくれ。』

…信じられないが、事実俺が増えたこともある。あの願いによってあの7人の何かしらの願いを叶えてしまい、だからこそ雪ノ下達がわかったのだ。

…話は変わるが、昨日、小町は大志達と遊びに行ったが、結局すぐに男女別れて遊んだらしい。カップルだった奴らがケンカしたとかで。ザマァ。

――――――偽八幡（一）――――――

いつもの様に総武高校に来たが…何故夏休みに来なきゃいけないんだろうか。一色とのデートのハズだが…。いや、アイツは生徒会長だからな…。一応だが…。

「せんぱーい！来てくれたんですね～♪」

「そりゃこれもある意味仕事だからな。」

「またまた～♪わたしに会いたかったんですよね？」
「いや別に。むしろ帰りたい。」
「ひどいないですか～⁉」
うむ。いつもの一色だ。しかしよく俺とのデートを引き受けたな。俺のせいかも知れんのに。
「それじゃーまずこれヨロシクです♪」
ドサドサッ。
「…何これ。」
「生徒会のお仕事ですよー。夏休みなのに酷いですよねー。」
ひどいのはお前だと言いたい。何故俺がお前の仕事をやらんといけないのか。言っても無駄だから言わんけど。
「終わったらデートですね、先輩へのご褒美ですよー。」
「帰っていい？」
「だ、ダメですよー！デート出来ないじゃないですか！」
「いや、俺は別に…。」
アレ？何でこんな怒ってんの？俺とデートなんてしたくないんじゃねえの？あれか、俺が沢山居るのはやっぱキモいから早く消したいのか。

「まったく、唐変木なんですから…。とにかく、ちゃっちゃと終わらせて行きましょー！」
「へいへい、俺を消すためだもんな。」
「⁉」
　ん？何でコイツビックリしてんの？その後不安そうな悲しげな顔してるが…。
「そ、そうですよー！消さなきゃです！」
「？」

「さって、先輩どこに連れてってくれるんですかー？」
「何でお前普段からあんなに早く仕事しないの？」
　何故かいつもじゃ見れないくらいのスピードで仕事終わらせた一色は、どうやら内容も完璧だったらしく平塚先生が驚いていた。
「それじゃ先輩に仕事あげられないじゃないですかー。」
「いらねえんだが。」
「先輩に会うためですよ？」
　上目遣いでそう言う一色。やめろ、勘違いするだろうが。
「嘘をつくな、嘘を。」

「やっぱ先輩ですねー。普通の男の子なら一発なのに。」
あざとすぎなんだよ。プロぼっちの俺はそんなことで勘違いはしない！
「ホントなんですけどね…ボソッ」
「ん？何か言ったか？」
「何でも無いですよー。それよりどこに連れてってくれるんですかー？」

とりあえず以前に一緒に来た喫茶店に来てみたが…。
一色はどうやら喜んでいるみたいだ。
「先輩ここ覚えててくれたんですね～♪わたし的にポイント高いですよー！」
「お前は小町か。」
「…先輩、デート中に他の女の子の話はポイント低いですよ。」
睨むな、怖い怖い。小町が怒った時みたいに怖い。やはりあざと姉妹か。小町が生徒会の仕事手伝いはじめてから余計に似やがって。
「それはそうと、やっぱここ雰囲気良いですねー。」
「そうだな。静かだし今度一人でここで本読みに来よう。」
「せんぱーい、悲しくなりますよー。そこは彼女と来よう！でしょ。」
「ばっか、俺に彼女とか出来るわけないだろ。」

…何を言ってるんだろう俺。泣きたくなってきた。

喫茶店で少々他愛のない話をして、ららぽーとへ向かう。何やら一色は水着を新しく買いたいとか。

「そういえばお前、葉山はいいのか？」

「へ？」

「いや、だから葉山は？こういうのは葉山と来たほうがいいだろ。」

「もう先輩！葉山先輩は三浦先輩と付き合ってるじゃないですか！いくらわたしでも盗ったりしません！それにもう葉山先輩には興味もあまり無いです！」

「え？あいつら付き合ってんの？」

知らなかった…。まあ興味もなかったけど。

「知らなかったんですね…。とりあえず先輩、あそこです、早く行きましょー！」

水着ショップに来たが…場違い感半端ない。しかも一色はそれなりに見た目良いから他の男共の視線が痛い。

「先輩これどうですかー？」

そう言って一色が見せてきたのは、白いビキニ。

「い、良いんじゃねえの？知らんけど。」

「じゃあちょっと着てみますね！」
「え？お、おい！」
さっさと試着室に入っていってしまった。…男どころか、普通に水着を選びに来た女子まで俺を不審な目で見てくる。帰りてえ…。
「どーですか？先輩！」
着替えて出てきた一色を見て、俺は焦る。結構際どい…。
「お、おう、良いと思うぞ。だからそろそろ…。」
「あ、こっちも可愛い！ちょっと着てみますね！」
「お、おい…。」
結局5着位試着したのに最初のになった。俺が一番焦ってたからしい。

その後、色々ショッピングして、一色を家まで送ってきた。なかなか良い家に住んでいる。
「先輩今日はありがとです！」
「おう。」
「それで先輩。ちょっとお話するのでちゃんと聞いて下さいね。」
いつになく真剣な眼差しの一色。きっと俺が消える方法を語るのだろう。

「去年先輩に会って、色々お話して…先輩が実はかっこよくて、先輩の熱い気持ち聞いちゃって、それで…。本当は葉山先輩の事、デスティニーランド行く前に興味なくなっちゃってて…。」

え？コイツ何を…葉山に興味なかった？デスティニーランド行く前から？俺が…かっこいい？何を言ってる…？

「先輩の口車に乗せられた振りしてたんです！ホントは先輩が好きです！他の人達に負けないくらい好きです！わたしも本物が欲しいから…。」

「…。それは…。」

「へ、返事はいいんです。だって今の先輩は…消えちゃうから。ずっとずっと…好きでした。先輩…が。これからも…先輩を…好き…です…。責任…とってくだ…さいね…。きっと、もう一回、言います、から…。」

涙を流しながら一生懸命に告白する一色に俺は返事を返す事は出来なかった。…だからさっきあんな顔…

31章・しあわせそうなサブレさん

残りは2人。由比ヶ浜と雪ノ下とのデートだけだ。

由比ヶ浜とは夏祭りに行ったりハニトーを食べに行ったりしているので、正直言えば2人での行動は初めてではないのだが、デートとなれば別である。そもそもデートなんて産まれてこのかた全然してないぼっちの俺だと言うのに、何故か去年から増えたのは由比ヶ浜の存在もあったかもしれない。ま、今日も俺じゃなくて偽八幡が行くんですけどね。

――――――偽八幡（由）――――――

由比ヶ浜とのデート。これはある意味で最も危険だと言える。まず最初に由比ヶ浜はアホの子である。簡単に騙されそうなので、その辺のキャッチセールスとかに引っ掛からないか心配だ。

次にアイツはどこがとは言わんけど柔らかい。なのにくっついてくるのだ。最近特に。おかげで理性の化け物と言われた俺も理性が爆発しそうで怖い。これでも健全な男子高校生ですし。

そして由比ヶ浜は俺が親しいと言える連中の中でも雪ノ下と同じくらいに最も親しいと言える存在だ。奉仕部を無くしたくないという理由で色々やったりもしたほどだ。…それにデートすると言うのはやはり好意を意識せざるを得ない。…そんなことを考えているうちに由比ヶ浜の家に着いた。

ピンポーン！

インターホンを鳴らす。ガチャ。

すると中から由比ヶ浜の姉、もとい母親が出てきた。

「おはようございます、…お久しぶりッス。」

「あらあら久しぶり、ヒッキー君！ちょっと待っててね、結衣呼ぶから。結衣～！」

やはり若いし、綺麗な人だな。そしてヒッキー君って…前にも思ったけど引きこもりみたいなのに君付けって…。

「ヒッキー迎えに来てくれたんだ。ちょっと待ってね、サブレが一緒に行きたいみたいで暴れててさ。ちょっと落ち着くまで待ってて。」

ワンワン！

サブレ、コイツを助けて事故った事もあったが、まあそれは良かったかもしれない。コイツも元気だし、由比ヶ浜や雪ノ下と会えたしな。高校生活はおかげで楽しいと思えるものになった。

「おう、いいｚ…」
　言い終わる前にふと由比ヶ浜の後ろに由比ヶ浜ママが隠れてこっちを見ているのに気付く。
「どうしたのヒッキー。後ろに何かあ…ちょっとママ、何で見てるし⁉」
「あら～私もヒッキー君とお話したくて～ウフフ。」
「良いからあっち行くし！」
「あらあらウフフ～。」
　何て言うか面白い人だ。俺なんかと話したいとか。
　そう考えてると放置されたサブレが嬉しそうに尻尾を振りながら俺に飛びかかってくる。
　ワンワン！
　おいこらやめろ、ヨダレでベタベタになる！
「あ、ごめんヒッキー！サブレ、戻るし！」
　由比ヶ浜に怒られるものの、意に介さずといった感じで更に顔を舐めまくるサブレ。
…うへぇ、もう出かけるのもヤヴァイ。…日下部み○お可愛いよね。
　話が逸れたがサブレを連れて一度由比ヶ浜宅に入り、顔を洗わせて貰った。
「…ありがとうございます。」

「いいのよ、サブレもヒッキー君と会えて嬉しいのね。会えるだけで幸せなのよ。どっかの誰かさんみたいね。」
「ママ！」
「あらあらウフフ。」
　やっぱり面白い人だ。そして抱いてるサブレの頭に乗った二つの…やっぱり由比ヶ浜のお母さんだな。
「それじゃ行こーよヒッキー。」
「行ってらっしゃい、気を付けてね。」

　今日は由比ヶ浜が前から見たかった映画を観に行こうと言うことらしい。
「最近流行ってる映画なんだけど、アニメだからヒッキーも観やすいと思うんだ。恋愛モノでスッゴい話題なんだって。」
「ああ、あれか。ちょうど俺も観たかったしいいぞ。」
「じゃあ決まりだし。時間まだあるから、ブラブラしてこっか。」
　それから二人で映画館までの道程を歩きながら話をする。大学受験の話や奉仕部の部活（これもある意味受験の話だが）、観に行く映画の話等だ。すると、ちょっと離れた位置に珍しい二人を見つけた。

「アレ？あれって姫菜と…」
「戸部だな。」
　二人は何か楽しげに話をしながら歩いている。…手を繋いで。戸部はまだ照れくさそうだが悪い雰囲気では無さそうだ。
「…あの二人付き合ったんだ。いいな…。」
「海老名さんもようやく戸部と付き合う決心したんだな。…今度祝ってやるか。由比ヶ浜、後で俺にメールしてくれ。」
「え？今いるじゃん？」
「いや俺は本物じゃないし。」
「あっ！…忘れてた。アハハ…。」
　まあ別にいいけどな。
「だってヒッキー本物と変わらないんだもん。でもやっぱ寂しいよね、消えちゃうなんてさ。」
「そうかも知れんけど、俺はあくまでバグみたいなもんだ。消えなきゃどんな影響があるかわからない。」
「…そうだね…。」
「それより映画観に行くぞ、もう時間だ。」

「うん！」

32章・結衣の名を

今日見に来た映画。それは恋愛モノだ。俺が恋愛モノと思うかもしれないが、別に嫌いではない。そういうラノベや純愛ものの小説だって読んでいる。

今回のこの映画はアニメでもあるし、俺も観たかった。主人公とヒロインが身体が入れ替わっちゃうと言う、結構ありきたりだが、なかなか面白いし、感動も出来ると話題だったのだ。俺と女子が身体入れ替わったら女子が発狂して自殺しちゃわないかと心配になるだろうが。

由比ヶ浜もどうやら感動してるらしく、真剣に観入って涙を軽く浮かべている。

確かに面白い。だが俺は考えてしまった。これって、俺が消えたら意味なくね？と。

…まあ観たけども。

「面白かったね、あたし少し泣いちゃったー。」

「…確かにな。泣きすぎだとは思うけどな。」

「ヒッキーとあたしが入れ替わったらヒッキーどうする？」

由比ヶ浜と身体が入れ替わる…。いや、ダメだろう。色々目のやり場に困る気がする

し、何より由比ヶ浜のまま風呂やトイレに行ったら由比ヶ浜が可哀相だし、そもそも俺の身体とか由比ヶ浜がヤバイ。
「死ぬな。」
「死ぬんだ⁉」
「由比ヶ浜が。」
「あたしの方だったし⁉」
「いや、だって俺が由比ヶ浜の立場で俺の身体になったら、絶望するし。」
「悲しい話だったし⁉ってかヒッキー今はヒッキーの身体なのに⁉」
「ばっか、俺はこの身体に馴れてるから良いけど、由比ヶ浜とか色々困るだろ。交遊関係とか。ぼっちなめんな。」
「何で偉そうだし⁉はぁ…ツッコミ疲れた。」
　失礼な奴だなぁ。俺は由比ヶ浜の考えを正しただけなのに。
「映画も観たし、次はどこに行こっか。」
「帰」
「さないからね？」
　ｏｈ…。なんて早さで答えるんだ…。雪ノ下乗り移ったのかしら。
「じゃあまたハニトー食べに行こっか。」

　その後再び由比ヶ浜とハニトーを食べて、帰るということになった。…1ヶ所増えただけな気がするが、細かいことは気にしてはいけない。

「やー、美味しかったねー。」
「やはり甘いものは無敵だな。」
　ハニトーしかり、マッ缶しかり。千葉県民はもっとマッ缶推すべき。
「ヒッキーは甘いもの大好きだよね。」
「世の中が苦いからな。せめて飲食は甘い位がちょうど良い。」
「後ろ向きだし…。」
　そんなくだらない事を言いながら、由比ヶ浜を家まで送る。
「ヒッキーちょっと待って。そこに公園あるからさ、そこでちょっと話しよう?」
「あとちょっとでお前の家だぞ?」
「うん、いいの。」
「そうか。」
　由比ヶ浜も色々あるのだ。それに俺はまだ消えていない。
「ヒッキーはさ、ちゃんとあたしの事いつまでも覚えてくれる?」

「何を言って…」
「あたしは一度だってヒッキーの事を考えてない日なんて無いんだ。忘れる訳ない。今日も、ヒッキーはヒッキーだったから、今日の事忘れられないよ。でもさ、今日のヒッキーは消えちゃうんだよね。あたしとのデートも本物のヒッキーは知らないし。」
　本物…。俺は偽物だからな。
「あたしもやっぱり本物の方が欲しいもん。今日は今日で良かったけど、今日以上にヒッキーとデートしたい。いっぱいいっぱい。…ヒッキー、あたしの事一度でいいの。名前で呼んで。」
「由比ヶ浜、それは」
「ヒッキー、お願い。そしたら勇気が出る気がするの。」
　勇気。俺が目の前で消えるからなのか…。由比ヶ浜はみんなと俺との仲介をしてくれていた。偽物が消えたとみんなから由比ヶ浜を介して聴いていた。つまり、由比ヶ浜は俺が目の前で消えることを知っているのだ。人が目の前で消えるなんて、怖いだろうしな。それとも…。何にせよ真剣な眼差しだ、応えてやるべきだろう。
「…結衣。」
「…ありがとうヒッキー。…あたしはヒッキーが好きです。ヒッキーとの出会い方は最悪だったけど、ヒッキーとの今までは最高だったから。ずっと忘れない。今の、今日の

ヒッキーも。ちゃんと本物にも伝えるから。」

由比ヶ浜は泣きそうな顔を必死に耐えながらそう言った。…そうか、『これ』が俺を消す方法なんだな…。確かに言えないだろうな。『俺』が知ったら全力で止めそうだ…。そう思いながら、俺は…。

３３章・ゆきのさん@がんばらない

ついに残るはただ一人。だが…問題は猫耳けもしっぽ持ちと言う事だ…。何でコイツはこんな状態に…と思ったが、最初から雪ノ下以外に原因は無いよな…。猫だし。パンさんだし。さてどうなることやら。

ピンポーン！

朝早くからチャイムが鳴った。

――――――偽八幡（雪）――――――

「おはよう、ネコヶ谷くん。」

「俺は比企谷だ。」

「失礼、噛んでしまったわ。」

わざとだろ…。かみまみたとは言わせん。

「随分早いな。しかも家に来るとはどういう風の吹き回しだ？」

「あなたに会いたかったからよ？」

「なっ…！」

「ふふっ、冗談よ。」
　このアマ…!!
「まあ、会いたかったからと言うのは本当なのだけれど、その、猫耳…触らせて貰えないかしら。」
「触らせたら…何かしてくれるのか？」
「…ゲスね…私に何かいやらしい事をさせようという事なのでしょう？……いいわ、私の」
「だが断る！この比企谷八幡が最も好きなことの１つは、自分に価値があると思ってる奴に『ＮＯ』と言ってやることだ。」
　決まった…。ずっと言ってみたくて仕方なかった言葉の第４位の台詞が言えたぜ。
　つーかいつもの雪ノ下なら我慢してそういうの隠すんだが、コイツ今自分の何をどうしようとしてたんだ？禁断症状でも起きたのか？
　ガシッ。
　ん？
「雪乃さんいらっしゃいませ～。さあいくらでも触っちゃって良いですよ～。」
「小町、お前…！」
「フフフフ…比企谷くん、覚悟することね…。」

「や、やめろ…!!い、いやああああああああああ!!!!!!」
このあと目茶苦茶猫耳をナデナデされた。

「ふう…。」
コイツ、満足した顔しやがって。何か大事なものを失った気がするぜ…。
「小町さんありがとう。危なくこの男に貞操を奪われるところだったわ。」
「おい！一言もそんな事言ってないし、そもそも断っただろうが！」
「そうだったかしら？」
こめかみに手を当てて首を傾げる雪ノ下。何だコイツ、あざとくなっていやがる。可愛すぎんだろうがよーーーーーー!!!…取り乱した。反省している。
「いいんですよ～！雪乃さんのためならこんなごみいちゃんの一人や二人や三人や四人、なんなら百人でも生け贄に捧げるまでありますよ～。」
何その話し方は、小町ちゃん？可愛いけど可愛くないよ？なんならムカつくまである。…俺の話し方の真似ですね、わかります。
「本物の比企谷くんはどうしてるのかしら？」
「お前ら、五月蝿いぞ。せっかくの夏休みだというのに寝られねえじゃねえか。」
「五月蝿いのは貴方よ？」

「いや、そうだけども。俺だけど俺じゃないからね？」
『本物の』俺に対しても容赦しない雪ノ下である。しかしシュールだなこの光景。俺が目の前で怒られるのを見るというのは。
「ああ、兎に角静かにしろ。じゃあな。」
「ええ、さようなら。」
　ニコニコしてるんだけど雪ノ下はいつもの如く何か怖いオーラを纏っている。
「ところで―俺のこの耳と尻尾取れないけどどうすんだ？出かけるにもこれじゃ行けないだろ。」
「そうだったわね…どうしようかしら。」
「ふっふーん、小町にお任せだよ～！はいこれお兄ちゃん！」
　小町がフード付きの丈が少し長い服を取り出す。
「猫耳はフードで、尻尾は下の部分で隠せってことか。」
「そう！これで雪乃さんとの『デート』に行けるんだよ！小町的にポイント高い！」
　あーあーそうですね、最後の台詞がなければね。
「デート…。猫耳とパンさん尻尾の比企谷くんと…。」
　何か雪ノ下が小さい声でブツブツ言ってるが気にしないでおこう。何か怖いしな。
「じゃあ行くか。何処か行くところ決まってるのか？」

「え？ええ、勿論よ。ここよ。」
　雪ノ下があまりない胸を張って（なんか寒気がする）、一枚の紙をどや顔で見せてくる。
「アニマルテーマパーク、わんにゃんランド…。成る程な。最近出来たとこか。」
「小町も行きたいから今度連れてってねお兄ちゃん。」
「本物の方に言えよ。」
「あーそうだったね。わかった！」
　うんうん素直で宜しい。俺に集る気満々なのは癪にさわるが、可愛いから許す。可愛いは正義だからな。ソースは戸塚。戸塚は天使、つまり正義そのものだからな。
「さて行きましょうか。寄って行きたいところもあるのだし。」
「寄って行きたい？何処だ？」
「ふふ、着いてからのお楽しみよ。」

　そこには…魔王がいらっしゃった。いや、すまん、陽乃さんが居た。駅前の喫茶店のあまり目立たない席に。陽乃さんは目立ってるけど。
「ひゃっはろー比企谷くん。ふむふむ、あ～本当に猫耳とパンさんの尻尾があるんだね～。」

「あんまりジロジロ見ないでくれますかね。雪ノ下さん。」
「陽乃でいいよ、比企谷くん。うむ、なかなか可愛いよ、比企谷くん。触ってもいいよね？」
　え、何この人。躊躇いが微塵も感じられないんだけど。
「いや、ダメ…」
「よいではないか、よいではないか～。」
　…結局また触られた。どさくさ紛れに雪ノ下まで今度はパンさんの尻尾まで触って来やがった。
「いや～、満足満足。雪乃ちゃんも楽しそうで良かったよ。そうそう、比企谷くん。」
「…なんすか？」
　ちょっと不機嫌に応える。
「雪乃ちゃん不幸にしたら許さないからね？」
　耳元でそう呟く。ゴクリ、と俺の喉がなった。
「なーんてね。雪乃ちゃん、楽しんでおいで～。」
「ええ。姉さんも彼氏さんと楽しんで来て。」
「うんうん、じゃあね。」
　陽乃さんに彼氏…だと…？魔王も遂に陥落したのか。…御愁傷様です、知らない彼氏

さん。

つーか、この二人随分仲良くなったな。

34章・デート・ア・リーブ

アニマルテーマパーク・わんにゃんランド。最近出来た犬好きと猫好きの為の施設だ。そんなに大きいわけではないが、それぞれのいろんな種類と戯れることが出来る。無論キチンと犬コーナーと猫コーナーに分かれているため、雪ノ下でも来れる。雪ノ下は犬が苦手だからな。ちなみに俺も猫コーナーに行く。ここは実は客も猫耳や犬耳着けてたりするのだ。違和感もなくいられる。ところで…。

「猫…猫…。フフフ…。」

弱冠テンションがおかしくなってる雪ノ下。これダメなヤツだ。

「雪ノ下。落ち着け。普段の冷静さが無くなってるぞ。」

「はっ。な、何かしら。私は、至って、れ、冷製なのだけれど。」

冷静な。冷製ってパスタか何かになるのか？

「猫も流石にそんな態度だとビビるだろ。落ち着け。」

「そ、そうね。コホン。じゃあ行きましょうか。」

軽くスキップしそうな感じだな。ワクワク隠せてないし。鼻歌聴こえるし。

「スコティッシュフォールド…。アメリカンショートヘア…。三毛猫にヒマラヤン…。

ここは天国かしら…。ニャー、ニャー？ニャアニャア～。」
猫語で話すな。可愛くてつい抱き締めちゃって通報されるだろ。通報されるのかよ。猫耳も着けてるし、猫尻尾（スカートの上に安全ピンで留めてるみたいだ）まで着けてる。
「こっちはラグドール…あっちはシャム…どれも捨てがたいわ…。こ、この子はペルシャの子猫！わ、私を悶え殺す気なのかしら…！」
また冷静さを失った。コイツ、普段と違いすぎだろ。
「肉球…ぷにぷに…。」
子供か。
「比企谷くん。」
「な、何だ。ビックリするだろうが。」
「さぁ、ねこ狂いましょう！」
…。ダメだ。どっかのギャンブル狂の少女みたいになった。確かに声はそっくりだけども。あっちは胸もあ…何か寒い気がするぜ。風邪かな？雪ノ下さんの冷気ですね。本当に冷製なのかコイツは。

当然だがここには一応猫カフェもある（犬コーナーにも犬カフェがある）。そこで猫

の形をしたケーキやら肉球型に形どられたハンバーグやらがあって、雪ノ下は苦手な携帯を一生懸命に操作して写真を撮りまくっている。普通の女子高生か。
「なあ、雪ノ下。お前、熱でもあるのか？今日のテンションがおかしい気がするんだが。」
「にゃ⁉…コホン。何かしら？」
コイツ今絶対にゃ⁉って言っただろ。
「私は熱なんて無いけれど。ま、まあ、比企谷くんとここに来れて少しは嬉しいという事、なのかしら。」
で、でれのん、だと…!!　か、可愛いとこもあるじゃないか。
「一人だと貰えない猫グッズがあるの。由比ヶ浜さんは猫じゃなくて犬コーナーに行ってしまうし。比企谷くんもこういうときは役に立つのね。」
…。前言撤回。やはり雪ノ下だ。おにのんめ。
「次はあそこへ行きましょう。」
土産品コーナー…か。しかも少しゲーセンみたいな物もあるな。
「これなのだけれど。どうやら私はこれは苦手なようで、前回５０回試したのだけれど取れなかったの。」
「５０ってお前…。ただのＵＦＯキャッチャーに…。」

下手すぎだろ。
「比企谷くんならいつも一人でやってそうだし、取れないかしら。」
「一人を強調するのはどうしてでしょうかね。…ま、否定はしないけど。」
「悲しい事実ね…。冗談だったのだけれど…。」
哀れみの目を向けるな。泣きたくなるだろ。
「これは普通に引っ掛けるんじゃなくて、ここをこうして…。」
「え？それじゃ少し行き過ぎではないの？」
「まあ見てろ。」
１回目は少しずらす。引っ掛けるのは取り付けられた紐だと滑って落ちてしまうからだ。無論ボディ部分もダメ。重さで落ちてしまう確率が高いため、回数がかかる。狙うのはタグだ。今は隠れて見づらい。だからまずはずらす。そして２回目でここに引っ掛ける。タグの穴は小さい。引っ掛ける事が出来ればちょっとやそっとじゃ落ちないのだ。勿論それなりに技術がいるが。
「ほらよ。」
ぽいっと雪ノ下にその猫のぬいぐるみを投げる。
「あ、ありがとう比企谷くん。」
何かポーッとしてるけど大丈夫か？

「顔赤いけど本当に風邪でもひいてるのか？」
「え？いえ、大丈夫よ。それじゃ次に行きましょうか。」
逃げるように早足で次の場所へ行ってしまう。

結局土産のコーナーで大量に猫グッズを買った後でまた猫と戯れて、最後にペア限定のグッズを帰りに貰い雪ノ下の家に帰ってきた。俺は帰って、じゃなくて来ただけだが。
「お茶くらい出すからあがって。」
「あ、ああ。」
雪ノ下の家にお邪魔する。夜に二人きりでここにいるのは初めてなので緊張する。
「どうぞ。」
「お、おう。サンキュ。」
「今日はありがとう。とても楽しかったし、欲しいものも手に入って凄く満足したわ。比企谷くんのおかげよ。大切にするわ。」
「ああ、気にすんな。俺もまぁまぁ楽しかったしな。」
「そ、そう…。」
雪ノ下はそう言って無言になる。

「さ、さて帰るかな。」
「待って。比企谷くんに話があるの。比企谷くんの分身、つまり貴方を消す方法でもあるのだけれど…。」
「お、おう。」
　スーハースーハーと何度も深呼吸する雪ノ下。どうしたんだろうか。
「雪ノ下？」
「ま、待って。少し緊張しているのよ…。貴方が消えてしまうことでもあるのだし…。」
「消えるのは必然だ。俺は本来居ちゃいけないものだろうしな。」
「…そうね。比企谷くんに迷惑だったかもしれないけれど、今回のこれは私達７人が七夕に願ったことが原因だと思うわ。」
「願い？」
　馬鹿みたいな話だが、雪ノ下は冗談を言うようにはなったが、嘘はつかないだろう。そして実際、雪ノ下達７人はちゃんと俺ら分身を消している。
「正直に言うわ。…私は、比企谷くんが、比企谷くんを、す、好きになったの。…七夕の願い、それはみんな、貴方に告白する勇気を得るために書いているのよ。…勿論私も…。」
　雪ノ下達が…。そうか…。だから、これは…。

「ひ、比企谷くんを愛して、います。…こんなこと、言うことなんて、もうないと思っていたけれど、私はこの2年で、貴方が好きになったわ…。この想いは勘違いではない。私の、雪ノ下雪乃の『本物』。今日は、ここまで…貴方は消えてしまうけれど、いつかの約束守ってくれてありがとう。好きよ、比企谷くん。またね。」

雪ノ下は笑っていつものように俺に小さく手を振ってくれた。…約束、か。

『いつか私を助けてね。』

守れてたのかね…。

３５章・実は私達は

７人の偽物の俺が全て消え、今―俺は非常に困っている。
一つは海老名さんと戸部のこと。由比ヶ浜から連絡が来て、二人が付き合っていると聞いた。
もう一つは陽乃さんのこと。こっちは雪ノ下から連絡が来て、彼氏が居るという。
二人、いや三人とも俺と少なからず関わった人達だ。お祝いをしなければいけないのだろう。戸部と海老名さんの事はそもそも俺の偽物が祝ってやろうと由比ヶ浜に言ったらしいし、これは仕方ない。
問題は陽乃さんだ。
あの人にはあんまり世話になってない。むしろ引っ掻き回されて迷惑を何度も被った。だが…雪ノ下から祝いたいと言われた。…断りてえ…。
更に言うなら―これは一色から聞いたが、三浦と葉山もいつの間にかくっついてた。葉山グループは相変わらずらしいが、大和と大岡の二人が不憫で仕方ない…。
全員一応知り合いみたいなもんだが、祝ってやるべきか…。小町は生徒会の手伝いやら由比ヶ浜達と遊びに行ったりしていて、相談する暇がない。

どうしようかと悩んでいると、携帯の着信音が鳴り響いた。画面には…雪ノ下と表示されている。
『もしもし、雪ノ下ですが。』
「おう、どうした？」
『あら？引き算くんかしら？』
「ちげーよ、俺の名前は比企谷だ。」
『失礼、噛んでしまったようね。』
「わざとだろ…。」
「ところで比企谷くん。」
かみまみたって言わないのかよ！期待させんな。キメ顔で言ってそうな声しやがって。
『今日暇ね？』
「…決定なのか？」
『あら？違うのかしら？』
「いや、違わないけど。」
少しくらい違うことを考慮しろよ。
『今日は私の家で話があるから来てくれるかしら？』

「まあいいけど。」

　雪ノ下の家に着いた。何の用事か知らんが、早く済まして帰ろう。
「ヒッキーやっはろー！」
「おう、由比ヶ浜か。相変わらずアホっぽいな。」
「いきなり馬鹿にされたし⁉」
　うんうん。由比ヶ浜は平常運転だな。
「さてと。」
　ピンポーン。
『雪ノ下ですが。』
「無視されたし…。」
「比企谷だけど。開けてくれ。」
『あら？もう来たのね。まだ由比ヶ浜さんも来ていないのだけれど。』
「由比ヶ浜ならここにいるぞ。」
『わかったわ。どうぞ。』
　雪ノ下の家はこないだ来たっきりか。偽物は来てたと思うが。
「いらっしゃい。」

パンパンパパン！

部屋に入った途端、クラッカーの音が鳴り響く。なんだなんだ⁉

「比企谷おめでとう！」

「な、何がだ。」

折本に訳もわからないうちに祝われる。

「八幡、本物だけになったんでしょ？良かったね！」

「お、おう、ルミルミか。」

「留美って呼んで！ルミルミはダメ！」

怒られた。

「比企谷くん。貴方を呼んだのは他でもありません。今までの事を全て話すわ。…緊張するけれど…」

そして雪ノ下は今までの経緯を全て話してくれた。

ここにいる7人は全員俺が好きだということ。

俺に対して告白したかったということ。

それを七夕の短冊に書いた結果、俺が意図せず増えたこと。

俺の偽物を消すために、デートの後で告白していたこと。

そして雪ノ下の告白で全員が消えたこと…。

それらを言ってる間、全員顔を真っ赤にしていた。無論俺も。だがそれよりも…。
「私達は貴方が好きになってしまったの。…わかってもらえたかしら？」
…。
「ヒッキーあたし達はヒッキーが好き。」
…めろ。
「先輩。わたし達は先輩が『本物』なんですよ。…だから先輩も『本物』を…教えてください。」
やめてくれ…。
「…あんたが好きになってくれた人に、そういう感情に臆病だってことは知ってる。だけど、私達はあんたが好きなんだ。これは勘違いじゃないよ。」
もう、やめてくれ…。
「比企谷には迷惑ばかりかけちゃったうちだけど、うちらの気持ちは嘘偽りじゃなくて、本当だから。…これならうちでも自信もって言えるから。それに最近またうちにも友達出来たしさ。…ここにいるみんなとか。」
なんで、俺なんだ…。
「八幡。私達は誰が八幡の『本物』だって、絶対悲観しないよ。八幡が教えてくれた色々があるから。」

俺なんかが…。

「それある留美ちゃん！私も比企谷に沢山貰ったー。何でも流されちゃってた私でも最近は自分で決められるようになったー。」

「違う！」

俺の叫び声で全員が固まる。俺はまた泣いてしまっていた。

「俺じゃないんだ。俺はお前らを救ってた訳じゃない。全部俺の為だ。俺が俺を救うためにやってたことだ。ぼっちだぼっちだ、なんて言っておきながら俺は結局他人を求めてたんだよ。寂しかったんだ！一人が好きだと言っておいて、奉仕部も行かなければいいのに行ってた。内申点なんて変わらないのにだ。お前らを助けた気になって、それで良かったんだとごまかし続けてたんだ。そんなのは自己満足だ。恋愛？俺が本物？俺はそんな気持ちを受け取る資格なんて無いんだ。お前らを救ったのはお前らだ。俺じゃないんだ…。」

「ヒッキー…。」

涙が溢れて止まらない。いつか俺が馬鹿にしていたリア充に、俺は内心でなりたかったのだ。それが『偽物』でも、掴めればそれが『本物』だと言い聞かせて。それを他人にまで押し付けて。

「比企谷くん。」

「…な…」

パァンッ！

雪ノ下に呼ばれ、振り向いた瞬間。俺は頬に衝撃を受けた。雪ノ下に叩かれたのだ。

「貴方に資格がない？私達の気持ちを受け取るのに、資格なんて要らないのよ。そして貴方がいつか私達を助けてくれた事は貴方だけで勝手に決めて良いことじゃない。それは私達が決めることよ。私達が救われたのは物理的にじゃないの。貴方が居たから、自分で解決できた。貴方がきっと間違ったときに正してくれるって信じることだけで、私達は進むことが出来た。奉仕部の理念そのものでしょう？私達に貴方は救われる方法を教えてくれてたの。…比企谷くん。貴方が求めていたものこそ、貴方の『本物』じゃないかしら？間違っていいの。きっとみんなで少しずつ修正していくことが、『本物』だと思うわ。…偽物の、貴方の分身は貴方の心の中の一部だったのね。今の貴方よりずっと素直だったもの。」

心の中の一部…。

「そうだよヒッキー。ヒッキーの分身はあたしのこと応援してくれたよ。あたしに告白する自信をくれるために結衣って呼んでくれた。」

素直に、か…。

「先輩責任取る時が来たんですよー。諦めてください♪」

俺の答えは――。

３６章・やはり俺の青春ラブコメは…。

「俺は…奉仕部に入ってからの1年半、凄く充実した高校生活を送った気がする。それは…ここにいるお前らや、小町、戸塚、葉山、三浦、平塚先生、海老名さん、戸部、材木座…はどうでもいいか。その他にも沢山のみんなに関わっていろんな体験をしたからだと思う。」

誰一人欠けても成り立たない。そんな体験。

「時にお前らを傷つけただろう。時に俺自身後悔したこともあっただろう。ぼっちじゃ絶対出来ない体験をお前達がさせてくれた。」

俺が話している間、誰もが静かに聞いてくれている。あの騒がしい折本すら。

「さっき留美は俺から色々教わった、と言ってくれたが、逆も然りだ。俺もみんなから沢山教わった。それは俺一人じゃ手に入れられないものだろう。」

他人を信じられなくなった俺が、再び信じようと思える気持ちになれた。

「折本には中学の頃に一度フラれた。だが、アレも必要な体験だったんだろう。折本とは仲良くなれそうだと今なら思える。」

きっと以前の事なんて忘れる日も来る。

「留美、お前にはぼっちはどんな強さも持ってるような言い方をしたが、間違いだ。ぼっちは強くない。強がってるだけだ。ソースは俺と雪ノ下だ。」

結局一人では二人とも何にも出来なかった。…自分を救うことすら。

「相模、あの時酷いこと言ってごめんな。でもああでもしなきゃ俺と一緒で捻くれてたお前は自分を取り戻せてなかったかもしれない。捻くれもの同士これからは仲良くなれるかもな。」

少しは素直になれているのか、俺自身にはわかりかねるが、きっと変われてる。

「川崎、まずは最初にパンツ見てすまなかった。」

「ちょ、あ、あんた……！」

「だがあれは事故だから許してくれ。川崎は最初は怖いヤツだと思ってたが本当は優しいヤツだった。文化祭の時に愛してるとか言っちまったが、ある意味じゃ間違って無かったと思うぜ。」

目茶苦茶恥ずかしいセリフだったが、きっと本心でもある。川崎真っ赤になったけど大丈夫か。

「一色、1つ謝る事がある。お前を言いくるめて生徒会長にしたのは奉仕部を守るためだった。あの時俺はお前の事はどうでもいいとか思ってたから。」

「酷いですよせんぱーいー！」

「だから悪かったって。今はお前も可愛い後輩だ。色々無責任な事も言ってしまったが、忘れてくれ。」

奉仕部を守りたかった。俺の居場所はあそこだけだと思ってたから。だが今は…。

「由比ヶ浜、雪ノ下。奉仕部は俺にとって、何よりも大事な、大切な場所になった。それはお前達が居てくれたからだ。奉仕部に入って良かったと思う。二人に出逢えて良かったと思う。由比ヶ浜、お前はアホだけど、」

「アホじゃないし！」

「いいから聞け！アホだと思ってたけど、俺よりも俺の事を、雪ノ下よりも雪ノ下の事を考えてくれる凄い奴だと思う。それはただのアホじゃ無理だ。お前は凄い力を持った――アホだ。」

「結局アホって言われたし⁉」

「雪ノ下、お前は最初凄い奴だと思ってた。」

「あら？今は違うのかしら？」

「そうだな。お前は、俺達と何にも変わらない。凄い奴じゃないよ。普通のちょっと色々出来ちゃうってだけの女の子だった。弱さもちゃんと持ってたし、由比ヶ浜に会ってからは優しい顔もしてた。」

由比ヶ浜も雪ノ下も優しさがあって、弱さもあって。きっと誰もがそうなのだろう。

「ずっと悩んで来たが、俺の選択が正しいのかわからない。だが、雪ノ下もさっき言ってくれたように、間違ってもいいのなら、俺は選ぶ。」

例え間違っていても後悔はしない選択をする。それがどんなに難しいことか俺は知っているが、今回は絶対に大丈夫だ。コイツらがいるんだから。

「俺は―お前が好きだ。雪ノ下。」

初めて奉仕部で会ったときにはもう惚れていたのかもしれない。窓からの光に照らされた少女の、雪ノ下の姿に。

「…比企谷くん…。う、嬉しいのだけれど、どうして、わ…私なのかしら…。こんなに…こんなに面倒な性格で…強くないのに強がって…何度も比企谷くんを、からかって…何故…なの？」

雪ノ下は目に涙を浮かべてそう尋ねてくる。

「俺も同じだからだ。俺とお前は違うようで同じなんだ。強くないのに強がるし、人をからかうのも嫌いじゃない。それに雪ノ下のからかいは、今は逆に居心地がいい。いつも冷静なのにたまにパニクって、由比ヶ浜よりポンコツになっちまうところが好きだ。」

誰よりも弱く、誰よりも強い、そんな少女を知っているから。

「由比ヶ浜も好きだった。他のみんなだって好きなんだとは思う。だが、一人を選ぶなら俺は雪ノ下を選ぶ。お前達に劣ってるところなんて一つだってないと思う。むしろ雪ノ下の方が、俺には弱く見えた。お前達の誰よりも。…守ってやりたい、そう思った。」
「ヒッキー…。うん。知ってる。ゆきのんは本当はあたしよりも弱さを持った可愛い女の子だもん。あたしは意外と大丈夫だったけど、ゆきのんはフラれてたら…。それにしても…あ～あ、やっぱりゆきのんだったか～。ずっとわかってたけどね。」
「すまん。」
「謝っちゃダメ！後悔はしないんでしょ？いいよ、あたし達の関係に変わりがあるわけじゃないし。ゆきのんもヒッキーも変わらず友達だよ。」
「ありがとう、由比ヶ浜さん。」
「私達も、ね。比企谷～こんなに可愛い彼女出来るなんてやるじゃん！…やっぱり勿体なかったな～。中学の時に告白受けてれば～。」
「比企谷、たまにでいいからけーちゃんと遊んであげてよ。私の事はいいからさ。…雪ノ下さんと、さ。」
「私とも遊んでね、八幡。…雪乃も。」
「おう、いいぞ。」

「…ええ。私も。」
「うちも彼氏ゲット出来るかな…うちショボいし…。」
「お前だって容姿は良いんだし、大丈夫だろ。…性格は直せよ？」
「なに～！」
「悪い悪い。冗談だ、今は相模もいい奴だと思う。」
「先輩。」
「ん？なんだ一色。」
「雪ノ下先輩が、先輩の選んだ『本物』なんですね？」
「…ああ。」
「…それでも絶対わたしは諦めませんからね～！雪ノ下先輩に飽きたらいつでも来ていいんですよ？」
「あざといあざとい！上目遣いで見るな…ってイテテテテ、何すんだ雪ノ下！」
「鼻の下が伸びてるわ、エロヶ谷くん。」
「伸びてねえよ！」
「ヒッキーあたしも、まだ諦めないから！ゆきのんからきっと振り向かせて見せるから！」
「だから由比ヶ浜はくっつくな、胸が当たるんだよ！」

「ヒッキーのエッチ！」
「理不尽だろ！だからいてえって雪ノ下！」
騒々しくも心地いい空間。１年の時には知り得なかった予想も出来なかった光景だ。
「さてと、じゃあゆきのん、ヒッキー。恋人になったんだから、恋人の証明を見せて！」
「な、何だよ。」
「きまってるじゃないですか～♪キ・ス・ですよ～♪」
「お前ら…！」
「ひ、比企谷くん…。」
「なん…」
横を向くと雪ノ下が目を閉じて待っていた。
「～～～!!」
俺は頭をガシガシと掻き、そして―
「イエーイ、比企谷やるじゃーん！」
「き、キス…。」
「ちょっと川崎さん大丈夫⁉」
「沙希、乙女過ぎ。」
「おめでとう、ヒッキー、ゆきのん！」

「これからも雪ノ下先輩と仲良くしてくださいね、せーんぱい♪」

ゆっくりと唇を雪ノ下の唇から離す。俺も雪ノ下も真っ赤になって俯いた。周りにからかわれながら。

「…よろしくね、比企谷くん。」

…やはり俺の青春ラブコメは間違っている。

エピローグ

夏休み。それは学生にとっての休息を取る日であり、何をしても自由な期間である。当然ながら、学校で普段から会っている奴らにも会わなくてもいいはずなのだ。無論学校に来るなどもってのほかだ。…だが、俺は何故か今校門の前に来ていた。

『先輩、明日暇ですか？暇ですよね？じゃあ明日朝８時に校門の前に集合してくださいね。でわ～！』

という、有無を言わせない電話が昨日一色からかかってきたのだ。一体何なんだ…。無視しようかとも思ったが、小町に怒られた。小町には言い訳の様に雪ノ下と付き合うことになったから、一色の誘いを受けるのはダメだろうと言ったのだが。

「え、お兄ちゃん遂に雪乃さんと付き合うことになったの⁉いや～それはおめでたい、じゃあ明日やっぱり行かなきゃだよ！小町も行くことになってるから。」

と、明らかに棒読みで言われた。絶対知ってたなアイツ。しかも雪ノ下も来るらしいし。…ちょっと気恥ずかしくてあれから会ってないんだよな～。電話はするけど、誘うのは出来てない。

「おや？比企谷じゃないか。君も呼ばれたのか？」

「お～、ヒキタニくんっしょ～。久しぶりだべ。」
「…葉山と戸部か。」
　コイツらいつの間にか彼女作ってたんだよな～。三浦とか海老名さんとか。一応祝っておくか。
「お前ら彼女出来たんだってな。おめでとさん。」
「バレてたのか。…一応礼を言っとくべきなのかな?ありがとう。…翔も出来たのか?」
「え⁉なんで知ってんの、ヒキタニくん。俺、まだ誰にも言ってねえっしょ。ヒキタニくんパネエわ。」
「こないだ海老名さんと手を繋いでたの見たしな。由比ヶ浜も一色も知ってるぞ。」
「あちゃー、ハズいわ～。っべーわ、夏休み明けに言おうと思ってたのに、っべーわ～。」
　相変わらずべーべーうるさい奴だな。
「そうか、姫菜と…良かったな。翔。」
「サンキューっしょ、隼人くん。」
「ぐ腐腐腐腐腐…朝からハヤハチキマシタワーーーーーー!」
「うるさい姫菜、自重しろし。隼人おはよー♪戸部も。アレ、ヒキオじゃんなんでいるの?」

いや、なんでいきなり存在否定みたいなこと言われてるんですかね。
「一色に呼ばれたんだよ、急に。」
「なに、あんたも呼ばれたの？いろはあんた好きすぎでしょ。」
「そういう訳じゃねえけどな。」
つーか呼ばれた理由大体わかったし。やべえ、帰りたい。ポンポン痛くなってきた。
…すまん。
誰にとも無く謝っていると、後ろから声をかけられる。
「ひゃっはろー、隼人に比企谷君。それに優美子ちゃんと翔君と姫菜ちゃん。そーいえばカップルなんだねそこの４人は。いろはから聞いたよ～。オメデトー。」
「あざっす、雪ノ下さん。」
「ああ、ありがとう陽乃さん。」
「ありがとうございます、雪ノ下先輩。」
「…あんがと。」
「で、ジャジャーンこっちの彼が私の彼氏です！」
そう言われて出てきたのは、とても優しそうだが、意志も強そうな目をした青年だった。陽乃さんと同い年くらいか。
「どーも、はじめまして。陽乃さんとお付き合いさせてもらってる桐生竜也です。一応、

陽乃さんと同い年だよ。」

話し方もきちんとしているが、ちゃんと優しさも滲み出ている。こういう人が陽乃さんには合っているのかもしれない。挨拶を一通りしたところで、陽乃さんから訊かれる。

「あ、そうそう、比企谷君。今日は彼女はどーしたのかな？」

いきなりの事で飲んでいたマッ缶を噴き出す。

「ゲホッゲホッー…何すか急に…。」

「え⁉ヒキタニくん彼女出来たの？っべーわ、オメデトーっしょ。」

「マジ？誰だし。」

「へ～。比企谷君がね～。」

「それは興味深いな。誰なんだい？」

何なんだコイツら…！

「やっはろー、みんな！…どうしたのみんな？変な顔して。」

「「「結衣⁉」」」

お、シンクロした。

「な、何⁉」

「結衣、あんたヒキオと付き合ってんの？」

「え、あ、アハハ…それは違うかな。」
「じゃあ誰だし！つーかヒキオ結衣フッたん⁉」
「いや、フラれたけど別に大丈夫っていうか…。」
　おいおい、何か不穏な空気なんだけど。陽乃さんは相変わらずか…。
「ごめんねー、比企谷君。」
　いや、全然反省してないよこの顔。目茶苦茶笑顔じゃん。そうこうしてると校舎から一色がテトテト駆けてくる。
「先輩、いつになったら校舎に入ってくるんですか～。メール送ったの見てないんですか～？アレ？みなさんも来てたんですね？」
「ちょっといろは、あんたがヒキオの彼女なん⁉」
　何でそんなにグイグイ行くのこの女王様。
「えー、違いますよー。わたしもフラれましたしー。三浦先輩怖いですよー。と、とりあえず、奉仕部の部室に来てください。」

　全員で奉仕部に行くと、中には戸塚、材木座、相模、折本、川崎、留美、小町。そして、俺の彼女である雪ノ下が、何故か白いウェディングドレスを着ていた。…やべえ、俺の彼女スペック高すぎる。一部を除い…これ以上はやめておこう。一緒に来たみんな

がそれぞれ感嘆の声をあげている。
「おはよう、比企谷くん。」
「あ、ああ。おはよう雪ノ下…。」
心臓が大きく波打つ。…生きてきた中で一番ドキドキしてる。
「何でウエディングドレスを着てるんだ?」
「本当の時にみんなが来れるかわからないからですよ〜。先輩友達いないですし。それに先輩へタレだから生きてる間に結婚式するかわからないですし?雪ノ下先輩可哀相じゃないですか〜。さ、先輩もこれに着替えて来てください。」
「…マジか。」
ただバラされるだけだと思ってたのに。

着替えて戻って来ると正面に平塚先生が立っていた。みんなは通路を作るように二手に分かれて座っている。俺はその通路を歩いていき、雪ノ下の隣に立つ。
「まったく君らは…。私にケンカを売っているのかね?こんな役をやらせて…。しかしまあ嬉しいのも事実だ。君が雪ノ下とこんなことになるとはな。青春は大事だからな。」
「そっすね。」

青春を色々台無しにしてきた人の言葉は重みがあるなー。
「さてと。では、雪ノ下雪乃。君は病めるときも～（中略）～比企谷八幡を愛することを誓うかね？」
「ち、誓います。」
やべえ、ハズい。
「うむ。では比企谷八幡。君は病めるときも～（中略）～雪ノ下雪乃を愛することを誓うかね？」
「…誓います。」
「よろしい。ならば、誓いのキスをしたまえ。」
俺は雪ノ下の顔にかかったベールをずらし、雪ノ下と唇を再び重ねる。部屋のそこかしこで歓声があがり、どうやら祝われているようだ。
「…ありがとう、好きよ比企谷くん。」
「…ありがとな、好きだ雪ノ下。」
「コラコラ、私の前でいちゃつくんじゃない。」

その後、４組のカップルを祝うために２次会の会場へ移動した。それぞれがあるいは騒ぎ、あるいは静かに笑って話をする。…平塚先生酔って号泣してるんだけど。彼氏欲

しい、旦那が欲しいって。…ともかく、きっとこれが俺の欲しかった『本物』なのだと思う。少しすると葉山が隣に来た。
「君が雪乃ちゃんを選ぶとはな。」
「お前だって三浦を選ぶとは思わなかったよ。」
「…そうでもないさ、俺は優美子が好きだからな。」
「…そうだな。俺も雪ノ下が好きだ。お前は嫌いだけどな。」
「はは、俺もだよ。…なあ比企谷。雪乃ちゃんを頼む。俺は雪乃ちゃんを救えなかった。お前にしか頼めない。」
「…それは依頼か？」
「…ああ。」
「…仕方ねーな。任せろ。」
　雪ノ下がこっちを向いて微笑む。…いつかまたこのメンバーと、親達を呼んで本物の式を挙げたいと俺は願った。きっと叶う。願い事は叶うと証明されたのだから。

完